顔十郎罷(まか)り通る 下

柴田錬三郎

講談社文庫

し2-19

カバー装画　東啓三郎

顔十郎罷り通る 下

柴田錬三郎

講談社文庫

柴田錬三郎
し2-19
顔十郎罷り通る 下
講談社文庫
¥400

顔十郎罷り通る 下
柴田錬三郎
定価400円
し2-19

金と女に生命をかける、天下放浪の仕事人、顔十郎とは一体、何者？――東海道を西に走り、島津家お由羅騒動に首をつッ込み、東に奔っては亡命清国皇太子をめぐる陰謀の渦中に躍る。やがて千姫伝奇に由来する熊退治に辛駄天走る。宿命的対立、恋を絡めて冒険は終幕へ。断固面白い！柴錬面目躍如の時代ロマン。

ISBN4-06-183660-9 C0193 ¥400E (O)

講談社文庫

柴田錬三郎 作品

三国志英雄ここにあり(上)(中)(下)
決闘者 宮本武蔵 少年篇
決闘者 宮本武蔵 青年篇
決闘者 宮本武蔵 壮年篇(上)(下)
柴錬捕物帖 岡っ引どぶ
柴錬捕物帖 岡っ引どぶ(続)
異常の門(上)(下)
源氏九郎颯爽記
秘剣揚羽蝶 源氏九郎颯爽記
血汐笛
お江戸日本橋(上)(下)
おれは侍だ
顔十郎罷り通る(上)(下)

顔十郎罷り通る
下
柴田錬三郎

顔十郎罷り通る
下
柴田錬三郎
講談社文庫

講談社文庫

顔十郎罷り通る
下

柴田錬三郎

講談社

目次

帝王の子……七
深夜の座……三〇
しびれ酒……三五
独妙剣……四九
闇中問答……六三
修羅街道……七八
黄金窟……九二
陰謀熊……一〇六
裏店大名……一三〇
千姫伝奇……一三四
贋行列（にせ）……一四八

顔十郎罷り通る(下)

不思議の勝利……一六三
黒姫島……一七五
姉の仇……一八九
秋扇譜……二〇三
修羅図絵……二一七
血闘山……二三一
妖刀……二四五
贋宮本武蔵……二五九
犬死……二七四
消えた夢……二八八
山吹妻……三〇一
解説……磯貝勝太郎　三二六

帝王の子

一

「あっ！　青空だっ！」
長屋の子供たちが、泥溝の中から小判でも発見したように、叫んだ。
「青いなあ！」
「きれいだぞーっ！　おっ母、出てみろ！」
「やあい、お天道さま、顔みせろ！」
夢中で、空へむかって、声をはりあげた。
むりもなかった。じとじとと、十日以上の霖雨で、夜明けまで降りつづいていたのである。
江戸の貧しい人々を、さらに困窮させるのは、雨であった。外へ出て働く日傭取り、大道商売があぶれるのはもとより、魚も野菜も売れなくなる。湯屋さえも、薪がなくなるしまつだった。

また——。

長屋は、雨漏りがする。路はぬかるむ。泥溝は、あふれて、病気をばらまく。臭気は、江戸中にたちこめる、といっても、あながち誇張ではなかったのである。

ここ——市谷八幡の森のある高台と、四谷の台と、二つの丘陵にはさまれた窪地の貧民地域と来たら、まったく、ひどいものであった。

窪地の中央を流れている臭気の満ちた泥溝川の左右に、蜂の巣のように、傾きかかった檐を、互いに支えあって並んだ長屋は、もう数十年前から、変らぬ惨めな光景を呈しているのであった。土方だとか、人足だとか、香具師だとか——。

いや、それらは、まだいい方で、盗人や夜鷹や乞食も、すこしも、自分のやっていることをかくさないでもいい世界であった。

雨が二日も降れば、何も食わずに寝ているよりほかはない世帯ぞろいであった。

子供たちが、歓声をあげたのも、当然であった。子供たちだけは、親が食わずに、ひもじくないようにさせているのか、元気で、声も大きい。

まもなく——。

雲が散って、かっと、拭ったように晴れ渡った。

屋根からも、路からも、泥溝板からも、いきが、たちのぼった。これが、おそろしい臭気のこもったやつだった。

一斉に、襤褸が、おもてへ、かつぎ出されて、これは、惨め乍らも、壮観であった。

顔十郎は、尻端折りをして、板屋根の上へあがって、雨漏りした筒処に、木片を打ちつけていた。

何を好んで、こんな最下等の地域でくらしはじめたのか。そこが、この男らしい、と云えなくもないのだが……。

「暑いな！」

鉄槌をもった手の甲で、額の汗をふきつつ、青空を仰いだ。

照りつける陽ざしは、もはや夏のものだった。

むこうの崖下では、長屋の男たちが総出で、崩れた土を除けている。

香具師も泥棒も毒消し売りも女衒も贋盲の乞食も、黙々として、蟻のように働いている。

その崖の上には、長い築地塀があり、うっそうと巨樹が、緑の壁をつくっている。

内藤駿河守重正——幕閣中に、陰然たる権勢を誇る若年寄の下屋敷であった。

——同じ人間に生れて、こうも、くらしがちがうものか。

今更に、顔十郎は、感慨を催す。

あまりに不公平すぎる世の中である。大名の子に生れれば、少々脳が足りなくても、大名になれる。貧しく生れた者は、一生貧しく、地虫のように生きなければならぬ。

そして、この仕組を、誰も疑ってはいないのだ。

いや、疑っている者も、いないわけではない。ここにも、一人いる。しかし、あまりに尠いし、ばらばらなのだ。

「小父さあん！　……鼻の小父さあん！」

廂の下から、呼ぶ声がした。

となりの家の少年であった。母親は夜鷹であったが、明るい性格の少年であった。

「どうした？」

「ちょっと、降りて来ておくれよ。おねがいがあるんだ」

「いま、行くぞ」

長屋板は、殆ど腐っていて、よほど要心して踏まなければ、かえって、雨漏りの箇処をふやすようなものだった。

鼻がつかえそうな、両側から廂の突き出た狭い路は、泥溝川沿いに、人一人やっと通れるくらいであった。それも、いたるところに、水が溜っている。

ひょい、と身軽く、流れの縁へ、跳び降りた顔十郎は、金太という少年のうしろに、思いがけず、熨斗目の振袖をつけた少年を見出した。旗本か大名の若君といったところである。帯びている脇差も、ふつうの士分の子弟のものではなかった。

その背後に、長屋の子供たちが、もの珍しそうに蝟集していた。

「鼻の小父さん。こいつ、迷い児になりよったので、つれて来たんだ」

「迷い児に？　どこで――？」

「八幡様の森の中に、しゃがんで、じっとしていたんだ」

「ふむ――」

覗き視て、顔十郎は、――はてなと小首をかしげた。その貌が、ふしぎな気品をたたえて、普通の造作ではなかったのである。

――これは、ただの人相ではないが……。

「そなたは、どこの屋敷の子息かな？」

と、訊ねかけると、金太が、そばから、

「駄目だよ、小父さん。唖みてえに、何も云やがらねえのさ。いっぺんだけ、口をきいたけど、ちんぷんかんぷんさ。きっと、バカなんだぜ。西も東もわからねえのさ」

と、告げた。

それをきいたとたんに、顔十郎の脳裡に、ひとつの直感がひらめいた。

――あるいは？

――そうだ、もしかすれば？

二

顔十郎は、少年をぼろ畳の上に坐らせて、しばらく、腕を組んで、正視していたが、やがて、ひと言、妙な言葉で、質問を発した。

すると、少年は、にこっとして、これも、妙な言葉で、こたえた。

「何を云ったんだい、鼻の小父さん？」

うしろにかしこまっていた金太が、訊ねた。
「お前は、清国の若君ではないか、と問うたのだ。そうだとこたえたぞ」
顔十郎は、しばらく、長崎にいたことがある。支那の言葉を、その時に、おぼえている。
少年は、この奇妙な顔つきの大人が、自分の国の言葉を知っているのに、蘇生の思いをした様子で、急に喋り出した。
「待て、待て。そう早口に、やられては、さっぱり、わからん」
顔十郎は、手をふってから、自分の質問にこたえさせることにした。
きいているうちに、顔十郎の表情が、しだいに、ひきしまって来た。
少年は、そのうちに、手真似で、熱心に、何事かを、顔十郎に告げはじめた。
合点するには、ちょっと時間が、かかった。
「よし、わかった」
顔十郎は、大きく頷いて、片手を、少年の頭にのせた。
「金太――」
「うん」
「この子の世話をたのむ」
「引受けたぜ」
金太は、きいたふうに、ぽんと膝をたたいてみせた。

小石川の小日向清水谷に、徳光寺という天台宗の古い寺院がある。
顔十郎が、その山門をくぐったのは、日昏れがたであった。
顔十郎は、ひさしぶりに、やり甲斐のある仕事にぶつかって、爽やかな気分になっていた。
少年は、清朝九世文宗（咸豊帝）の長子黄親王であった。
当時、さしも盛威を誇った清朝は、ようやく落日を迎えていた。
清は、愛親覚羅氏、太祖は努爾哈赤、という。
努爾哈赤は、長白山の麓に起って、満洲諸部を撃ちしたがえ、国号を後金ととなえ、ついで、明軍を破って、都を、瀋陽（奉天）にさだめた。
嗣いで立った太宗は、太祖の第八子で、遠交近伐、大いに領域をひろめ、国号を清とあらため、三世の世祖に北支那を平定して、都を北京に遷したのである。
聖祖、世宗、高宗（乾隆帝）にいたる百三十余年間、清朝はその盛威をほしいままにし――就中、康熙、乾隆二代は、文運武略ともに発達し、内外蒙古を征服して版図に容れ、なお天山南路を平定して、その威光を、シャムや安南にまでおよぼして、朝貢せしめたものであった。
八代宣宗にいたって、阿片戦争が起り、国威は傾き、九代文宗が嗣ぐや、英仏連合軍の侵略は甚しく、また、広西の金田村から起った洪秀全の率いる農民の叛軍（長髪賊）に、悩まされるにおよんで、その前途は暗いものになっていたのである。
いつの時代、いずこの国でも、そうであるように、盛威があまりに大きく、朝廷の豪奢が極まれば、それは、永遠につづくような錯覚が起る。

帝王というものは、国家を挙げて、財力と人力を傾け尽した宏壮(こうそう)優麗(ゆうれい)な宮殿の中に住んでいる。就中、支那の帝王の生活は、今日では、想像もおよばぬ。

「皇居の壮を見ずんば、天子の尊きを知らず」

という語さえある。

秦の咸陽宮は、戦火を受けて炎上するや、炎々として三ヵ月もつづいて、なお全焼しなかった、という。

咸陽宮におよばずとも、北京紫禁城は豪宕雄偉(ごうとう)を誇り、これにくらべれば、江戸城などただの武家屋敷でしかなかった。

よほどの名帝でない限り、そのような宮殿内で、多くの宮嬪(きゅうひん)にとりまかれていると、バカになる。

清の後宮は、歴朝のそれに比べれば、かなり質素なものであった。それでも、妃嬪の居館は、紫禁城の東西に六宮を列ねていた。

九世文宗咸豊帝は、決してバカではなかったが、東南に長髪賊の乱が起っていることを、すこしも知らなかった。

のみならず、英仏連合軍の攻撃に遭うや、なすすべもなく、母の孝貞皇后、妻の孝欽皇后（西太后）とともに、熱河に遁れたのであった。

清朝は、満洲から起っている。

漢人は、満洲人を、軽蔑していた。

長髪賊の頭領洪秀全は、そこをたくみに利用した。

その檄文中に、

「天下は中国の天下にして、胡虜の天下に非ざるなり。宝位は中国の宝位にして、胡虜の宝位に非ざるなり」

とうたって、漢人を唆(そそ)り、百万以上の軍勢を擁するまでに、勢いさかんとなっていた。

顔十郎は、長崎に在った時、清朝戦乱のことをきき、文宗が熱河に蒙塵した噂も耳にしていた。

長子黄親王は、なぜか、父帝にしたがって熱河へ行かずに、日本へともなわれたのである。

少年は、顔十郎の質問にこたえて、自分を日本へつれて来てくれたのは、徳光寺のお坊様であった、とこたえたのである。

三

境内をゆっくりと横切って、方丈へ近づいた時であった。

突然、方丈の内部で、物音が起った。

それは、顔十郎をして、はっと足を停めさせ、次の瞬間、飛鳥のように奔(はし)り出させる物音であった。

顔十郎が、広縁にとび上った瞬間、

「曲者っ！」

悲鳴が迸り、同時に、障子の内側を駆け抜けて行く気配が起った。

顔十郎は、それを追うて、広縁を奔った。

広縁は、障子に沿うて廻って居り、顔十郎がその角に達するのと、黒い影が、躍って、内庭へ遁れるのが同時であった。

咄嗟に、顔十郎は、小柄を抜いて、投げた。

黒影は、後姿をみせ乍ら、身を沈めて、小柄を頭上に走らせた。

忍び装束をしていたが、どこやら、ただの忍者ではない直感が、顔十郎の脳裡にあった。

顔十郎ほどの迅駆けの巧者が、追うのをあきらめねばならないくらい、その足は神速であった。

顔十郎は、方丈へ入って行った。

納所が二人、座敷に仆れて居り、白髯の住職は、茶の間で、床柱に凭りかかって、事切れていた。一太刀で、袈裟がけに斬られていた。

「ひと足、おそかったな。……尤も、ひと足はやければ、おれが、殺られていたかも知れぬ」

首をふった顔十郎は、住職が書きのこした日誌でもないか、とひとわたりさがしてみて、見つけることは叶わなかった。

文目もわからぬように、屋内に闇が罩めてから、顔十郎は、提灯を携げて方丈を出ると、墓地に向った。

顔十郎が立ったのは、歴代の住職の墓が並んでいるところであった。

僧侶の墓というものは、ばかばかしいくらい巨きいものである。それが、十数基ならんでいた。

そのひとつひとつを、提灯で照らして行き、四番目の墓の前に、立ちどまった顔十郎は、

「さて――」

と、仕事にかかる呟きを洩らした。

しかし、うしろに駒下駄の音をきいて、顔十郎は、つと、その前をはなれた。

墓のあいだをぬって、駒下駄は、こちらへ、近づいて来た。

追って来たのである。

「旦那――」

声をかけられて、顔十郎は、なにげなさそうに、ふりかえった。

意外だったのは、こんな墓地におよそふさわしくない、左褄をとった芸妓であった。

提灯の乏しい明りの中にも、仇な美しさが、匂うた。

「やあ、これは――」

顔十郎は、わざと、あかるい大声で、云った。

「狐であっても、化されてみたいようなあで姿だな」

「お願いでございます。提灯のあかりを、ちょっと、お貸し下さいまし」

「亡くなった旦那の墓へ、たずねて来たのか。……闇が怕くないとみえる」

「いえ——。さがしものをしているのでございます。……申しおくれました。わたくしは、深川の檜下の妻次と申します」

深川芸妓が、わざわざ、こんな小石川の古寺の墓地へ、さがしものにやって来る。ちょっと、興味をそそられることだった。

顔十郎は、しかし、何をさがすのだ、と訊こうとせず、提灯を渡してやった。

妻次が、照らしはじめたのは、顔十郎と同じく、歴代の住職の墓であった。

「あ——これだ」

妻次が、声をあげたのは、やはり、四番目の墓の前であった。

「有難う存じました」

妻次は、提灯をかえすと、ぬかずいて、合掌した。

——どういうのだ？

顔十郎は、不審の視線をくれて、そこに佇んでいた。

顔十郎が、この墓をさがしあてたのは、勿論、理由がある。

少年黄親王に、清朝皇嗣子であるという大切な証拠の品を持っていないか、と訊ねたところ、徳光寺の墓地に埋めた、という返辞であった。

目じるしは、と訊くと、大きな丸い墓で、歓喜院という戒名が刻んであった、とこたえたのである。

この芸妓は、こちらが、さがし当てた墓を、おがんでいる。ただ、おがみに来ただけなのか？

妻次が立ち上った時、顔十郎は、こころみに、訊いてみた。

「どんなご利益があるのだな？」

すると、妻次は、

「あ——」

と、夜目にもあでやかに、笑った。

「旦那も、そうでございましたか。どうも、そんな気がいたしました」

「ふむ？」

「夢って、ほんとに、ふしぎなはたらきがあるのでございますねえ」

「ああ、そうらしいな」

女が何を云っているのか、一向に判からぬ乍らも、顔十郎は、あい槌を打った。

「歓喜院様に、お礼を申し上げて、あたしは、ほっといたしました」

「それは、よかった」

「旦那も、お礼参りでございましたか」

「うむ、まあ、そうだ」

顔十郎と妻次は、肩をならべて、墓地を出た。

妻次は、方丈の方を眺めて、

「暗うございますねえ。お住持様は、お留守らしい」

と、呟いてから、

「ね、旦那、失礼でございますが、同じお礼参りに来たのも、ご縁でございます。お近づきのしるしに、一献さしあげとう存じますが、いかがでございます?」

「いいな。こんな尾羽打ち枯らした素浪人を、そなたのような辰巳の一流が、馳走してくれるとは、これも、あの墓のご利益のひとつか。ははは……」

山門に、駕籠が待たせてあった。

遠慮する妻次を、それにのせて、つき添うて歩き出した顔十郎は、

——だんだん、面白くなる。

と、肚の裡で、にやりとしていた。

深夜の座

一

深川の遊び場所は、七つある。土橋、仲町、新地、石場、櫓下、裾継、鷲(あびる)である。

そして、これらは、一様の遊所ではなかった。

呼び出しと、伏玉の二種類にわかれていた。呼び出しとは、茶屋へ女を呼び出して、あそぶのである。こども屋という——今日の芸妓置屋に相当する家があって、そこへ口をかけるのであった。伏玉というのは、酒楼にすまわせている女のことであった。すなわち、酒楼は、女郎屋も兼ねていたのである。

呼び出しは、土橋、仲町、櫓下。伏玉は石場、新地、裾継、鷲など。

江戸名物の深川の羽織芸者は、この呼び出しや伏玉とは、ちがっていた。羽織は、純然たる芸妓で、見識もあったし、気っぷもよく、いやな客なら、三年かよわれても、なびかなかった。

元来、芸妓というのは、深川櫓下と吉原にかぎられて、称(よ)ばれていたのである。

櫓下というのは、芝居町である。

妻次という芸妓が、顔十郎を案内したのは、櫓下にある小さな舟宿であった。

小さなのはいいが、ひどくうす穢かった。職人や手代のたぐいが、そっと逢曳するような家で、二階は一間しかなく、畳も襖も破れ、天井は、しみだらけであった。

深川の流行(はやり)の妓がおごる、というのであれば、さしずめ、二軒茶屋とか平清とか、一流の料亭であろうと思っていた顔十郎は、アテはずれな顔をした。

それを眺めて、妻次は、くすっと、わらった。

「お気に召さないようでござんすね、旦那」

「いや、わしの風体にはふさわしい家だ」

「お酒が、美味しゅうございます。召しあがってごらんなさいまし」
その通りであった。
ひと口、ふくんでみて、
「ふむ！」
と、うなった。
すばらしいコクをもっていた。
のみならず、卓上へ運ばれて来た肴が、ただの割烹の為様ではなかった。
「これア、相当のものだな。まさか、八幡の境内の料亭から、とり寄せたのではあるまいな」
「いいえ。ここのあるじの庖丁でございます」
「名人だな」
「はい」
にこにこと見まもる妻次のすがたが、仇っぽく、艶冶であった。
緋縮緬がほんのりと透いて見える明石縮に、しなやかなからだの方が、しっとりと溶けあっているなまめかしさであった。黒繻子の帯をしめ、水髪には京打簪をさしただけの、地味なすがたが、かえって、粋でさわやかであった。
「どういうのだな、これは？」
顔十郎は、ふっと、真剣な表情になって、問うた。
「佳い夢をみたのでございます」

「それは、徳光寺の墓地で、きいた」
「あたしが、こどもの頃から、忘れられない男が居ります」
「ふむ」
「五年前に、西国へ出かけて行って、消息が絶えました」
「職人か？」
「いえ、御家人で、もう家の方は、あとかたもありません。……かねがね、おれのように、腕の立つのが、公儀の仕組で、生きているのか死んでいるのか判らない貧乏ぐらしをしていなければならねえのは、大まちがいだ、と不平だったのです。ほんとに、腕が立ちました。町道場の先生で、あの仁に、敵う使い手はいなかったのです」
「……」
「それが、五年前に、面白い仕事が見つかった、と云って、ふらっと、江戸を出て行ったきり……それきりになりました」
「行く先をきいておかなかったのか？　西国といっても、雲をつかむようなものだ」
「いえ、訊いたのです。ところが、もしかすれば、おれは、唐天竺まで、飛ぶのだと笑って……」
「唐天竺？」
顔十郎は眉宇をひそめた。
「ええ。一風かわったところのある人でございましたから――」
妻次は、十日ばかり前、恋しい男――後藤宗次郎が、江戸へ帰って来る夢をみた。

なんとなく、正夢のように思われて、大切に胸に抱いていたが、ふと、後藤宗次郎が尊敬していた〝島の殿様〟に、よばれて、座敷に出た時、そのうれしさを口にした。

〝島の殿様〟は、微笑し乍ら、

「あるいは、正夢かも知れぬ。近く便りがあるぞ」

と、云ってくれた。

その通りであった。

長崎から飛脚が、手紙をとどけてくれたのである。

文面は、かんたんであった。

おれの腕が、役に立った。おまえにくれる土産もある。この手紙がとどいて、五日もすぎれば、会えるだろう。小石川の小日向清水谷にある徳光寺に行って、歓喜院という戒名のあるお坊さんの墓に、お礼をのべてくれ。

それだけであったが、妻次は、それを百遍もくりかえして読んだ。

恋しい男は、今日明日にも帰って来る——そのよろこびで、偶然、墓地で出会った見知らぬ浪人者にも、提灯を貸してくれたお礼を、こうしてさせることになった。

「島の殿様というのは、誰だな？」

「五島左衛門尉様でございます。肥前の沖に島をたくさんお持ちの、それはもう、さばけたお殿様でございます」

「五島左衛門尉？」

ちょっと、小首をかしげていた顔十郎は、

「そうか、日本一の貧乏殿様か」

と、合点した。

二

翌朝、顔十郎は、一挺の駕籠につき添うて、市谷台の、大名屋敷や旗本屋敷のならんだ通りを、歩いていた。

駕籠の中には、少年——清朝九世文宗の長子黄親王が乗っていて、隙間から、熱心に、屋敷の正門にうってある紋を見とどけようとしていた。

少年は、大きな屋敷に、数日間置かれていたのである。ともなわれた時、その屋敷の正門にうってあった紋だけを、記憶にとどめていた。

顔十郎が、よく訊いてみると、それは、藤紋のようであった。しかし、少年は、そのかたちを、うまく説明することができなかった。藤紋は、ざっとかぞえても、四十種類ある。のみならず、藤紋を用いる武家は、多い。

顔十郎は、やむなく、少年を駕籠にのせて、その屋敷を、つきとめることにしたのである。

少年は、風雨のはげしい深夜に、何者かにつれ出され、市谷八幡の社殿に、とじこめられていたのを、抜け出して、森の中をさまよっているうちに、長屋の子の金太に、発見されたのであっ

た。

自分をつれ出した者は、全身黒ずくめの装束をしていた、という記憶しか、なかった。

——うまく、見つけてくれるように！

顔十郎は、そう祈り乍ら、駕籠わきを、のそのそと、歩いて行く。

とある辻を過ぎて、坂を下りかけたとたん、

——これは、いかん！

と、顔十郎は、胸のうちで、叫んだ。

坂をのぼって来るひとつの人影をみとめたからである。

宿敵かげろう左近にまぎれもなかった。

牧仲太郎と法木幻無斎の呪術争いの検分役になった時、めぐり会って、雌雄を決せんと迫られ、三日後に延期してくれと申出たまま、顔十郎は、その約束を果していなかったのである。

駕籠をひきかえさせるのには、もう間に合わなかった。

かげろう左近は、顔を擡げて、こちらを視た。

——やむを得ぬ！

顔十郎は、覚悟をきめた。顔十郎は、左近という人物を、嫌悪してはいなかった。むしろ、その反対であった。

浮世をすねて、殺人鬼と化しているこの若い病める浪人者の孤独の翳は、顔十郎の心を惹くものがあった。

距離が、二間に迫った時、顔十郎は、ふいに大声をあげた。

「かげろう左近、たのみがある」

左近は、黙って、冷たい眼眸を返した。

顔十郎は、駕籠をとめておいて、大股に下って行くと、

「ひとつ。果し合いは、後日のこと」

「今日はのがさん！」

左近の青いこめかみが、微かに痙攣した。

顔十郎は、かまわず、つづけた。

「ふたつ。お主を、やといたい。但し、謝礼はせぬが……」

「もう、ごまかしはきかぬぞ、顔十郎」

「まあ、きいてもらおう」

顔十郎は、声をひくめると、

「あの駕籠の中には、清朝の皇太子が乗っている」

「……？」

流石の左近も、意外な言葉に、表情を動かした。

「清朝の皇太子が、なぜ、日本につれて来られたか——わしは、その理由をつきとめたい。なろうことなら、送りかえしたい、と思う」

「幾歳ぐらいだ？」

左近は、訊ねた。

「十二歳だ」

「……」

左近は、駕籠へ歩みよって、たれをあげて、少年の貌を凝視したが、ひきかえして来ると、

「かどわかされて来たのだな?」

「まず、そのあたりであろうな。わしは、あの子がとじこめられていた屋敷をさがして歩いている」

「……」

「話をきいて、もらおうか」

顔十郎は、手短かに、清朝戦乱のことを語った。

父文宗は、熱河へ蒙塵し、その子黄親王は、日本へつれて来られた。それが、はたして、文宗の意志であったか、どうか。いずれにせよ、これには、陰謀がからまっていることは、徳光寺の住職が惨殺された一事によっても、推察される。

一介の浪人者が、清朝の皇太子を守護することは、やり甲斐のある仕事と、いうべきであろう。

黙然として、きき了った左近は、

「おれにやらせる仕事とは?」

と、訊ねた。

「深川芸妓の妻次という女が、惚れた男が帰って来る夢をみた。男は、御家人で、腕が立ち、五年前に、どうやら、中国へ渡った模様だ。後藤宗次郎という。その後藤の消息について、五島藩主五島左衛門尉が、知っているふしがある。お主に、五島の屋敷に忍び入って、そのことをさぐってもらいたい」

顔十郎は、そうたのみ乍ら、左近の顔が微かな困惑の色を刷くのを、いぶかった。

「いやか?」

「いやではない」

左近は、こたえて、歩き出した。

四、五歩はなれて、左近は、頭をまわした。

「おれが、お主のたのみをきくのは……、実は、おれも、小悴の頃、かどわかされた身の上だからだ」

云いすてた。

幽鬼にも似たその後姿を見送っていた顔十郎は、一瞬、はっとなった。ひとつの疑惑が、雨雲のように、脳裡に、ひろがった。

偶然であった。

旅の宿で、顔十郎は、五島藩の老いたる家臣松井過左衛門と知って、十四年間も行方不明になっている若君をさがしもとめている、ときかされたことがある。

若君は、存世ならば、もう二十三歳である、という。

——もしや？

顔十郎は、遠ざかって行く左近へ、じっと視線を投げて、胸のうちで、呟いた。

——あの左近が、若君ではないのか？

そうだとすれば、左近は、こちらのたのみに応じて、おのが生家へ、忍び込むことになるのだ。

三

三更をまわった時刻——。

かげろう左近は、一万二千六百石、五島家の上屋敷の建物の中に在った。

五島左衛門尉に、会う肚をきめた左近は、その居間をもとめていた。

大名屋敷の構造にくわしくない左近は、いま、自分がイんでいる廊下が、どのあたりに位置するのか、見当がつかなくなっていた。

大名屋敷は、表と奥にわかれている。そのどちらにいるのかさえも、判らなかった。

——ままよ、女中をつかまえるか。

そうきめて、跫音を消して、歩き出そうとした時、行手の、右側の襖が、すっと開いた。

音のない開けかたであった。勿論、灯も持っていない。

開けた者は、廊下をつききって、むかいの部屋へ、入った。風のような迅さであった。

闇に目の利く左近は、それが、忍び装束であった、とみとめた。

——おれのほかに、もう一人、曲者が忍び入って来たのか。

ひそかに苦笑した左近は、次の瞬間、ひとつの不安にとらわれた。

曲者が入って行った部屋の襖に、手をかけた左近は、ちょっと、ためらったのち、すっと開いた。

曲者は、その部屋にいた。

まさに、奥の部屋へ躍り込もうと、殺気をみなぎらせた刹那であった。

奥の部屋の灯が、欄間の格子をくぐって、その部屋に落ちていたのである。

曲者は、身をひるがえしざま、つづけさまに、三本の手裏剣を、左近めがけて、投じて来た。

左近は、居合の抜きつけの呼吸で、これらを、ことごとく、畳へ、搏ち落した。

「誰だ？」

奥の部屋から、誰何があった時、曲者は、一刀をかざして、天井から左近を襲っていた。

おそるべき敏捷さと、跳躍の術を、身にそなえていた。

左近は、辛じて、これを、躱した。

曲者は、すっくと床の間に降り立って、白刃を、眼前へ、片手で、水平に横たえた。

その構えは、兵法というより忍法の防禦のそれであった。

左近は、地摺りにとると、つまさきを刻んで、じりじりと、距離をつめた。

この時、奥の部屋の仕切りの襖が、さっと開いた。

開いたのは、藩主五島左衛門尉であった。
「何ごとだ?」
その叫びに、左近は、こたえた。
「無断で忍び入った曲者同志の一騎討ちとお思いあれ、……但し、こやつには殺意があり、それがしは、抱いて居り申さぬ。……家臣をお呼びになるのは、無用!」
その言葉のおわらぬうちに、敵は、再び跳躍した。
予測していた左近は、無謀にひとしい意外の業を使った。
すなわち——。
身を沈めざま、直立させた刀を、びゅっと、天井めがけて、投げ上げたのである。
宙を飛ぶ黒影の迅さと、天井へはねあがる白刃の迅さと——それが、空間で合した。
切っ先は、みごとに、曲者の片足の蹠を、突き刺した。
曲者は、もはや、まともに、畳の上に降り立つことは、叶わなかった。
鷺のように、片脚で、立った。姿勢は崩れ、隙が生じた。
左近は、敵に構えなおすいとまを与えず、脇差を抜きはなって、突進して、胸いた深く、刺しつらぬいた。
「見事!」
左衛門尉が、叫んだ。
左近は、仆れた曲者の覆面した黒い布を、ひき剝いだ。

くいしばった口から、みるみる、血汐が噴いて出た。
左衛門尉は、近づいて、覗き込むと、
「ほう! これは、日本人ではない!」
と、云った。
「襲われるおぼえが、おありですか?」
左近は、左衛門尉の横顔を、くい入るように瞶め乍ら、訊ねた。
「うむ。ないこともない」
左衛門尉は、視線を、左近へまわした。
「その方は——?」
「名もない素浪人です」
左近は、目を伏せて、こたえた。
「なんの目的で、忍び込んで参った?」
奥の部屋へもどってから、左衛門尉は、穏やかな口調で、問うた。
「御家人後藤宗次郎儀、五年ぶりに、日本へ帰って参った由、ご存じよりとうかがい、なにゆえにご存じよりか、おうかがい致したく——」
「それを問うその方の立場を、明かにいたせ」
左近は、顔十郎からきかされたままを、こたえた。
左衛門尉は、しばらく、沈黙をまもった。

左近は、顔を擡げて、左衛門尉を視た。

——これが、おれの父親か！

感慨は、しかし、氷のような冷たい胸で、陰湿な虚無につつまれていた。

左衛門尉は、ひくく咳ばらいしてから、云った。

「黄親王は、わが日本で保護されるために、徳光寺住職によって、紫禁城よりつれ出され、陸路、海路ともに、その途中を、後藤宗次郎が、これを警衛した。しかるに、公儀は、黄親王を保護することを肯んぜず、これを、出府の途中において、暗殺する一議に決した。清朝を攻めている諸外国をおもんぱかる公儀の腰抜けぶりと申そうか。……刺客は、はなたれた。黄親王が、ぶじに江戸に入るを得たのは、おそらく、後藤宗次郎が、刺客を引受けて、闘い、とも仆れに斃れたからに、相違あるまい。なお、清国からも、黄親王を暗殺せんとして、幾人かの刺客が遣されて来て居る。徳光寺住職を殺したのも、そこに横たわっているのも、それであろう」

左衛門尉は、そこで、いったん言葉を切ってから、宙へ、遠い眼眸を据えると、

「帝王の子たると否とにかかわらず、純真な子供の生命は、守らねばならぬ！」

きっぱりと云った。

しびれ酒

一

四谷千駄ヶ谷町は、御先手組の組屋敷がならんでいる一廓である。

六道辻という辻で、その組屋敷は切れて、通りをへだてて、かなりの大名屋敷が、むかいあっている。

顔十郎は、その表門を、六道辻から、じっと、眺めやっていた。

表門の扉には、まさしく、藤紋がうってあった。それは、婆羅藤であった。

少年黄親王は、この屋敷内に、とどめ置かれていたのである。

宗対馬守の上屋敷であった。

宗対馬守は、対馬国の領主である。

清朝の皇太子を預るには、ふさわしい家と、思われる。

しかし、宗家では、公儀の依頼によって、黄親王を預ったのではないようであった。公儀では、黄親王を、出府の途次で、刺客に暗殺せしめようとしたのである。保護する意志はなかったのである。

宗家では、徳光寺住職に願われて、黄親王を預ったのであろうか？

顔十郎は、調べてみて、対馬守は、本国へ帰ったまま、もう五年間も、江戸へ出て来ていないことがわかった。

江戸家老が、一存で、このような重大なことをやってのけたとは、考えられなかった。

いずれにせよ——。

宗家は、武勇をもってきこえた大名である。

その系譜を辿ってみれば、ただの大名でないことは瞭然とする。

宗家は、平知盛の末孫、という。伝えるところによれば、壇ノ浦の戦いで、平家一門はことごとく入水したが、その時、知盛は、ひそかに、勇猛の家来宗右馬介惟宗をえらんで、幼い嫡子をあずけた。右馬介は、むつきにくるまれた幼児を抱いて、筑紫の片田舎に隠れ住んで、育てた。元服の日、わが姓をとって、宗右馬太郎と名のらせた。

寛元四年、右馬太郎の嫡子右馬之弥二郎左衛門尉は、対馬国に渡って、国人阿比留を撃って、やがて、島一円を押領した。

当時は、北条氏が盛んな時代であったので、宗は大宰少弐の手に属した。

その子右馬七郎助国の時に、元寇の乱があった。

文永十一年十月六日卯の刻、蒙古千余の兵が、対馬の国府へ乱入して来た。右馬七郎は、わずか八十余名の一族郎党を率いて、面も振らず、その大軍の中へ斬り入り、一人のこらず、討死して果てた。

蒙古軍は、つづいて、壱岐島を襲い、守護代平内左衛門惟高以下五十余名を斃しておいて、筑前博多の浦へ、おしよせたのであった。

さいわいに、右馬七郎の長子右馬介経茂は、大宰府に在ったので、この難をのがれた。

建武三年五月、右馬介の子右馬丞頼茂は、将軍足利尊氏にしたがって、和田ヶ崎の戦いに抜群の功をたてて、九州の侍所に任じ、刑部少輔となって、再び、対馬国の領主になった。その武勇は、日本のみならず、朝鮮にもきこえ、宗慶と称んで、おそれた、という。

六代右京大夫尚茂、七代讃岐守貞茂、八代讃岐守貞盛、みな武名があった。

貞盛の代には、はじめて朝鮮と公に交易して、こちらからは年々五十艘の船に商品を積んで送り、朝鮮からは歳々米豆六万石を運んで来た。

戦国時代に入るや、九代讃岐守貞国は、対馬へ逃げて来た大宰少弐頼忠を奉じて、筑前大宰府へ押しわたって、大内大友の軍勢を蹴ちらし、ふたたび、大宰家を、北九州の守護職に据えた。

その曽孫讃岐守義盛は、朝鮮と戦って、奮闘した。

天正十四年、豊臣秀吉は、朝鮮王に使者を送って、来聘のことを通じた。しかし、朝鮮王は、斥けて答えなかった。十八年にいたって、宗対馬守義智は、家臣柳川豊前守調信を具して、自ら韓地に渡って、朝鮮王に謁見し、説服して、ついに、正使を伴って、帰って来た。秀吉はその功

を賞して、羽柴の姓を与えた。

義智は、秀吉が、朝鮮王に対して明国征討の先鋒を命ずるのをきいて、その無謀に、ひそかに眉宇をひそめた。しかし、ひとたび、日本軍が朝鮮へ押し渡るや、義智は、小西行長の先鋒となって、釜山より追撃して行き、七年間、対馬へは還らなかった。

慶長五年、石田三成が兵を挙げて、徳川家康と、関ヶ原で、雌雄を決した際には、義智は、賢明にも、対馬をまもって、海を渡って来なかった。

徳川の天下になるや、義智は、家康に、朝鮮との間に、平和をよみがえらせることを進言し、文禄の役に虜とした韓人を帰国させた。

義智が、外交政略は、家康に大いに買われた。十万石の格式を与えられ、子孫は必ず、従四位下侍従に叙爵せられることとなった。のみならず、対馬は水田が乏しかったので、幕府から、毎年一万二千両を給与されることになった。

時代が下り、三百諸侯は、しだいに貧乏になって来たが、宗家は、朝鮮交易の商権をにぎっていたので、ひとり、反対に富んだのである。

いま——。

顔十郎が、のぞむ屋敷の構えは、どの大大名の屋敷よりも、立派であった。

二

もとより、うらぶれた風体の浪人者を、門番が通して呉れる筈もなかった。

顔十郎は、高塀を躍りこえて、庭園の木立の中に立ち、しばらく、様子をうかがっていてから、のそのそと、建物にむかって、歩き出した。

数人の若ざむらいが、奔り寄って来て、

「何者っ！」

と、とりまいた。

顔十郎は、その血相かえた身構えを見まわして、どうも、ただの警戒ぶりではないように、直感した。

「それがしは、清国より帰参いたした者。重要の用向きあって、御当家江戸家老殿に、お目にかかりたい。お取次ぎ下されい」

顔十郎は、胸をはって、告げた。

「そのまま、ここを動いてはならぬ」

一人が、急いで、駆けて行った。

顔十郎は、廻遊式庭園の結構を見わたして、

——よほど、金をかけている。相当な富有だな。

と、合点した。

やがて、顔十郎は、書院に案内された。

ずんぐりと肥えた、あまり風采のあがらぬ老人が、のこのこと現われて、座に就くと、

「江戸家老神部佐渡だ」

と、名のった。

顔十郎は、名のりかえして、無断の侵入を謝罪した。

「清国から帰って参った由。まことかな?」

神部佐渡は、さぐるような目つきになった。

「左様、清国皇帝が御依頼により、日本へともなわれた黄親王君を、ふたたび、清国へおつれつかまつる任務を与えられ申した」

「ほう——清国の皇儲が、日本にともなわれたかの」

神部佐渡は、とぼけた。

「たしか、御当家にて、かくまわれていると、きき申したが——」

「誰に?」

「それは、申上げられませんな」

「この屋敷には、そのような身分高い和子は、お預りして居らぬ」

顔十郎は、じっと、老人を見据えていたが、

「預っていたが、何者かに奪い去られた。そうではありませんか?」

ずばりと、云った。

すると、神部佐渡は、にやりとした。

「お主が、黄親王をひろったのかな?」

「……」

こういう腹芸のみせどころになると、顔十郎は、どうやら、この老人の老獪さにはおよばないようであった。

神部佐渡は、顔十郎の面上を掠めた微かな動揺を、決して看のがさなかった。

「ふっふっふ……、やはりそうか。当邸で、なぜ、黄親王を預っていたか——その理由をさぐりに来たのであろう。お主、公儀の隠密か」

「爺さん——」

顔十郎は、面倒くさくなって、居直ることにした。

「率直に云わせてもらおう。あの子供を、いくらで買ってくれるか、その相談に来たのだ」

「ふむ。いくらなら売ると申すのだな?」

「一万両、と申したいが、貧乏の垢がこびりついて、ケチくさくなって居る。五千両で手を打とう」

せいぜい、悪党めかして、云った。

「チト高いの」

「なに、そちら様は、どうやら、あの子供で、何百万両も儲ける企てがあるとみたのだ」

老人は、手をたたいた。
女中二人が、酒肴の膳をささげて入って来た。
「こちらは、酒よりも、黄白の方を所望している」
「まあ急がずともよいであろ」
老人は、まず、自分が毒味をしてみせてから、その盃を、女中に持たせて、顔十郎へ渡した。
顔十郎には、こうした場合、見栄があった。
毒味された盃を、なお要心ぶかくこばむのは、いかにも、野暮にみられそうであった。
顔十郎は、盃を受けると、ゆっくりと、傾けた。
献酬が、しばらくつづいてから、神部佐渡は、
「さて——お主の要求する五千両じゃが、どうやら、支払わずともよいことになったらしい」
と、云った。
それをきいて、顔十郎は、はっとなった。
「それは、どういう意味です？」
「お主の生命と、黄親王の身柄を交換することじゃな」
その言葉をききつつ、顔十郎は、舌が手足が、しびれるのをおぼえた。
——しまったわい！
狼狽するよりも、おのが迂闊さを嗤った。
盃は二重底のしかけがしてあったのだ。すなわち、老人は、自分が飲みほすと、盃の糸底を押

す。すると、透明な毒が、滲み出る。顔十郎は、それを受けとって、女中から酒を注がれる。毒は酒に溶ける。老人は、女中の手から、盃が、かえって来ると、糸底を押して、毒が出ないようにして、酒を注がせて、飲む。
こうなれば、いくら献酬を重ねても、老人の方は、一向に平気なわけであった。
急速に、麻痺は全身を侵して来た。
顔十郎は、口をきくことも叶わなくなり乍ら、気力だけで、端座の姿勢を、崩さなかった。
「ほう……、並のきたえかたではないの。そうやって、坐りつづけていられるとはの。見上げたものだ」
老人は、立ち上ると、
「目がさめた頃に、あらためて、相談いたすとしようかの」
そう云いのこした。
眩暈と嘔吐感のあとに、意識は朦朧として来た。

三

五、六人かたまって、面打をして遊んでいる群を、異国の少年は、破れ障子の隙間から、眺めていた。
おもしろそうだった。

じっとがまんして、半刻あまり、そうやって、障子の蔭にうずくまっていたのが、とうとう、我慢しきれなくなって、そっと土間に降りた。

戸口でちょっとためらっていたが、思いきって、おもてへ出た。

いちばんたくさん勝って、いい気になって、

「さあ、来い。やい、吉、てめえ、とっときのやつを出せえ」

と、叫んでいた金太は、ふと、かたわらに、黄親王が立っているのに気づいて、目をまるくした。

「いけねえ！　おめえ、外へ出ちゃいけねえんだ。顔十郎の小父さんから、家の中にいろ、って云われてるじゃねえか。さ、入ってな、入ってな」

大いそぎで、手をひっぱって、家の中へつれ込もうとした。

その時、ぶらりと出て来た毒消し売りが、

「おや？」

と、眉宇をひそめた。

この毒消し売りは、二日ばかり前から、この貧乏長屋に落ちて来たばかりであった。

「坊や、ちょいと、待ちな。……その子は、なんだい？」

「なんでもねえ」

金太は、警戒して、黄親王をかばうようにした。

「なんでもねえって、面妖しいじゃねえか、熨斗目の振袖たア、はき溜に鶴、なんか曰くがありそうだぜ」

「迷い児なんだ」

「ふうん、迷い児、ねえ？」

毒消し売りは、黄親王の貌を、じろじろと、眺めていたが、

「若さま、おめえさま、どこだい？」

と、訊ねた。

「うるせえな。なんにも、こたえねえよ」

「なぜだ？」

「唖だよ」

「唖？　そいつは、可哀そうだ。……おい、若さま、本当に、唖かい？」

「止しやがれ」

金太は、とうとう、癇癪玉を破裂させた。

「あこぎにききやがるねえ。……さ、入ったり、入ったり――」

黄親王を家の中へ入れると、手真似で、戸につッかい棒をしておくように命じておいて、仲間たちのところへ、もどって来た。

ふたたび、面打に夢中になって、どれくらい経ったろう、

「子供たち――」

呼ばれて、皆、顔を擡げた。

顔色のまっ青な、痩せた、若い浪人者が、ふところ手で、立っていた。
「顔十郎殿の家はどこだ？」
その問いに、金太が、警戒の目を光らせた。
「なんか用かい？」
「うむ。案内してくれ」
「小父さんは、いま、留守だい」
「待つことにする」
「いつ戻ってくるかわからねえや」
「かまわん」
「駄目だい」
「……」
かげろう左近は、じろっと、金太を睨み下した。
金太は、思わず、ぶるっと顫えたが、ひるまず、
「おいら、小父さんから、誰がたずねて来ても、入れちゃいけねえ、と云われているんだ」
「清国の子供がいるからか」
「……」
金太は、ごくんと生唾をのみ込んだ。
「おれは、そのことで、顔十郎殿から、たのまれた役をつとめて来たのだ。安心しろ。敵ではな

い」
「そうかい？　本当にそうかい？」
「おれは、子供たちに対してだけは、嘘はつかぬ」
金太は、それをきいて、案内に立った。
つッかい棒のしてある戸をどんどん、叩いたが、なぜか、内部から、反応がなかった。
「ちぇっ！　こんどは、寝てやがるんかい。しょうがねえ」
金太は、裏口へ、はしって行った。
かげろう左近は、あらためて、長屋の様子を見わたして、その穢さに、あきれ乍ら、顔十郎がどうしてこんなところに仮住いしているのか、訝った。
戸をひきあけた金太が、血相をかえていた。
「いねえや！　どこかへ、行っちまやがった！」
「なに！」
左近は、眉宇をひそめて、
「一人で、どこへ――、行くあてはあるまいに――？」
と、云った。
金太が、とたんに、あっと叫んで、つッ走って、毒消し売りの家へ、とび込んで行った。
すぐに、とび出して来て、
「あん畜生！　かどわかしやがったあっ！」

と、絶叫した。

毒消し売りは、大きな葛籠を背負うて、急ぎ足に、市谷台の裏道を抜けて行った。

やがて、辻に出ると、駕籠を呼んで、葛籠をのせると、

「大名小路へやってくれ」

と、命じた。

――なにか、途方もねえひろいものかも知れねえ。

肚の中には、そんな期待があった。

毒消し売りは、大目付浅野図書に飼われている密偵であった。

公儀庭番でもなければ、町奉行所の役人でもなかった。当時、大目付とか目付とかは、必ず、私でやとった隠密を、幾人か擁していたのである。

浅野図書は、尋常の手段では、顔十郎を殺せぬ、とさとって、密偵に尾け狙わせることにしたのであった。密偵は、鋭敏な猟犬の嗅覚で、あの長屋に顔十郎がいることをかぎつけて、毒消し売りに化けて、入り込んだのである。

駕籠をそのまま、裏門から通してもらった密偵は、主人に直接に会いたいと申入れた。

顔十郎がかくまっている熨斗目紋服の少年をつれて来た、と取次がれて、浅野図書は、興味を起して、裏庭へつれて来るように命じた。

縁側へ出た図書は、少年を一瞥するや、

「これは！」

と、直感的に、その素姓を看てとった。

――刺客を遣して、亡きものにしようとした黄親王ではないか！

幕閣の評定に加わる一人として、この事件についてはよく知っていた図書である。

――顔十郎め！　このことにも、首をつッ込み居ったか！

独妙剣

一

この世と地獄のあいだは、闇六道で通じている。

顔十郎は、その中有の闇を、のそのそと歩いているようであった。

そのうちに、彼方に、微かな光を見出して、しめた、と思って、尻端折りをして、駆け出そうとしたとたん、全身が、綿のようにふわふわしているのを、さとった。

意識は、その時、蘇った。

高手小手に縛りあげられて、昏い板の間にころがされていた。
「やれやれ――」
顔十郎は、苦笑した。
「とんだ不覚をとったな」
対手が毒味をした酒だから、大丈夫だろうと、飲んだのは、まことに軽率というべきであった。盃に仕掛けが、ほどこしてあったのだ。
どうやら苦労して、身を起した顔十郎は、まわりを見やって、座敷牢のようだな、と思った。
と――。
板戸がひらかれて、一人の侍女が入って来た。
薄くらがりに、白く浮いた顔は、芙蓉のように美しいものに眺められた。
膳をささげて、近よって来ると、のせた楽茶碗を把りあげて、
「お召しあがりを――」
と、すすめた。
ほのかな香料が、楚々たる気品とともに、そのからだから漂うて、なにやら、ふしぎな気分にさそい込んで来る。
たしかに、頭痛はしていたし、咽喉奥もかわいていたので、
「造作に相成る」
と、顔十郎は、長い頤をさし出した。

楽茶碗に盛っているのは、ややにがい漿水であった。
ごくごくと、ひと飲みにした顔十郎は、
「やあ――」
と、笑顔をつくって、美しい侍女に、頷いてみせた。
「流石は、宗対馬守邸だけあって、捕虜の待遇を心得ておいでだ」
すると、侍女は俯向いて、
「いえ――」
と、かぶりをふった。
「これは、わたくし一存にて、人目をはばかり乍ら、することでございます」
「ほう――なぜですな？」
侍女は、ちょっと、ためらっていたが、
「わたくしの父は、清朝の高官でございました」
「ふむ――？」
「よこしまな野望を抱く宦者の讒訴に遭うて、無実の罪であやうく、捕えられそうになったのを、ようやくにして、のがれて、朝鮮に入り、それから対馬に渡って、宗家に身を寄せたのでございます」
「そこで、対馬の婦人をめとって、貴女ができた、というわけですな」
「はい」

「で——どうして、それがしに、好意を示される？」
「黄親王様を、貴方様がかくまっておいでだと、うかがいましたので……」
「……」
「もし、なろうことなら、貴方様に、ここから脱出して頂き、黄親王様を、清国へ送りとどけて頂きとう存じます。その際、わたくしも、お伴できればと存じます」
顔十郎は、侍女の顔を、じっと瞶めていたが、
「それがしを、遁すてだてがある、と申されるか？」
「はい。必死になりますれば——」
「貴女も、ついて来る、というのですな？」
「はい」
「貴女の言葉通りに、それがしが、信用するわけに参らんが……」
侍女は、それをきくと、懐剣を抜いて、顔十郎の四肢を縛った麻縄を、切った。
顔十郎は、自由になったからだを、しきりに動かしてみて、
「あの毒薬は、相当こたえる。まるで、力が抜けてしまったな」
と、呟いた。
侍女は、必死な眼眸で、
「お願い申します」
と、歎願した。

顔十郎は、妙におちつきはらって、
「いましめを解いてもらっただけでは、まだ、貴女を信用するわけに参らんな」
と、云った。
「どうすれば、信じて下さいましょうか？」
「男女と申すものは、からだを契ってこそ、互いに、信じ合うことになるのでござろうな」
顔十郎は、ぬけぬけしたことを、云った。
侍女は、しばらく俯向いていたが、小声で、
「どうぞ……お気の向くままに——」
と、云った。
顔十郎は、遠慮せず、猿臂をのばして、侍女の若い肢体を、抱きとった。
気品は、衣香鬢彩を通して、溢れている。しなやかで弾力のある柔肌は、双腕に、しっとりと重く、あたたかい。
さらに、抱きとられるはずみに、膝が崩れて、裳裾が乱れ、緋のものがこぼれて、目を刺戟した。
万事、男の欲情をかきたてる条件はととのったのである。
顔十郎は、容赦なく、片手を、前の割れた膝のあいだへ、さし入れると、五指をすべらせて、柔かな内腿の奥をさぐりはじめたが、その目つきだけは、冷たく、戸口の方へ据えていた。
一瞬——。

侍女のからだが、くるっと翻転させられた。
裳裾が、下着、腰のものとともに、ぱあっと、はね拡がって、胴から上へかぶさった。
すなわち。
顔十郎は、侍女をさかさにして、臀部から下肢を、空ざまに、むき出させたのである。
そして、立てた片膝に、背中を押しつけて、片腕で胴を抱き締め、白いゆたかな二本の下肢を、股いっぱいに、裂くがごとく押し拡げさせておいて、
「神部佐渡殿、見参！」
と、叫んだ。

二

宗家の江戸家老、神部佐渡は、にがりきった顔つきで、入って来ると、侍女のあらわなすがたに目をくれぬようにして、
「もうよい、わかった。止めい」
と、手を振った。
顔十郎が、羞恥の秘所を、てのひらで、たたいてみせたからである。
まことに、いかなる美女も、その若い肢体を、こういうあられもない恰好にされてしまうと、むしろ滑稽で醜穢な眺めでしかなかった。元来、そこは、目をあてるべき箇処ではなかった。

「いや、まことに、失礼つかまつった」
顔十郎は、すばやく、当て落した侍女のからだを、もと通りにととのえてやって、そっと仰臥させた。
神部佐渡は、口をへの字にむすんで、顔十郎と一間をへだてて、対座した。
「御家老は、どうやら、それがしに、明の名将洪承疇の二の舞いを演じさせるおつもりだったようですな」
顔十郎は、にやにやし乍ら、云った。
神部佐渡は、こたえなかったが、みとめた気色をみせた。
明末の志士洪承疇は、遼東の経略にあたって、武運つたなく一敗して、清軍のために囚われの身になった。
清廷では、洪承疇の才幹と忠節を愛して、にわかに斧鉞を下すにしのびず、しきりに降服をすすめた。
しかし、承疇は、文天祥の壮烈な最期を想い、おのれも、それにならって、芳名を千載につたえようと欲し、さらに応ぜぬばかりか、食を断って、しずかに、命数の尽きるのを待った。
絶食三日目の薄暮、どこからか、一個の壺をかかえた覆面の婦人が、鉄柵の前に現われて、そっと、一杯の漿水をすすめた。
はじめは、承疇も、かたく瞑目したまま、あえてきこうとはしなかったが、なんともいえぬ幽香が、鼻を撲ち、つかれはてた魂を、ふしぎに喚びさましたので、目をひらいてみると、その容

姿の殊麗、気品のたかさは、あきらかに、ただの婦女子ではないと読めた。

女は、云った。

「妾は、この獄舎に隣あわせて住むひとりものでございますが、卿の高節をきき、ひそかに、おなぐさめしようと思うて、獄吏に賄って、忍んで参りました」

承嚭は、あまりにいぶかしく、黙然としていたが、眉宇には、感謝の色をあらわした。

女は、さらに言葉をついで、

「卿は、明室に忠なるお方、清室のすすめる食物を摂らぬとおきめでございましょうが、これは妾の手ずから製せし一杯の漿水にすぎませぬゆえ、高節を玷すことにはなるまいと存じます」

と、すすめた。

承嚭も、その厚意を容れて、やがて、手に受けて、啜った。

その日から、美女は、毎日三度ずつ、鉄柵の前にあらわれた。そのたびに、彼女が携えて来た壺漿は、飲みつくされた。承嚭は、漿水ぐらいで、命を繋げるものとは思っていなかったが、ふしぎにも精力がよみがえって来て、以前の身体に復活して来た。

美女は、どこから来るのか。漿水は、これ、何のもの？

ふしぎは、これにとどまらず、獄卒の警戒は、日に寛んで、ついには、扉をひらいたままになり、まるで資客を遇するのと、異ならなくなった。

某夜、美女は、承嚭が、漿水を飲みおわっても、去らなかった。承嚭は、ついに、彼女を抱いて、枕衾に横たわった。美女は、暁に去った。

承嚭の鬼神も哭かしむる忠節も、やがて、消磨しつくして、目は美肌にくらみ、心は芳香にまよった。

美女は、実は、太宗の孝荘皇后で、艶名一国に噪がしかった絶代の麗人であった。

承嚭は、その正体を知って、驚愕したが、もはや、哭せんと欲して哭することは不可能であった。

つまり——。

江戸家老神部佐渡は、その例にならって、顔十郎に、黄親王のかくまい場所を白状させるために、宗家随一の美女をつかったのである。

「このご婦人は、まさか、御主君の奥方ではありますまいな？」

顔十郎は、問うた。

神部佐渡は、

「奥方であったら、どうだな？」

と、問いかえした。

「御家老は、視るべからざるものを視たことになりますな」

顔十郎は、云った。

「これは、わしの娘じゃ」

「ほう——それは、失礼つかまつった」

「顔十郎、黄親王をどうする料簡じゃな？」

「さあ、どういたそうか」
「五千両では、渡すまい」
「そちら様の方で、黄親王をどうされるか、それがほぼ推察できる以上は、お渡しできぬ」
顔十郎は、ようやく、宗家の陰謀を読んでいた。
宗家では、清国において叛乱を起した長髪賊の首領洪秀全と、提契の相談が成っているに相違ない。
洪秀全が、清朝を滅ぼして、新たな国家をつくったならば、宗家は、その交易に、最も有利な条件を与えられる、と。
あるいは、洪秀全は、朝鮮を征服して、宗家に与えるという好餌でも、与えているのではなかろうか。
「顔十郎、お主は、少年があわれだ、という一片の義侠心で、かくまっているのであろうな？」
「左様、ま、そんなところでござるな」
「金も女も、興味がない男は、厄介なものよ」
「とんでもありませんな。金にも女にも、人一倍興味を持って居り申すが、ただ、気が向かねば、手に把らぬまでのこと。……ところで、もう、そろそろ、問答にもあきましたな。御家老の方で、手を引くお考えがない限り、あらためて、腕ずくの勝負と相成る」
「勝負か――」
神部佐渡は、うすら笑った。

「そうじゃな。お主を、ここから、このまま、かえすわけには参らぬ。勝負をして行ってもらおうか。立合う相手は――」
「日本人ではない、と云われる」
「その通り。少々手ごわいぞ。みごとに、しりぞけたならば、当方は、黙って、お主をひきとらせよう」

三

それから、半刻あまり後――。
顔十郎は、壺庭の白砂上に、木太刀を一本与えられて、立っていた。
縁側には、神部佐渡ただ一人が、坐っていた。そのかたわらには、顔十郎から取りあげた三尺の長剣が置いてあった。顔十郎が、勝てば、返すことになろう。
勝負の対手は、彼方の露地の中門から入って来る筈であった。
「気まぐれの兵法者ゆえ、しばらく、待たせるだろう」
と、神部佐渡は、告げたが、成程、もう四半刻も、顔十郎は、待たされている。
厚い雲が空を掩うた。うすら寒い午後であった。
顔十郎は、ときどき、不作法に、木太刀で、とんとんと、肩をたたいたりしていた。
と――一瞬。

どこからか気配があった、というのでもなしに、顔十郎の五体が、緊迫した。
危機に対する本能の働きであった。
まさしく、それは、錯覚ではなかった。
敵は、現れた。しかし、中門からではなかった。
はっと、顔十郎が頭をまわすと、いつの間に出現したか、建物の柿葺きの土庇の上に立った黒影が、むささびのように、跳躍するのが、同時であった。
その双手には、一間あまりの黒光りする鉄棒が持たれていた。
咄嗟に——。
顔十郎は、おのが五体を地面に倒すと、非常な迅さで、縁側の方へ、ころがした。
宙を翔けて来た異形の敵は、顔十郎が立っていた地点の、三尺の空間を、正確に、鉄棒で、ぶうんとひと薙ぎにしておいて、すっくと降り立つや、
「……」
何やら異様な懸声を発して、双腕をたかだかとかかげて、鉄棒を横たえた。
指さきまで黒い布で包み、目ばかりのぞけた敵は、むしろ小柄であったが、総身から迸しらせる殺気は、その姿を妖怪じみたものにさえみせた。
——これは、一種の狂人ではないのか？
顔十郎は、そう疑ったくらいである。
しかし、狂人でなかった証拠は、対峙して、ものの数分もたたないうちに、その殺気を、徐々に沈めてみせたことであった。
真剣の勝負の場合は、まず、闘志を、殺気を、秒刻の移るにしたがって、その構えに、次第にあらわして来るのが普通である。
この敵は、その反対であった。
対峙の刹那にあふらせた殺気を、かげろうのようにうすれさせてゆき、いつの間にか、その姿を、樹か石のように、ひそとしたものにしてしまったのである。
無念無想と化した、といえば、それまでのことだが、その静止相がひそめた業は、魔術にひとしいと、こちらに、はっきりと予告している不気味さであった。
——されば！
顔十郎は、ずいと、一歩出た。
瞬間——その長身に、獰猛といえるほどの凄じい剣気をみなぎらせた。
敵が、殺気をひそめたのに対して、逆に、こちらは、それをむき出したのである。
「おうっ！」
顔十郎は、さらに、木太刀を大上段にふりかぶるや、野獣のように雄叫びして、ツツ……と、数尺を滑り出た。
とたんに、敵は、ぱっと、半間を跳び退った。
それにむかって、顔十郎は、五体を躍らせるとみせた。
意外、顔十郎は、そうする代りに、不意に、木太刀を、だらりと地に下げると、いかにも、ふ

て腐れたごとく、くるっと踵をまわして、のそのそと、縁側へ歩いた。
止めた。ばかばかしい。
その態度であった。
黒装束の敵の双眼が、ぎらっと光った。
その構えに、再び殺気が溢れた。
とみた刹那——。
顔十郎は、神部佐渡のかたわらに置いてあったおのが差料を摑みとるがはやいか、疾風を起して、敵へむかって、奔った。
顔十郎の走力のすばらしさは、ここにあらためて記すまでもない。
敵は、何やら唸りを発して、鉄棒を、防禦の構えに移そうとした。
顔十郎は、そのいとまを与えなかった。
顔十郎の速影が、横あいを掠めさったあとには、真二つにされた鉄棒を、それぞれ、右手左手に摑んで、顔面を、ざくろを割ったように血まみれにしてのけぞる敵の、無惨な姿があった。
建物や木立の蔭から、藩士ら十余人がとび出して来て、顔十郎を、包囲した。
顔十郎は、平然として、縁側に近づいた。
「勝負はつき申した」
「……」
老人は、睨み下して、口を開かぬ。

「約束通り、引きとらせて頂く。こん後、黄親王の身柄については、放念下さるよう——」
一礼すると、歩き出した。
藩士らが、一斉に、刀の鯉口をきって、包囲の陣形を移動させた。
顔十郎は、歯牙にもかけぬ態度で、その中を、悠々と、歩いて行く。
「追うな！」
老人が、藩士らをとどめた。
「お前らの太刀討ちできる敵ではない。去るにまかせい」

闇中問答

一

さあっ、とひと雨通ったあとの大川は、またさして来た夕陽をあびて、束の間の明るさの中で、鮮やかな江戸景色を浮きあがらせていた。

上り下りの屋形船が、障子を開いて、どこかの舟宿へ送る芸妓のあで姿へ涼しい風をあてているのも、河岸道を、小意気な水茶屋の女が、明石をからげて、緋縮緬をのぞかせ乍ら、たまり水を、素足の駒下駄でまたいで行く風情も、この深川でなくては見られない景色であった。

永代橋を、のそのそと渡って来た顔十郎は、河岸道を辿り乍ら、この町が漂わせるなまめかしい匂いに、急に、その巨きな鼻の翼を、ひろげたようである。

実は、顔十郎は、深川で生れている。

父親は、御船手組の組頭で、頭のきれる人物であったが、他人の愚鈍や狡猾を許せぬ直情がわざわいして、小普請に入れられ、生涯を不平不満のうちに、おわった。

顔十郎は、どうした理由か、父親が小普請入りした時、一人息子にも拘らず、仙台堀ぎわにある正覚寺に預けられた。まだ三歳ばかりであったが、その時の記憶は、はっきりのこしている。

母親が哭いて、こばむのを、父親は、凄じい形相と呶声でしりぞけた。

「こやつは、坊主にするしか、ほかに生かしようがないのだ」

そんな意味のことを、父親は、云った。

青年になってから、顔十郎は、偶然の機会に、父親のその言葉に、重大な意味があったことを、さとった。

顔十郎は、その夫婦の実子ではなかったのである。

顔十郎は、おのれが何者の子であるか、知りたくなり、苦心のすえ、それが意外の人物であることをつきとめたが、しかし、その時はもう、実父はこの世にはいなかったし、つきとめたとたんに、そんな秘密は、どうでもよくなっていた。

——おれは、武蔵野の野末にすてられていたのを、ひろわれたことにしよう。

そう考えることにして、それを通して来た。

正覚寺には、十五歳まで、預けられていた。その間に、顔十郎は、おのれが、武道に異様な天稟をそなえていることを発見した。

十五歳の誕生日に、出奔して、行方をくらましたのは、おのが天稟をみがく目的でもあったようである。

江戸へ舞い戻って来たのは、十年の後であった。どこで、どうして、くらしていたか、顔十郎は、正覚寺の住職にさえも、一言も語ろうとはしなかった。養父母は、そのあいだに、逝っていた。

顔十郎が、なつかしんだのは、むかしの知り人ではなく、深川という町の雰囲気であった。

横堀竪堀が無数に交叉している深川という町には、庶民だけでつくりあげた、自由で、明るい空気があった。本当の江戸っ子は、この町にだけいた、といってもいい。

顔十郎は、深川に帰って来ると、出会う人が、みな、隣人のような気がした。

永代橋の袂から左へ折れて、佐賀町に入り、下ノ橋から、竪堀に沿うて、材木町へ下ると、横堀になって、むかいが富久町、万年町。正覚寺は、そのむこうになる。

少年の日、日本橋の町道場へ、毎日かよった道筋である。

むかしのままのたたずまいをみせている家が、一軒や二軒ではない。

それらの家に住む人たちが、白髪になり、腰が曲っているのをみとめ乍ら、顔十郎は、十年前を昨日のように、思い泛べることになる。

相生橋へ来て、渡りかけた時、

「旦那――」

下から、呼びかけられた。

欄干ごしに、覗いてみると、遊びにん風の男が、豆しぼりの盗っ人かぶりの蔭から、見上げていた。

「顔十郎の旦那でございましょう?」

「ああ、ごらんの通り、かくしようもない面だ」

「そのお顔を、半刻ばかり、貸しちゃ下さいますまいか?」

「なんの用だ?」

「へい。そいつが、かんたんに申上げられない事情がありまして……、あっしが深川っ子であることを信用して頂くよりほかには、すべがねえんですが――」

ほかの土地では、こんなたのみかたは通用すまい。

顔十郎は、微笑して、

「冬木町に、ちょっと用事がある。半刻もしたら、戻って来る」

「お待ち申し上げて居ります」

顔十郎は、相生橋を渡った。

屋形船に乗っていた男は、船頭をふりかえって、

「いまからだぜ、大きいやつが釣れるのは。もしかすれば、鯨がもぐり込んで来ているかも知れねえやな」

と、明るく、云った。

ずうっと、午から、釣糸をたらしていたのである。しかし、魚籠には、ほんの二、三尾が、およいでいるだけであった。

二

正覚寺の土塀が、長くつづいている河岸道を辿り乍ら、顔十郎は、ふと、

――坊主になっていた方がよかったか。

そう思った。

僧侶の生活ぐらい、この世で、安泰なものはなかった。

この一廓には、正覚寺とならんで、恵然寺、増林寺、海福寺、心行寺、玄信寺、法乗院、陽岳寺と並んでいる。

少年の日々、顔十郎は、それらの寺の僧侶たちのくらしを、つぶさに眺めて来た。

どの住職も、さして偉いとも思われなかったが、世人には、尊敬されていたし、納所や小坊主たちにとっては、まるで雲上人のような存在であった。足袋ひとつ、自分の手では、はかなかっ

た。

——坊主になっていれば、案外この顔も、有難がられていたかも知れぬ。

ひとり、苦笑してみた時、一挺の駕籠が、うしろから、追いこして行った。

冬木町の横町に入った顔十郎は、その駕籠が、自分のたずねて来た家の前にとめられているのを、みとめた。

櫓下の芸妓、妻次の家であった。

駕籠から出たのは、五十年配の、恰幅のいい童顔の町人であった。

「後藤宗次郎様にたのまれて、大阪の商人がたずねて来た、とつたえて頂きましょう」

小女に対しても、ていねいな物腰であった。

恋しい男のたよりをとどけてくれた人、ときいて、妻次は小走りに出て来て、茶の間へ招じた。

鳴海屋と名のった大阪商人は、ゆったりと座に就いて、まず、莨を一服すいつけてから、

「姐さんは深川で一番の流行っ妓でしょうな」

と、笑いかけた。

「とんでもない。気まま者でござんすゆえ、どこの待合茶屋からも、きらわれて居ります」

「いや、そこが、流行るゆえんでしょうわい」

「あの……、後藤様について、なにか、お報せ下さいますとか？」

鳴海屋は、大きくうなずいて、

「ずいぶん、長いこと、待っていなすったようですな？」

「ええ、それは、もう……」

「後藤様も、仰言っていましたよ。あの女は、二十年でも、おれを待っているやつだ、と——」

「今日明日にも、江戸へ帰っていらっしゃる正夢を、みたのでござんす」

妻次は、うれしそうに、云った。

「そのことですがね。後藤様は、事情ができて、いま、江の島に滞在しておいでですよ」

「江の島に？」

「わたしには、どういう事情か、打明けては下さいませんでしたが、どうやら、江戸へ戻るのは、身の危険になる御様子でした」

「まあ？」

妻次は、息をのんだ。

「ともかく、当分、江の島の宿屋に、逗留しなさることになりそうです。……後藤様のお話では、以前に、お前さんをつれて、四、五日滞在しなすった宿屋だとかで——」

妻次は、羞恥の色が頬にのぼるのをおぼえた。

六年前の春、後藤宗次郎は、両国の並び茶屋のひとつで、妻次と知りあうと、ほんのわずかの会話を交しただけで、ふいに、

「お前さんのような美しい女と、江の島あたりへ、遊びに行けば、生命が十年縮まっても、男の本望というやつだろう」

と、云ったものだった。

妻次は、すると、自分でも思いがけないくらい、即座のこたえをした。
「これから、参りましょうか」
「おい、本当か？」
後藤宗次郎の方があきれて、まじまじと見かえした。
「旦那さえ、およろしければ――」
「なに、こっちは、飛び立つ思いだ」
首尾は、その江の島の宿屋で、成ったのである。
その宿屋で、後藤宗次郎が、待っている、という。
鳴海屋は、うっとりと遠くを視る妻次の白い美しい貌を、じっと見戍っていたが、
「よろしければ、明後日、わたしが、迎えに参りましょう。明日一日で、用事をすませて、大阪へ帰りますのでね。ついでのこと、と申しては、なんですが、江の島まで、お送りいたしましょう」
と、云った。
ねがってもないことだった。
「どうぞ、お願いいたします」
妻次は、両手を合せたい心地だった。
鳴海屋は、それから、すぐに、腰をあげた。
おもてまで見送っておいて、うきうきし乍ら、茶の間にもどって来た妻次は、鳴海屋が坐っていたそこに、顔十郎が、胡座をかいているのを見出して、あっけにとられた。

「旦那！　いつの間に！」
「うむ。近頃、忍びの術をおぼえた」
顔十郎は、にやにやした。
妻次が前に坐ると、
「うれしそうだな――」
「だって、旦那――」
「後藤宗次郎が、江の島の宿屋で、待っている、という話か」
「おききになったのですか？」
「襖ごしにな。実は、台所の方から、泥棒猫のように、忍び入った」
「どうして、そんなまねをなさいました？」
「カンというやつだな」
顔十郎は、長い頤をひとなでしてから、
「あの鳴海屋という商人は、江の島で、後藤宗次郎が、待っている、と告げに参った。ところが、この顔十郎は、その逆のことを報せに来た」
「逆と申しますと？」
「お前を、悲嘆にくれさせる報せだ。後藤宗次郎は、もはや、この世にいない」
「旦那！」

妻次の柳眉が、きりりと上った。

「冗談じゃありませんよ。わたしは、佳い夢をみたのですよ！　……あの人が亡くなったなんて、いったい、なにを証拠に――？」

「証拠はない」

「ただの噂で、わたしを、悲しませに、いらしたのですか？」

「お前さんに、仇討のためにも、ひと働きしてもらおうと思って、云い難いことを云いに来た。ところが、偶然に、敵は、むこうから、足をはこんで来た」

「あの鳴海屋さんが、敵だと仰言います？」

「敵はたぶん大物だ。そやつにつかわれている商人だろうな」

「旦那。……旦那の仰言ることは、みんな、たぶん、とか、かも知れない、とか、憶測にすぎないじゃありませんか」

「その通り。まだ、何ひとつ証拠をつかんでは居らぬ」

「わたしは、あの人が、江の島で、待っているにちがいない、と信じます。明後日、鳴海屋さんと一緒に参ります」

「それがいい」

「え――？」

「そうしてもらいたいものだ。これは、わしの方からも、すすめる」

「どういうのでございます？」

「敵の尻尾をつかむためだ」

顔十郎は、立ち上った。

「ただ、わしの申したことを忘れないようにして、油断をしないでもらいたい。やがて、必ず、尻尾を出す筈だ」

三

ゆっくりと歩いて、相生橋に来て、欄干から、覗き込んでみた。

「お待ち申して居りました」

間髪を入れぬ明るい声が、応じた。

「どこかへ行くのか？」

「ご面倒でも、そうお願いしなければなりません」

顔十郎は、降りて、屋形船に乗った。

屋形の中には、わざと灯をつけていなかったし、要心ぶかく、顔十郎に、黒い布が渡された。

顔十郎は、べつに、いやがりもせず、黒い布で、わが目をしばった。

「遠いのか？」

「しばらくご辛抱を――」

顔十郎は、腕を組んで、沈黙をまもることにした。対手も、こちらが問わぬかぎり、口をひら

こうとしなかった。

べつに、神経を鋭いものにしていたわけではなかったが、仙台堀を抜けて、大川を渡って行くのが、判った。

船は、大川を下って行った。

やがて、また掘割に入った。三つ俣から、箱崎に入り、小網町に沿うて、鎧の渡しにさしかかるようであった。

——思案橋をくぐるか、それとも江戸橋に向うか？

江戸橋をくぐれば、むこうは日本橋である。

顔十郎は、いつの間にか、全神経を使いはじめていた。

——うむ！　ここは日本橋だぞ！

そう直感した。

とたんに、船は、顔十郎の直感力をはぐらかすように、ぐらっと、舳先をまわした。

もとへ、ひきかえして行くのだ。

それからの、水路は、ひどく長いものだった。

たしかに、また大川へ出たようであったが、すぐに、掘割に入った。そこから、顔十郎には、見当がつかなくなった。

のちになって、判ったことだが、三つ俣から、市中に入る掘割は、ひと筋しかない。

くぐり抜けて行く橋の数をかぞえていれば、これは、かんたんに納得できたことである。小川橋、高砂橋、栄橋、千鳥橋、緑橋……。

つき当って、左に折れ、まっすぐにこぎ抜ければ、竜閑橋をくぐって、鎌倉河岸へ出るのだ。

すなわち、日本橋から一石橋を抜けて右折し、常磐橋を過ぎて来るのと同じ場所に至る。

船は、顔十郎の神経をくらますために、大変な遠まわりをしたわけであった。

たしかに、神経をくらまされた顔十郎は、船から、上った時には、どこにいるのか、見当もつかなくなっていた。

駕籠が、そこに待っていた。

顔十郎は、駕籠が、いくども廻転して、あと戻りするのに、苦笑した。

——ずいぶん、要心ぶかく手間をかける。こうまでして、行先を判らせまいとするのは、そこが、誰にでもすぐ判るようなところだ、という証拠ではないか。

駕籠は、ほどなく、いったん地面におろされ、またかつぎあげられて、橋を渡った。

小門が開かれる音がした。

駕籠は、やすやすと、そこを通った。これは、大門がいかに大きなものか、ということを意味する。

門から、建物まで、遠い距離であった。

さらに——。

目かくしのまま、みちびかれる建物の廊下は、途方もなく長かった。

案内して行く者と、うしろにもう一人ひかえている者と、その二人以外に、建物の中に、人の

気配は、感じられなかった。

空気も、ひんやりとしている。そとは、夜に入って一刻も経っていや、まだ暑さが残っているというのに、この建物の中だけは、空気が、ちがっていた。

「お入り下さい」

鄭重に、促されて、一歩入ると、その部屋には、香がたきこめてあった。

「目かくしは、そのままに――」

黒い布を透して、灯の明るさを感じ乍ら、顔十郎は、

――やれやれ。

と、思った。

おれが、こんなに重要人物として扱われる男だったとは、という気持であった。

襖が開かれ、人が入って来て、上座に就いた。

顔十郎は、木像のように、動かぬ。

ひくい咳ばらいがして、

「顔十郎と申すか?」

と、声が、かかった。若々しい、品のある声音であった。

「左様でござる」

「浮世の表裏をいろいろ心得て居るときいた。腕も立つそうじゃな」

「御用のおもむきならば、余人をおえらび下さい。それがしは、所詮、流浪の野良犬でござる。気が向かねば、尾は振り申さぬ」

「たとえば、百万両の財宝が、いずれかに、匿してある。さがしあてれば、千両ぶんをさしつかわす、と申しても、気が向かぬか?」

対手は、云った。

「一両もらって、博徒の喧嘩に加わる方が、それがしのぶんに相応しているのではござるまいか」

「そこが、そちの取柄であろうな」

対手は、さわやかに受けた。

顔十郎は、対手が何者であるか、まだ見当がつかなかった。

幕府の要職にある大名と考えられるが、このように、こちらを威圧し乍らも、反撥させぬ器量を持った人物がいたか、と疑わざるを得なかった。顔十郎が、知るかぎりでは、一人もいなかった筈である。

ほんのしばらくの沈黙を置いて、対手は云った。

「顔十郎、そちの意志がどうあろうとも、只今より、そちの生命は、そち自身のものではない。天下のものと相成った!」

修羅街道

一

宗対馬守の上屋敷に、突然、大目付浅野図書がおとずれたのは、かなり夜も更けてからであった。

忍びの訪問で、供も三、四人しかつれていなかった。

昼のうちに、通達があったので、江戸家老神部佐渡は、応対の用意をして、待っていた。

浅野図書は、対座すると、すぐに、

「そこ許は、大層金儲けが巧い由だが、ひとつ、秘訣をうかがおうか」

「御冗談を仰せられる」

神部佐渡は、目を伏せて、苦笑しつつ、かぶりを振った。

「そこもとは、朝鮮を仲だちにして、清国と大きな取引をしているときいたぞ」

「左様な風説が、どこから生れましたか。当家は、ご公儀の御指令のままの交易をいたして居るにすぎませぬ」

「清国は、目下動乱であろう？」

「そのようにききおよびます」

「たとえば、皇帝が何処かへ蒙塵した際、皇子を、日本へかくそうと企てたとする。たまたま、北京に滞在していた日本の僧侶が、皇子をあずかって帰国した。清国の叛賊は、皇子をわが手にとらえんと、躍起になり、奸計をめぐらして、日本の大名の一人を、味方にひき入れた。その大名は、もともと清朝から信頼されていたので、裏切ったなどとはおくびにもみせず、日本にともなわれた皇子を、屋敷にあずかった。皇子の身柄と引きかえに、莫大な利益をつかむ皮算用もいたしてな」

「……」

浅野図書は、ここで、眼光をさらに鋭いものにすると、ずばりと、きめつけた。

「そこ許ほどの物が、屋敷から、むざと、皇子を奪い去られる油断があったとはのう！」

神部佐渡は、観念した。

「大目付殿に申上げます」

「きこう」

「清朝では、皇子黄親王の身柄とともに、千石船で、清朝内帑金の一部を、日本へ運んで参って居ります」

「まことか？」

「五島左衛門尉の家臣らが、オランダ船を借り受けて運んで参った模様――これは、まちがいないと、それがし確信つかまつります」

「五島左衛門尉がのう……」

皇子黄親王を、長髪賊の追跡から、かばって、日本へつれて来るのに、五島左衛門尉が一役買ったとは、大目付も全く気がつかなかった。

「で――それを、どこに匿したか、そこ許には目当がつくか？」

「いまだに、何処とも……」

かぶりを振ってから、佐渡は、ちらと図書へ、視線を返した。

図書は、にやりとした。

「事態は、複雑だの」

「左様で――」

清国の叛賊もまた、当然、その内帑金を、もとめているに相違ないのである。一部といっても、清朝の内帑金である。おそらく、日本の金にすれば、数百万両にあたるであろう。

図書は、宙へ眼眸を据えて、しばらく、沈黙をまもった。

その表情を窺い乍ら、神部佐渡は、せわしく、胸中で、おのが立場がどうなるか、思いめぐらしていた。

このたびの事件については、主君宗対馬守は、全く関り知らぬことであった。本国の城代家老と、神部佐渡が、こんたんを合せた陰謀であった。城代家老は、長髪賊頭領洪秀全の革命が成ると信じ、神部佐渡も、疑わなかったのである。

この大目付の出様如何によっては、城代も自分も、生命はない。

佐渡の心を、一瞬、殺意が走った。

すると、図書は、じろりと、佐渡へ一瞥をくれた。

「黄親王は、わしの手許に、在る」

「え？」

「宗家としては、皇子と内帑金と、一手占めにいたしたいところであろうが、そう甘い汁は吸えまい」

佐渡は、ほっとして、俯向いた。

「御意――」

「儲けは折半といたそうか」

図書は、そう云って、笑い声をたてた。

二

鎌倉は、三方山にかこまれている。したがって、境を越えて、他郷へ出るには、坂を越えるか、切通しを辿るかであった。

俗に、鎌倉の七切通し、あるいは、七口、という。

西からかぞえると——。

極楽寺の切通し、大仏の切通し、仮粧坂、亀ガ谷、巨福呂坂、朝比奈の切通し、名越の切通し。

いずれも、嶮しい要害の地である。

極楽寺の切通しは腰越、片瀬を経て東海道に通じ、大仏の切通し、仮粧坂は藤沢に通じ、亀ガ谷坂は山の内に通じ、巨福呂坂は山の内より大船または藤沢に通じ、朝比奈の切通しは金沢に通じ、名越の切通しは三浦郡に通じている。

五島左衛門尉は、毎年、七夕の日に、鎌倉山の内村の円覚寺に詣でるのを、ならわしとしていた。

円覚寺は、鎌倉五山の第二で、弘安五年に北条時宗の建てたもので、時宗の霊室は、ここの仏日庵にある。

五島家が、円覚寺に詣でて、日本の果ての領土の安泰を祈禱するようになったのは、幾代前からであったか、さだかではない。いまでは、五島家にとって、欠くべからざる行事のひとつであった。

供揃いは、きわめて、質素なもので、駕籠の前後に、それぞれ十人ばかりがならぶにすぎなかった。

今年は、参詣をすませると、なぜか、そのまま、山の内村を下って、由比ガ浜へ出、極楽寺の

切通しを越えて行こうとした。

異変は、その極楽寺山中で起った。

稲村ガ崎を彼方にのぞむ、白い浜の線を描いている砂浜の、とある松林の中に、十数騎、待ち伏せている者の険しい気配をみせていた。

いずれも、覆面をして、革襷を綾どっていた。

「おそいな！」

指揮者らしいのが、苛立たしげに、云った。この人物だけは、陣笠をかぶり、野羽織をつけていた。

「本当に、左衛門尉は、こちらへ来るのか？」

皆は、口を緘んでいる。

「もし来なかったら、われわれは、間抜けと自嘲しただけでは、すまされぬ」

「左衛門尉が、雪の下へ降りて来た報せは、すでにとどいて居ります」

一人が、云った。

「そこから、仮粧坂か、大仏の切通しをえらんだとしたら、どうなる？　極楽寺の切通しを越えて来る、という確証はないのだ」

その激しい声のおわるかおわらないうちに、

「あ——来た！」

一人の口から、発しられた。

「きこえる！」

皆は、はっとなって、耳をすました。

はるか遠方に、馬蹄の音が起るのを、風がつたえて来た。

やがて、ゆるやかな坂路を、一騎、まっしぐらに駆け降りて来ると、大きく、片手を振った。

五島左衛門尉が、まさしく、この街道を通って来るという合図であった。

「よし！　散れっ！」

指揮者は、命じておいて、おのれは、ひらっと馬上の人となった。

「よいな。手筈通りに！」

云いのこすや、馬腹を蹴った。

たちまちに、坂路を駆けあがって、やや広い台地に達した。

そこから渓間に移る薬研形の坂路が下っている。

木立ごしに、行列の影をみとめるや、馬脚のあがきをそのままに、一気に駆け下りるために、手綱をしぼって、鞍の上で、身を伏せるようにした。

いでたちは、いずれかの藩士が、主家の急務で、鎌倉へ急ぐためのものと、みせていた。

火急の使者に行き会えば、大名行列でも、道をあけてやるのが、当時の作法であった。

騎馬は、いっさんに、行列わきを駆け抜けて行ったが……、駆け抜けざまに、手裏剣を、駕籠めがけて、ぱっと投じた迅業は、凡手ではなかった。

ところが――。

一町余を駆けて、馬首を、さっとかえしたとたん、

「おっ！」

呻きが、口からほとばしった。

行列は、手裏剣を撃ち込まれ乍ら、なんの騒ぎも起さず、しずしずと行くではないか。

「しまった！」

公儀庭番の番頭は、総身の血が逆流するような憤怒にかられた。

坂上の空地に、一斉に、十数名の庭番衆が、躍り出た時、行列は、はじめて、歩行を停めた。

駕籠から、すっと、現れたのは、五島左衛門尉の身代りになっているかげろう左近であった。

三

凄惨な修羅場が、そこに現出した。

行列側は、刺客勢に、倍の頭数をもっていたので、最初は圧倒的な優勢を示した。いずれも、えらばれた腕前の面々だったからである。

しかし、入り乱れての闘いになるや、行列側は、みるみる崩れた。

隠密たちの、秩序のある、みごとな連繋をたもった、精悍で獰猛な攻撃力は、五島藩士らの各個の力を、ばらばらにしてしまったのである。

かげろう左近には、統率の妙を発揮する戦法の心得もなく、その意志もなかった。

駕籠わきに立って、敵味方の血みどろの戦いぶりへ、冷やかな眼眸をくれているだけであった。

攻撃陣は、藩士らが、浮足立ったとみてとるや、さらに、勢いをすざまじいものにした。隠密たちは、五島左衛門尉から、一杯くわされた憤怒にかられていた。その供の者どもを、殲滅しなければ、気がおさまらなかった。

左近が、差料を抜きはなったのは、ことごとくの藩士らが、襲って来る太刀を受けとめかねて、よろめくのを見てとってからであった。

「お主ら、引け！　おれ一人で、受けてやる！」

云いざま、ツツツ……と地をすべり出るや、無造作ともみえる片手振りの一閃で、隠密の一人に、血煙りをあげさせた。

その鮮やかな動きが、刺客団の動きを、一瞬、停止させた。

藩士らは、どっと、あとへさがった。

一剣に対して、十余の刀身が、切っ先をそろえる不気味な静けさが、空地上におとずれた。

——ここで、横死か。

左近の脳裡を、ちらと不吉な予感が掠めた。

しかし、それは、左近の口辺に、冷たい虚無の薄ら笑いを滲ませただけであった。

片手地摺りにとった左近は、氷のような視線を、敵陣へ送っていたが、不意に、

「かえすぞ！」

と、叫びざま、空けた方の片手を、ぱっと振った。

いつの間に、掌のうちにかくしていたか、駕籠に撃ち込まれた手裏剣が、その手から噴いて出た。

急使姿の番頭が、咽喉もと深く、手裏剣を刺しつらぬかれて、声もたてずに、のけぞった。

次の瞬間——

左近の痩軀は、敵陣にむかって、躍っていた。

「やあっ！」

「おーっ！」

「えいっ！」

短い、鋭い懸声を口からほとばしらせたのは、隠密たちであった。

左近は、文字通り、影となって、白刃をひらめかせた。

一人、また一人——おのれ自身の血汐を、鮮やかな飛沫にして、明るい宙に撒きつつ、あるいは、肩をすぼめて、のめり込み、あるいは、刀をすてて顔面を掩うて、よろけ、さらにはまた、無惨に首を刎ねとばされて、胴体だけを、朽木のように仆す者もあった。

このような乱闘になると、本能が、修得した技や経験を超えて、意外な働きをする。

斬った刹那の、残心の構えで、一呼吸を入れるいとまはないのであった。

左近は、薙ぎはらうのも、すりあげるのも、袈裟がけに振るのも、まっ向から斬り下げるのも、それをなした瞬間には、すでに、次の生贄に対する迅業に移るべき体勢になっていた。

またたく裡に、およそ半数を殪した左近は、突如として、地を蹴って奔り出した。
左近は、敵が公儀隠密たちである以上は、最後の一人になっても、退却しないことに気づいたのである。
空地を抜けて、灌木のしげる木立の中へ、飛び込むや、追いすがって来た一人を、向きなおりざま、斬り伏せておいて、ざざっと灌木を鳴らして、奥へ奥へ、身を移して行った。

四

同じ日——。
顔十郎は、いつもの風体で、品川宿を出ると、東海道をのそのそと、歩いて行った。
和中散や麦藁細工を売る店のならんだ大森を過ぎて行く頃、午になった。
「腹がへって来たわい」
呟いたものの、あゆみを停めるわけにいかなかった。
顔十郎は、二挺の駕籠を、尾けていたのである。
先の駕籠には鳴海屋という大阪商人が乗り、後の駕籠には檜下芸妓の妻次が乗っていた。
蒲田に来て、ようやく、梅屋敷の牀几に腰を下すことができた。
鳴海屋と妻次が、奥座敷へ、憩いに入ったからである。顔十郎は、茶酌みの小女に、
「あの二人の話を、そっと、ぬすみぎきしてくれぬか」

と、たのんで、小銭をくれた。
しばらくして、もどって来た小女は、
「旦那さん。あの人たちは、どことかの景色がいい、という話ばかりしているんですよ」
と、告げた。
「そうか。よしよし——」
顔十郎は、にやにやして、
「わしは、女の方に惚れていてな、あの商人めに抱かれやせんか、とはらはらして居るのだ」
「まあ、気の弱い。そんないかめしい顔をしていて——。悋気なんて、みっともないですよ」
「ははは……、とかく、男も女も、惚れてはいかんな。姐さんも、気をつけるがよいぞ」
「わたしは、惚れませんよ。男に惚れさせるんだ」
「いい心掛けだ。ひとつ、いい文句を教えようかな」
「あいな——」
「夢に見るより、この独り寝を、夢に見せたら、きっと来る、とはどうだ」
「あら、旦那さん、粋な文句をご存じだ」
「しかし、惚れさせるのは、二十歳までだな。女は、着物と同じでな。古くなったら、おしまいだ」
「あたしは、二十三ですよ」
小女は、つんとした。

「あと二、三年で、古着屋のつるしだ」
「まあひどい」
「一度濡れれば、もう剝げて来る、嘘も古手のくわせもの」
顔十郎は、小女に、背中を叩かれ乍ら、おもてへ出ると、歩き出した。
鳴海屋と妻次が、出て来た時には、もう姿は、見えなくなっていた。
妻次は、気がつかなかったが、いつの間にか、四、五人の浪人ていの男たちが、駕籠から十歩ばかりはなれて、歩いていた。
梅屋敷の裏手で待っていて、駕籠に従ったのである。
顔十郎は、ひと足さきに六郷川を渡って、米饅頭を売っている川崎の立場茶屋で、また、小女をからかっていた。
その前を、二挺の駕籠と浪人たちが通りすぎて行ったが、知らん顔をしていた。
そこの小女は、梅屋敷の小女とちがって、なにやら気にかかることがあるとみえて、顔十郎の冗談を、真顔で、受けて、
「どうしたら、男の浮気をとめることができるんですか？　旦那さん、まじないを教えて下さい」
と、たのんだ。
「お前さんは、亭主持ちか」
「はい」

「お前さんは、世帯持ちがよさそうだな」
「はい、それはもう――」
「したがって、火鉢にも、粉炭をつかうのではないかな」
「いけないですか？」
「いかんな。灰に書く字も待つ身の苦労、ぬしの粉炭が気にかかる、と申す。粉炭をやめて、大炭にするがいい。大炭――逢う炭、あかあかと、ひと燃えしたら、埋み火にして、朝まで持たせる。このコツだて。……粉炭が消えて、そのまま、ふるえていては、亭主は、もどって来ぬぞ。……わかったな」
顔十郎は、街道へ出ると、大声で、うたって行った。

留守をする夜は、
思いも凍り、
胸にゃ
苦労が、はりつめる。

黄金窟

一

江の島は、厳島、竹生島とともに、日本三弁天の一つである。潮の干ている時は、歩行で渡るが、潮が満ちると船渡しになる。

江の島譜によれば——。

開化天皇六年四月、江頭の南方にあたって、海面一夜鳴動して、碧空に注ぎ、黒雲もうろうとして、洋々たる百瀬天地を分たず、ようよう、その鶏鳴に及んで、竜女の音楽千波の中にきこえ、天童舞い遊んで、花降り異香薫ず、すでに怒濤ながくしずまり、暴風あまねくつきて、孤島海上に湧出す。いまの江の島これなり。

と、もったいぶった、有難そうな由来を、つくりあげている。

一夜で現出した孤島に、天女が降臨して来た、というわけであるが、どうやら、難破船が流れ

ついて、その中に、異国の、たぶん金髪の女でも、虫の息で、横たわっていたものであろうか。

深川櫓下の芸妓妻次は、鳴海屋という商人とともに、島の旅宿に着いた。

廊下をへだてて、部屋をとり、妻次が、重い帯だけ解いて、くつろいだ時、鳴海屋が、声をかけて、入って来た。

鳴海屋は、後藤宗次郎が、御旅所の禰宜に親しい知人がいて、その世話で、岩本院の宿房に隠れている、と説明していた。

そこへ使いをやってくれたのだ、と思い、妻次は、いそいそと、鳴海屋を迎えて、

「あの人に、今日のうちに、会えますでしょうか？」

と、訊ねた。

「そいつが、あいにくだった」

鳴海屋は、気の毒そうに、かぶりをふった。

「昨日、鎌倉へ行きなすった、とかでね」

「まあ——」

妻次は、がっかりした。

「いや、明後日あたりは、こちらへもどって来なさる、ということですから、それまでの辛抱ですよ。……お、そうそう、もしお前さんが、たずねて来たら、手紙に書いておいた通り、宝の山に案内するから、待っているように、というおことづてでしたよ」

「宝の山に？」

妻次は、怪訝に、首をかしげた。
「そんなこと、手紙には、書いてはありませんでしたけど……」
「かくさなくてもいいことだ、姐さん」
鳴海屋が、商人らしからぬ、冷やかな形相になった。
妻次は、その視線をあびて、微かな戦慄をおぼえた。
「後藤さんの手紙を、お前さん、ずうっと、肌身はなさず、持っていなさるだろう。それを、ちょっと拝見できないものか、と思いますよ」
妻次は、たしかに、後藤宗次郎の手紙を、いまも、からだにつけている。
妻次は、怯じずに、鳴海屋を瞶めかえして、
「鳴海屋さん、まさか、わたしを騙して、ここへ、つれて来たんじゃないでしょうね？」
「と、いうと？」
「あの人は、もう、この世にいない。そうじゃないんですか？」
「ふふふ……」
鳴海屋は、狡猾そうな含み笑いをした。
次の瞬間——。
妻次は、男に躍りかかられて、当て落され、畳へ崩れ落ちていた。
鳴海屋の手さばきはあざやかであった。妻次のからだが、くるりくるりと、右へ、左へ、ころがされるたびに、明石縮が脱がされ、緋縮緬の対丈襦袢がむしりとられ、みるみるうちに、羽二重の肌襦袢と二布だけにされてしまった。
爛熟した堅肥りの肢体が、その薄ものから透けて、思わず、鳴海屋の手を停めさせた。
——佳い女は、やはり、からだも、尤物だて。
このまま、手紙を奪いとるだけで、すてるのは、まことに惜しい。
鳴海屋は、あさましく、ごくりと生唾をのみ込んだ。
目的を急いでいなければ、鳴海屋は、獣欲をとげることをはばからなかったろう。
後藤宗次郎の手紙は、肌襦袢の下に、頸からかけたお守袋の中に在った。
柔肌のぬくもりのある巻紙を抜いた鳴海屋は、べつになんの秘密めいた字句も見当らぬ文面へ、目を注いだが、失望の色はみせず、懐中にすると、出て行った。
……それから、どれほど過ぎたか。
ふっと、意識をとりもどした妻次は、自分のあられもない姿態に気づいて、小さな悲鳴をあげて、起き上った。
「やっと、正気にもどったようだな、姐さん——」
その声が、背後から、かかった。
ふりかえると、床柱に、凭りかかって、顔十郎が、笑っていた。

二

妻次は、いそいで、きものをつけると、
「なんてことを！」
と、顔十郎を、にらんだ。
「落花狼藉は、わるくないものだ。つい、見とれていて、目をさまさせるのを忘れていた」
「ひどい！」
「なに、わしの忠告をきかなんだ罰だ、と思ってもらうのだな」
ようやく、気をしずめた妻次は、
「旦那は、あとを尾けて来て下すったのですか？」
「うむ。あとになり、さきになり……まことに、つまらん役割だったな」
「どうして、わたしが、はだかにされるのを、たすけて下さらなかったのです？」
「わしの情婦ではなし、いや、わし自身も、お前さんのきれいなはだを眺めたい興味があったな」
顔十郎は、のっそりと立ち上ると、
「鳴海屋め、お前さんを、わざわざ、この江の島までつれて来て、はだかにして弁財天とくらべたとは、ちょっと粋な心掛けであったな。……手紙は、手に入れた。さて、どう出るか、だ」

「あの手紙が、なにか――？」
「重要だから、手に入れたのだ。……後藤宗次郎の書蹟にまちがいないのだな？」
「はい」
「すると、後藤宗次郎は、お前さんが、肌身はなさず大切にしまっておくのを計算に入れて、手紙の中に、何やら秘密の覚書を書いておいた。――ということになる」
「だって、旦那、あれには、そんなことは、一文字だって、書いてありませんでしたよ」
「そこだ。……水出し、というテがある。両国の広小路などで、やっている、明礬の汁で文句を書いて、乾かしておいて、そいつを水にひたすと、文字が浮き出して来る――あのテをつかってあるのかも知れぬ」
「そ、そんな大切なものを、どうして、むざむざ、あいつに、取らしてしまったのです？」
妻次は、辰巳女らしく、きりりと、柳眉をつりあげた。
「こっちは、一人だ。なるべく、手数をはぶいて、むこうさんに、事をはこんでもらう。獲物を見つけて、いざ、摑もうとしたところを、横あいから、失礼して、頂戴する、という寸方だて」
顔十郎は、にやにやして、出て行こうとした。
「旦那、わたしは、どうなるんです？」
「ひと風呂あびて、化粧して――、窓にもたれりゃ、海やら月やら、夏景色、月にうかれてほとぎす、思いこがれて泣きあかす」
廊下へ出て、

「みじかき夜半は、ねむられぬ、枕もじゃまになるわいな」

と、うたい乍ら階段を降りて行ってしまった。

宙にうつろな眸子を置いた妻次は、淋しさが、にわかに、泪とともにこみあげて来て、唇を噛んだ。

三

江の島の弁財天は、南の渚の窟の中に、まします。

いったい、江の島は、奇妙な窟がたくさんあって、そのおかげで、竜が棲んだという伝説がつくられたらしい。

窟本宮より東にまわると、第二第三の窟があって、白竜窟という、二つの白竜が棲んだ。第四の窟には、諸竜が棲んだ竜池があり、滝のある第五の窟を飛泉窟。ほかに、島のめぐりに、十二窟。また、仁田抜穴、というのもある。俗諺に、仁田四郎忠常が、富士の人穴より入って、この島の中腹へ抜け出した、と伝える。

顔十郎は、島の山坂を越えて、稚児ヶ淵へ降りて行く。険しい坂道から、はるか七里ヶ浜から葉山三浦の山々が、かっと眩しい午後の陽ざしに光る海の彼方に、望まれる。

坂道を登りつくと、西に、大磯小磯から、小田原へむかっての、ぼうぼうたる海原がひろがる。箱根の山は、はるか遠くに、かすんでいる。

富士の嶺は、雲にかくれて、見えぬ。

顔十郎は、視線を、眼下に移した。

岩道の下が、稚児ヶ淵であった。

むかし、建長寺広徳院に、自休蔵主という沙門がいた。奥州信夫の出であった。ある時、宿願のことがあって、江の島に参詣した。山中で、美少年に遇った。蔵主は、一瞥して、魂が宙にとび、恋慕の情に、われを忘れた。蔵主は、美少年の伴う僕に、そっと、何処の人かと問うた。

鎌倉の相承院に住む白菊という稚児だ、ということであった。

自休蔵主は、ひそかに、想いのままの文をしたためて、使いに持たせたが、応ずる気色はなかった。しかし、蔵主の想いは、日々につのり、いろいろと手をかえ品をかえて、迫った。稚児は、さらに、受けつける様子を示さなかった。

やがて、白菊は、自休蔵主のあまりの執拗な求愛に、堪えかねて、ある夜、まぎれ出て、江の島にやって来ると、渡し守に扇子を渡し、

「もし、われを尋ねる人があれば、これを見せて欲しい」

と、云いのこしておいて、この淵に、身を沈めてしまった。

扇子には、次の歌がしたためてあった。

白菊にしのぶの里の人問はば

思ひ入江の島とこたへよ
うき事を思ひ入江の島かげに
すつる命は波の下草

あとを追うて来た自休蔵主は、この辞世を読んで慟哭し、おのれも、その淵へ、身を投じて果てた。

見下せば、いかにも、不幸な人が、身を投じそうな荒涼とした眺めであった。

大きなうねりの浪が、ぶちあたって、高い白い飛沫を撒いている岩礁は、おそらく、幾人かの命を奪ったに相違ない。

顔十郎は、岩道を下って、その飛沫をあび乍ら、先へ——竜窟へ、進んで行った。

鳴海屋とその護衛役の浪人たちが、稚児ヶ淵へ、姿をあらわしたのは、それから、四半刻のちであった。

岩礁に降り立った鳴海屋は、

「さきに、来ていると思っていたが——」

と、苛立たしげに、云った。

手下に、船をまわすように、命じておいたのである。

やがて、一艘の漁船が、白竜窟の方角から、漕ぎよせられて来た。

鳴海屋と浪人たちは、海には馴れている動作で、船へとび乗った。

鳴海屋は、漕ぎ手に、

「十二窟のひとつの、入口に、小さな石塔が建っているやつだ」

と、指定した。

船は、舳先をまわすと、うねりに乗って、東へむかった。

沖あいには、ふたつみつ、釣船が浮かんでいる。

真夏の陽ざしは、目が痛くなるほどぎらぎらし、海面も、その光を照りかえして来る。しかし、汐風はすずしかった。

鳴海屋は、微笑を泛べて、この眩しい景色を眺めていた。

あっけないくらい、莫大な金が、自分の懐中へ、もう九分九厘、ころがり込んで来たのである。

べつに、苦労をしたわけではない。左様、五島左衛門尉の家臣らが、オランダ船で、清朝内帑金を運んで来るのをかぎつけて、この海賊の親方は、平戸のすみかから出て、あとを追跡するのに、少々手間どっただけである。

皇子黄親王の護衛役であった後藤宗次郎が、徳光寺住職と相談して、内帑金を、江の島の窟へ、一時隠匿した事実をつきとめるのに、さまでの苦心は要しなかった。ただ、どの窟の中かを、つきとめればよかった。

後藤宗次郎は、無頼の徒を十人ばかりやとって、隠匿の仕事をやってのけ、その連中をのこらず毒殺して、海底の藻屑にしてしまった模様であった。

その直後に、公儀の刺客たちに襲われて、壮烈な斬死をしたのである。

どうやら、後藤宗次郎は、徳光寺住職にも、どの窟に隠匿したか、報せるひまがなかったようであった。しかし、後藤宗次郎が、徳光寺住職に報せる手段をとらずに、死んだとは、鳴海屋には、考えられなかった。

後藤宗次郎が、江戸へ手紙を送った有無を、藤沢宿の問屋で調べてみると、むかしの情婦であった深川櫓下の芸妓妻次に、出していることが判った。

つまり、そのなにげない手紙も、徳光寺住職の手に渡れば、かくされた秘密の文字が読まれる、という要心ぶかい手段がとられたのである。

鳴海屋は、すでに、手紙は徳光寺住職に渡ったものと思い、襲って、これを斬ったが、どこにも見当らなかった。

——あるいは、まだ、妻次が持っているのではないか。

と、思って、言葉たくみに、江の島まで、さそい出してみると、はたして、肌身につけていたのである。

数百万両にも相当する内帑金が、こんなに、やすやすと懐中にころげ込んで来ようとは！

鳴海屋には、かえって、そのあっけなさが、不安にさえ感じられた。

たしかに——。

鳴海屋の予感めいた気持は、地震を予知するけものの感覚に似ていた。

四

「お——あれだ！」

鳴海屋が、歓喜の声を発して、指さした——とたんであった。

艫（とも）に、こんもりと盛りあがった菰荷（こもに）が、ぐらっと動いた。

菰をはねて、のっそりと姿をあらわした顔十郎の異様な面相は、鳴海屋はじめ、用心棒たちを、愕然とさせる効果が充分にあった。

「四天王十二神将の下知により、白竜の化身が、貴様ら悪党ばらを征伐いたす——」

もったいぶって、顔十郎は、うそぶいてみせた。

鳴海屋が、それに応じて、懐中から摑み出した短銃を、ぶっぱなした。

刀の鍔（つば）で、弾丸をはじきとばすのは、顔十郎の特技のひとつであった。

狭い船上である。

五人の用心棒たちが、一斉に、抜刀することさえ、面倒であった。

一人また一人と——、海中へもんどりうたせるのを、顔十郎は、愉しんでいるようにさえ、みえた。

鳴海屋一人をのこすと、顔十郎は、白刃を鞘におさめて、

「ものは相談だが、鳴海屋——、ひとつ、乗らぬか」

と、云いかけた。

すでに、観念のほぞをきめていた鳴海屋は、流石は、三十年間海賊稼業できたえた度胸で、聊かもわるびれなかった。

「うかがいましょう」

「あの窟の中にかくしてある清朝内帑金をねらっているのは、お主だけではない。公儀大目付浅野図書、宗対馬守の江戸家老神部佐渡。まだほかにも、幾人か居る」

「……」

「しかし、これは、いわば、皇子黄親王が、日本へ来るにあたっての手土産だ。そうではないか」

「そうでありましょうな」

「されば、公儀が、いったん受けとって、これを、天下のために有益に使うのが、筋道だろう」

「御尤もで——。しかし、伺いますが、ご公儀に、大金を受けとる器量を持った御仁が、居りますか？」

「居るな。一人だけ——」

顔十郎は、先般、目かくしされて、会った人物を、思い浮べていた。

どうやら、それが、将軍家自身であった、と顔十郎は、信じるようになっていた。

「どなた様で？」

「将軍家さ」

「へえ——それは？」

「わしらは、施政については、まず公儀要人の顔ぶれを思い泛べるくせがある。肝心の、いちばん偉いのを忘れているのだ。いちばん偉いのが、実際に、人間としても偉い、ということに気がついたら、これは、愉快な話ではないか。あたりまえのことが、あたりまえであった、という事実を、時には、すなおにみとめようではないか」

「へい」

「鳴海屋、どうだ、お主の海賊船を貸さぬか。堂々と、江戸まで、内帑金をはこんで、将軍家へ、さし出そうではないか。これも、男として、はればれしい仕事だぞ。……やがて、五島左衛門尉が、この江の島へやって参る。江戸城へはこび入れる万端の手筈は、五島左衛門尉にまかせればよいのだ。どうだ、鳴海屋？」

そう促されて、しばらく考えていた鳴海屋は、

「よろしゅうございます。承知いたしました」

と、こたえた。

大目付浅野図書の邸宅に監禁されていた黄親王が、別の大目付によって、すくい出され、将軍家に対面して、内帑金を贈る儀式がとりおこなわれたのは、それから、十日ばかり後のことであった。

陰謀熊

一

「卒爾ながら……」

不意に、背後から、声をかけられて、顔十郎は、ぶるっと、ひとつ胴顫いした。

小意気な黒板塀へむかって、放尿している最中のことであった。

若い女の綺麗な声であったので、面くらったのである。

やむを得ず、中断して、向きなおった。

どこかの大名屋敷の腰元であった。木彫のように無表情である。

立小便している薄穢い浪人者に、平気で声をかけるのは、よほど無神経と云わざるを得ない。

それとも、この女中は、屋敷の奥向きで、厠係でも勤めているのか。それならば、立小便ぐらい目撃しても、一向に平気だろう。

大名屋敷では、殿様も奥方も姫君も、厠に入って、自ら手をよごさない。

大名屋敷の厠は、広くとってあって、三室になっている。入側に、湯桶小盥を置いた手洗い場が設けてある。次が、二畳か三畳の控えの間になり、戸棚が作られ、下裳や足袋や不浄日の道具が用意してある。

殿様（あるいは奥方）は、ここで草履をはきかえて、奥の三畳（四畳半の場合もある）の御用所に入る。練香が焚かれている。

万年と称ばれていて、おそろしい深さに掘られて、汲みとることはない、下に鉄の格子が張ってある。女中や小姓が殺されて、この中へ投げこまれるという出来事は、珍しい話ではなかった。行方不明にするには、もってこいの場所であった。

お附き女中は、御用所に一緒に入って来て、落し口に、主人がまたがると、うしろから裾を捲りあげ、それが済むと、よく揉んだ美濃紙で、丹念に拭く。

芳紀に達した姫君でも、臀を拭かれることに、羞恥はなかった。物心ついた時からのならわしなので、そうするものだと思っているのであった。

二十歳あまりの腰元は、向きなおった顔十郎を、正視して、

「お願い申したき儀がありまする。わたくしに、ついて参られますよう――」

と、云った。

たのみがあるにしては、ひどく命令口調であった。

「おことわり申す」

顔十郎は、そっけなく、かぶりを振った。

「なぜです！」

咎めるような目色であった。

「それがしは、貴女の御主人の家来ではない。来い、と云われて――その行く夜さの、足の軽さようれしさよ、というわけには参らんな。それに、それがしは、立小便を、もうちっと、つづけたい」

「どうぞ、おつづけを」

「左様か」

顔十郎は、腰元に背中を向けると、また、ジャアジャアやりはじめた。

雫を切って、褌の中にもどし、悠々と歩き出した。

腰元は、黙って、跟いて来る。

青空の澄みわたった初秋の午後であった。赤とんぼが、中空を、進んだり停ったりしている。

本所も、このあたりは、金持の商人の別宅が多く、ひっそりとして、人影もすくないのであった。

顔十郎は、ずうっと、そ知らぬふりで、往還をひろって行き、やがて、猪牙の通う掘割沿いに出た時、視線をまわした。

腰元は、一間の距離を置いて、ずうっと跟いて来ていた。

顔十郎が、立ちどまると、腰元も、立ちどまった。

「どこまで、跟いて来る積りかな？」

「どこまでも――」

腰元は、無表情で、こたえた。

「たしかに、跟いて来るかな？」

「参ります」

顔十郎は、にやりとした。

次の瞬間、顔十郎の痩身が、宙に躍った。とみるや、二間を跳んで、むこう岸から、いま離れようとしている猪牙の舳先へ、とんと乗った。

――どうだ、ここまでは来られまい。

顔十郎が、見かえると、腰元は、なんの動揺もしめさず、じっと、視線を送って来たが、つと、前を押えた。

顔十郎は、思わず、

「お！」

と、声を発した。

啞然とさせられたことだった。

かるがると、河岸縁を蹴って、猪牙にむかって、翔けて来たではないか。

わずかに裳裾の紅い裏と白い脛を、ちらと見せただけで、両膝で前をきちっとはさんだ姿勢で、みごとに、水面を掠めて、飛び移って来た。

あきれて、口もきけないでいる船頭の前へ、かるやかに降り立って、はじめて、にこりとしてみせた。

「負けた！」

顔十郎は、おのが頭を、ぽんとひとつ叩いた。

二

猪牙は、猿江橋をくぐって、小名木川へ出た。

「どちらへ、やりやすか？」

船頭に訊かれて、腰元は、下の方を指さした。

「貴女の御主人は、それがしを指名されたのかな？」

「いいえ」

「どういうのであろう？」

「わたくしの一存にて、お願い申しました」

「と申すと？」

「小用を足されるお手前様の後姿に、一分の隙もないのを見とどけました」

顔十郎は、苦笑した。

「で——貴女の御主人は、何様であろう？」

「いまは、打ち明けられませぬ」

「それがしの剣を必要とされるのか？」

「はい」

「人を斬るのは、馴れて居らぬわけではないが、納得できる理由による」

「人を斬るのではありませぬ」

「何を斬る？」

「熊です」

「熊？」

顔十郎は、あまりにも意外な返辞に、あんぐりと口を開けた。

「熊とたたかえと申されるか。ふむ。……これは、考えねばなるまい」

「お手前様は、もう、承知なさいました」

腰元は、きっぱりと云った。

「承知したのはしたが、熊とは——どうも」

顔十郎は、長い頤を撫でた。

「おそろしいのですか、熊が？」

腰元は、冷やかに訊ねた。

「猫を扱うようなわけには参らんだろう」

こたえ乍ら、顔十郎は、別の興味を起していた。

これには、何か重大な仔細が、あるに相違ない。

莫迦大名が、熊と人間を闘わせて悦ぶ、という趣向ならば、この腰元が、一人合点で、自分のような浪人者をやとうわけがあるまい。どうも、この腰元は、ただの娘ではないようである。

顔十郎は、腕を組んで目蓋を閉じると、猪牙がゆれるままに、身をまかせた。

猪牙は、猿江の町家のならんでいる五本町を過ぎて、やがて、右の方にひろびろと、八右衛門新田が展けるところまで下って来た。

腰元は、大島橋をくぐって、左へ折れるように命じた。

掘割をはさんで、猿江御材木蔵と洲崎村の田園であるこのあたりは、もう人家は、はるか遠方に散在しているだけであった。

名も知れぬ橋へ来た時、腰元は、

「ここでよい」

と、停めさせた。

河岸道へ上った顔十郎は、視野いっぱいにひろがった稲穂の海を眺めやって、

「狐に化かされて居るのかも知れぬ」

と、呟いた。

腰元は、きこえぬふりで、先に立って歩き出していた。

ゆるやかな丘陵の麓を、巻くように、欅の林が、行手をさえぎっていた。

まっすぐに、そこへ辿りつくと、腰元は、はじめて足を停めて、顔十郎を、ふりかえった。

「おことわりして置かねばなりませぬ」

「なんでござるな？」

「熊を斃すまでが、お手前様の役目でありますれば、そのほかのことに、余計な詮議の心を起してはなりませぬ」

「さあ、それは、請けあいかね申すな。それがしは、猟犬ではない。ただ、命じられた仕事だけを済ませて、おとなしく餌を貰う——その餌も、いかほどか、貴女はまだ、申し出ては居らぬが——それだけで、なんの疑念も起さず、ひきさがるか、どうか」

「首尾よく、熊を退治して下されば、金子百両、まちがいなく、渡します。失礼乍ら、お手前様にとって、百両は、生涯二度と手にできぬ大金ではありませぬか」

——ちと、この娘は、高飛車すぎるようだ。娘というものは、もうすこし、つつましい態度であってもらいたいものだ。

「たしかに、百両は、それがしごとき尾羽打ち枯らした素浪人にとって、大金すぎるが、目下、のどから手が出るほど、欲しいという次第でもない」

「怯じ気づいたのですか？」

腰元は、冷やかな蔑みの目色になった。

「ま——ご案内願おう」

顔十郎は、とぼけた表情で、促した。

三

苔を置いた石垣が、めぐらしてあった、石垣の前には、深い濠がめぐらされ、深緑の水をたたえていた。睡蓮が、白い花を浮かべているのが、いかにも、静かで、美しい。

石垣の上は、塗籠の築地塀であった。狭間が設けられてある。

石の太鼓橋のむこうに、堂々たる正門が構えられ、鉄の延板を打った扉が、どっしりと閉ざしてある。

門の両脇は、長屋造りで、武者窓と銃眼が開いている。

いかにも、古い。そして、岩乗で、いかめしいたたずまいである。

徳川の時世に入ってから建てられたものではなさそうであった。大名の下屋敷とは、受けとりかねる。

鎌倉時代の豪族の館と云えそうである。時の政権の栄枯盛衰とかかわりなく、この家門は、厳然として守りつづけられた——その不屈の意志が、構えに滲んでいるようである。

顔十郎は、正門にあてられた腰元の眸子が、異様に強い光を発するのをみとめた。

「では——」

腰元は、われにかえると、一揖しておいて、踵をまわそうとした。

顔十郎は、いささか、ばからしい思いで、

「勝手に忍び入って、熊を片づけて来い、と申されるのか？」

「わたくしは、丘の上の阿弥陀堂で、お待ち申して居ります」

腰元は、すたすたと遠ざかって行った。

顔十郎は、まさか、正門から忍び入るわけにもいかないので、濠に沿うて行き乍ら、手ごろの箇処を物色した。

塀が切れて、倉庫の白壁になっているところで、顔十郎は、よし、と肚をきめた。

すばやく、衣服を脱ぎ、刀と一緒にまとめて、頭にのせると、濠へ降りた。

水は冷たかった。底なしの沼のように、どろりと重いのも、薄気味わるかった。

波紋をひろげて、ゆっくりと泳いで、石垣にとり着くと、水面から一間ちかい高処まで、苦もなく登った。

そこからが、ひと苦労であった。

刀と、刀から抜きとった小柄に、下げ緒をくくりつけ、まず小柄を、白壁へ、打ち込んでおいて、それへ足をかけて、そっと乗った。次に、刀を、小柄から三尺ばかり上へ、ぶすと刺し込む。その峰へ乗って、下げ緒をひっぱって、小柄を抜きとる。そして、小柄を、刀から三尺ばかり上へ、打ち込んでおいて、それに乗り、刀を抜きとった。

刀と小柄を交互につかって、足がかりをつくり乍ら、白壁を登って行くのであった。

ようやく、倉庫の屋根に達して、衣服をつけた顔十郎は、塀の内側を、見下して、自分の見当がはずれていなかったのをさとった。

塀の下は、やはり深い濠になっていて、水は、はるか底によどんでいた。のみならず、濠の中に蠢いているのを、無数の毒蛇と、みとめた。

館の中へ侵入するのは、この倉庫の屋根以外には、ないのだ。

——よほど、要心ぶかく、かまえている。これでは、あれほどの技をそなえている娘にも、忍び込むことは叶わぬ。

顔十郎は、屋根に身を伏せて、屋敷を見わたした。

宛然、森をそのまま、屋敷の中に容れたように欅や杉や松の巨樹がしげって、視界を掩うていた。

建物は、その彼方にある模様だが、わずかに、屋根の一端が遠望されるだけであった。

深い木立の中を、巨大な黒い熊が、のそのそと歩きまわっているのを想像して、

——どうも、とんだ仕事を引受けてしもうたわい。

と、顔十郎は、苦笑せざるを得なかった。

泣くとも笑うともつかぬ甲高い叫び声が、木立をつらぬいて、きこえて来たのは、それから数分と経たぬうちであった。

つづいて、バタバタと走って来る跫音が、つたわって来た。

日輪は真紅の輪郭をみせて、西の地平線へ沈もうとしている時刻であった。

梢に光が溜って、つかの間の眩しさをゆらめかせているのが、かえって、木立の中を、一層昏いものにしていた。

じっと、双眸をこらして、透し視ているうちに、走って来る人影を、とらえた。

頭髪も乱れ、髯ものび、木間漏れの光をあびた貌は死人のように、蒼ざめていたが、まだ若い人物であった。

熨斗目の紋服を着崩して、片袖をほころばせ、袴の脇も破っていた。

ふいごのように、肩を喘がせ乍ら、必死に遁れようと、木立をかいくぐって来たが、追って来た三人の士に、たちまち、捕えられた。

「は、はなせっ！」

死にもの狂いに、抵抗しようとしたが、非力のかなしさで、両腕を後にねじられると、いたずらに、首を振るばかりであった。

「わ、わしは、狂っては居らぬ！　ち、ちがう！　……わしは、正常だぞ！　わ、わかってくれい！　お、お願いだ……。たのむ！　か、か、上屋敷へ、か、かえしてくれっ！」

声をふりしぼって、歎願するのを、三人の士は、容赦なくひきずり乍ら、

「殿！　……食い殺されてもよろしいのか。はよう、屋敷へ、おもどりになるのだ！」

「さ——殿！　おとなしゅうなされい……。ほれ、そ、そこに、熊が、現れ申した」

「お！　出た！　……殿！　はようっ！」

口々に、脅した。

まさしく——。

木立の奥に、巨きな黒いものが、動いた。

捕われた人物は、悲鳴をあげると、一瞬、立ち竦んだ。
とたんに、三人の士は、主人をすてて、奔り出した。
「ま、待ってくれっ！」
主人は、恐怖の叫びをあげて、家来たちの後を追った。
落葉を鳴らして、それは、そこへ出て来た。
まさしく、熊であった。
遁れ去った者たちの方角を、ちょっと窺うような様子を示してから、のそのそと、ひきかえして行きかけた。
それにむかって、不意に、
「人間は、ここにも、一人いる」
と、声がかかった。
熊は、立ちどまって、首をまわした。
顔十郎は、樹蔭からふらりと出ると、ゆっくりと、熊に歩み寄った。
熊は、首を挙げると威嚇のかまえをとった。
顔十郎は、平然として、
「斬られたいか、熊公？」
と、云いかけた。
「斬られたくなければ、降参するのだな」

さらに、一歩進んだ。
すると、熊は、あとずさりをはじめた。
「ははは……臆病者よ。人間に出会って、あとへさがる熊がいるとは、あまりきかぬことだ。……ご苦労な役目だが、熊の皮をかぶっているうちに、いつの間にか、人間ばなれがして来たのではないかな」
さっと、迫るや、したたか、顎のあたりを蹴あげた。
熊は、あっけなく、ひっくりかえった。
「たわけ！　たとえ、悪事に荷担するにもせよ、熊に化けるとは、下の下だぞ。熊の姿のままで、討ちすてられたところを、親兄弟に見られるのを、想像したことがあるか」
顔十郎は、熊の首をはねのけて、人間の首を、摑み出すと、
「まだ、三十にもならぬのか……。なさけないとは思わぬか、親兄弟へのせめてもの申しわけに、この阿呆げた芝居の筋書を、ちくいち、喋ってきかせろ。あとは、また、熊になっていろ。こんどは、こっちが、熊を利用して、ひと芝居打ってやることになる」
それから、四半刻のち、熊は、木立を抜け出て、宏荘な建物へむかって、庭をまっすぐに、横切って行こうとしていた。

裏店大名

一

三十畳あまりもあろう広間であった。もとは、主人が、祝宴などに使っていたのであろうが、いまは、宿直の士たちの溜にあてられているのであった。

十数人が、秋の夜長をもてあまして、博奕をしたり、雑談に花を咲かせたり、酔って手枕で寝そべったり、怪しげな写本を読み乍らひとりにやにやしたり——武士道が地に堕ちた光景を呈していた。

「おい、品川で、湯灌場買いが、百両ため込んで、早桶屋に殺されたという話があるぞ」

どこからきいたか、そんなくだらない話題が持出されていた。

この時代には、家持ち以外は、自分の家では、亡くなった者の湯灌ができないしきたりであった。寺院に湯灌場があって、そこでしてもらうことになっていた。亡者から脱がせた着物や、早桶に掛けて来た衣裳などは、寺男たちの余得になる。それを、寺男から買い集める商売があった。これを湯灌場買いと云った。

亡者から脱がせた着物だから、滅法に安値であった。湯灌場買いは儲けが大きかったのである。

「湯灌場買いが、百両ためる時世か。ふん、われわれは、一生かかっても、二十両とたくわえられん」

「お主、いっそ、二本差しを止めて、葬儀屋になったらどうだ。湯灌場買いも兼ねてな」

「莫迦を云え、はばかり乍ら、浪人しても、大店の用心棒になる腕前はきたえてある」

この時、寝そべって、笑い本を読んでいたのが、むっくり起き上って、

「何かあるぞ、何か！」

と、大声で、云った。

「藪から棒に、なんだ！」

「殿が、何故に、この古館に、私牢住いさせられているか。……おれは、殿が狂気とは思えん。たしかに、殿は、小心の上に、去年熱病を患われて以来、神経が弱って居る。しかし、断じて、狂気しては居らん、これは、何かある」

「それを詮索して、なんの得がある？　おれたち下級の者の知ったことではなかろう」

「いや、知る必要がある。重役ばかりにうまい汁を吸われては、やりきれんぞ」

「うまい汁？　それは、どういうことだ？」

「おれは、知っているのだ。去年だけで、国許から、ざっと三万両の金が送られて来て居る。江戸表のまかない分のほかだぞ」

これをきいて、一同は、急に、真剣な表情になって、その男の顔へ、視線を集めた。

殆どの大名の内証は、極度に窮迫している時代であった。大阪商人から、三年さき五年さきの藩米を抵当にして、借金していない大名はないといっていいくらいであった。

まことに、大名の貧乏は、ひどいものであった。

天下が泰平になれば、干飯をかじり、濁水を飲んで、奮闘した戦国時代の反動が起り、にわかに奢侈に流れ、贅沢に陥る。

元和偃武からわずか六十年後の、元禄の頃に、すでに大名の窮迫は、はじまっていた。

山崎闇斎の「蓋徹問答」は、元禄頃の著述であるが、大名の財政がいかに苦しくなっているか、つぶさに論じてある。麹町にて、すでに、大名専用の質屋もできていた。

大名が貧乏したのは、奢侈贅沢もあるが、参観制度も原因している。江戸表と国許を、行列で往復するのは、非常な費用がかかったのである。また、幕府では、大名に、軍用金をたくわえさせぬために、御手伝という名目で、あらゆる方面に、出費させたのである。公儀の城廓や神社仏閣の修復とか、道路や河川の工事とか。さらに、大名は、冠婚葬祭から日常の生活に至るまで、格式というものがあって、これを変えるわけにいかず、借金しても、格式だけは守らねばならなかった。火災、水害、旱損などの災難も、すくなくなかった。

藩の財政の不足を補うためには、種々の手段が講じられた。倹約はもとよりである。反古にひ

としい紙幣の発行。これは、いわば、家臣たちからの借金であった。つぎに、領内の百姓町人に、用金を申しつけて、召し上げる。さらに、前述のごとく、大阪商人から借りたのである。

三年さき五年さきの収穫を抵当にして金子調達をする手段は、空米切手発行である。すなわち、無い米の切手を売出すわけであった。

曽て、筑後の有馬藩は、総高四十二万石もの空米切手を発行して、ついに、進退谷まって、幕府に泣きつき、決済方法として、一割七分だけを現金で支払い、残額を二十年賦とした事実がある。

これほどに、大名の財政は、窮乏を告げていたのである。

わずか三万石に足らぬ備前の小藩である、末松というこの家に、三万両という大金が左右できるなどということは、家中の者たちに、想像もできかねた。

家中の者たちは、渡るべき俸禄のうち、すでに、数年前から、三分の一を借り上げられていたのである。

末松家は、岡山城主池田家の親戚で、名門にかぞえられていたが、領地の内高は、実際は二万石に満たず、貧乏は慶安の頃からはじまっていた。領地の五分の一は瀬戸内海の小島だったので、その産物で、領内の人口を半分もやしなうことさえ不可能だったのである。

「おい、権藤、貴様は、確証あって、そんなことを云うのか？」

「ただの臆測で、お主らに血相を変えさせはせん。たしかだ。たしかに、三万両、送られて来て居る」

「何に使われるのだ、その金は？」
「それが、わからん。兎も角、重役たちが、うまい汁を吸って居ることは、まちがいない」
「事実とすれば、容易ならんぞ。われわれとして、黙っては居れん。月に一度も、格子女郎さえ抱けぬ貧乏ぐらしを強いられているのだぞ」
「女どころか、頭のついた魚さえ、月に一度も、食膳については居らん」
不平不満が、どっと、全員の口から吐き出された。

二

ふと――、一人が、廊下に何者かがいる気配を感じて、
「誰だ？」
と、どなって、さっと障子をひき開けた。
そこに。
くろぐろと、うずくまっていたのは、熊であった。
「びっくりさせるな！　いつまで、そんなものをかぶっているのだ。暮六つが過ぎれば、さっさと脱いでしまえ。たわけ！」
いまいましげに、あびせておいて、ぴしゃっと障子を閉めると、
「山部の奴、熊に化けているうちに、チト頭が変になったのではないか」

と、吐きすてた。
熊は、のろくさく起き上ると、奥へむかって、のそのそと歩き出した。
長い廊下は、暗く、静かであった。
この館には、宿直の士たちのほかは、女中など一人も住んでいないようであった。どの部屋も、長いあいだ、閉めきったままにしてあるとみえて、空気は、重く湿っていた。
熊の跫音だけが、ヒタヒタとつづいて行く――。
やがて、廊下は、勾配のついたものになった。そして、廊下板は、鶯張りに変って、熊は、ひと足踏んで、ちょっとためらった。様子を窺う数秒を置いてから、平気でのぼって行った。
この古い建物にふさわしい部屋が、その奥に在った。戦国の時代に、敵国から送られて来た質子を住まわせるために設けられた部屋であろうか。
三寸ばかりの角材で組まれた格子がめぐらされ、灯がその中でまたたいていた。
熊はその前に来た。
とたんに、異様な呻き声が、静寂を破った。
灯の傍で、虚脱の姿を蹲らせていた捕われ人が、熊の出現に、仰天して、ほとばしらせた声であった。
夕刻、この館から脱出をこころみて、藩士らにとりおさえられた若い主人にまぎれもなかった。
恐怖そのものの形相になって、ずるずると、いざり乍ら、

「わ、わしは知らぬ！　何も、知らぬ！　許せ！　……わしが、したことでは、ないのだ。知らぬ。ゆ、許せ！」

と、譫言のように、同じ言葉を、くりかえした。

熊は、その悲惨な哀訴を、じっと見戍って、動かなかった。

主人は、身もだえして、両手で頭をかかえると、畳に俯伏して、なお、きれぎれに、同じ言葉を口走った。

こちらの宿直の部屋では、急に衆議が一決して、のこらず、刀を摑んで立ち上っていた。

これから、上屋敷へ押しかけて行き、江戸家老に、談判しようということになったのである。

「殿をつれて行こうではないか。そうすれば、謀叛を起したなどと、云いがかりをつけられんでもすむぞ」

一人が、云った。

「そうだ。場合によっては、殿が狂気したと騙った罪を、公儀に訴えると、脅してもよい」

「むしろ、われわれはあっぱれ純忠の士となって、佞奸の徒を討つことになるか。後世までも名をのこすかも知れん」

「よし！　殿を擁して、堂々と、上屋敷へ乗り込むのだ。やろう。まず、殿に、われわれが、いかに身命を賭して、忠義のために決起したか、認めさせておこうではないか」

奇妙な興奮が、どの顔にも、みなぎった。何の理由があって、まことの狂人でもない主人を、

藩の重役が、この館内に監禁したのか、知らぬままに、忠実な番犬の役目をつとめていた連中であったが、おのが藩に、意外にも莫大な隠し金があったときいては、遽に、欲望にめざめないわけにはいかなかったのである。

一同は、どやどやと、奥にむかった。

しかし、その時、すでに、座敷牢内から、主人の姿は、煙のように消えうせていたのである。

三

江戸八百八町は、どの町も、裏道新道があって、縦横に曲折している。そして、そこにひしめきあっている貧乏人の借家を、裏店という。

五軒一長屋、十軒一長屋、はなはだしいのになると、五十軒一長屋というのさえ珍しくはない。

長屋が向いあって、まん中を狭い路地が通っている。ひとつの井戸を汲みあい、三つばかりの厠を共同に使い、ひとすじの溝に流している。

井戸端には、嬶連中が屯して、せなかの赤ん坊を泣き喚かせ乍ら、べちゃべちゃ喋りまくり、餓鬼童たちは路地をかけずりまわり、家の中では、もう生きていても仕様のない年寄があわれな咳をしているというあんばいである。

南本所の多田薬師裏手にある番場町などには、こうした五十軒つづきの裏店が、びっしりとな

らんでいた。

その路地のひとつに、いま、托鉢の優婆塞行者が、帰って来た。

とある一軒から、ふらりと現れたのは、巾着切の若い者で、

「おうおう、山伏、今日はもらいが多くて、さっさと帰って来やがったな」

「なんの、こう米の値段があがっては、一日足を棒にしても、ひと握りに満たぬな」

そろそろ五十路をこえかかった行者は、風貌も立派で、恰幅も堂々としていたし、学のあるところを、長屋連中の相談役にされている存在であった。

「べらんめえ、一升百両になろうと、こちとら一向にかまうこたアねえや。これで、もう十日も、一粒だって、くらっちゃいねえんだ」

「そのかわり、朝から酒を飲んでいるではないか」

「あたりめえよ。酒と女がなくて、生きて行けるけえ」

「酒は、米から作るのを知っているかな?」

「おっ、そうか。そいつを忘れていたあ。へっ——くそ面白くもねえ」

巾着切は、熟柿くさい息を吐いて、

餓鬼を作ろうか、酒作ろうか、
餓鬼を作るにゃ、嬶がいる
酒を作るにゃ、米がいる

餓鬼を作らぬ嬶もろて、
養老の滝でくらしたい

奴凧のように、両袖をひらひらさせて、遠ざかって行った。

山伏は、わが家へ入りかけて、訝しげに眉宇をひそめた。一人住いの家に、誰かがいた。

土間に立って、破れ障子から覗くと、熨斗目の紋服をつけた後姿が、あった。

「どなたか?」

声をかけて、障子を開くと、無断の侵入者は、のろい動作で、首をまわした。

頭髪は乱れ、髯ものびていたが、貌だちは、品のあるものだった。尤も、死人のように蒼ざめていたし、眸子はうつろであった。

「どなたであろう?」

問うと、困惑した面持になり、

「わしは、ただ、ここへ、連れて来られた」

と、こたえた。

「連れて来られた?　お手前を連れて来た御仁は?」

「知らぬ」

「面妖しな話だ。お手前を連れて来て、その御仁は、去った、と云われるのか?」

「そ、そうじゃ」

「お手前は、何処の方かな？」
「……」
奇怪な客は、こたえなかった。
「お帰り頂くよりほかはない。それがしは、居候を置くほどの余裕はござらぬ」
「……」
客は、俯向いたきりだった。
やむなく、山伏は、連れて来たのは、どんな人物であったか、と訊ねた。
異様に鼻が高く、長い頤を持っていた、と説明されて、山伏は、苦笑した。
「顔十郎か――」
十数年来の親しい知己であった。
この山伏は、数年前までは、公儀隠密であった。薩摩の島津藩の財政探索を命じられて鹿児島へ潜入して、それきり消息を絶った。隠密であることが露見して、暗殺されたものときめられ、桜田の御用屋敷の人名帳から抹殺された。
いつの間にか、江戸へ戻って来て、この長屋に住みついていた。それを知っているのは、顔十郎だけであった。
佐野十太夫、といった。
顔十郎がつれ込んだ者と判ると、何かの仔細があってのしわざであろう、と思い、そのままにしておいて、十太夫は、夕餉の仕度にかかった。

食膳をととのえて、すすめたが、客は、かぶりを振って、動こうとしなかった。
顔十郎が、あらわれたのは、夜もかなり更けてからであった。
「やあ」
「うむ――」
幾月ぶりかで、顔を合せたのだが、挨拶は、かんたんに、それだけの頷きあいだけで済まされた。
少時の雑談ののち、十太夫は、客へ目をくれて、
「この御仁を、居候にせよというのか？」
と、問うた。
「いや、四、五日預ってもらうだけでよい」
「どこの藩主だ？」
十太夫は、ずばりと訊ねた。
「藩主と看破したとは、流石は十太夫だ」
顔十郎は笑った。
客は、怯えた眼眸で、十太夫と顔十郎の会話をきいていた。
「備前の小大名だ。末松邑久守」
「邑久郡国府だな」
十太夫は、その領地も知っていた。

「どうするつもりだ」
「さあ、どうしようか——まだ、思案中だな。ひとつ、相談に乗ってもらおうか」
「危険な仕事は、御免蒙る」
「佐野十太夫でなければやれぬ仕事だから、相談に乗ってもらいたいのだ」
「何をしようというのだ？」
「熊になってもらいたい」
「熊？」
十太夫はあまりに唐突な申出に、あっけにとられた。
「熊とは？」
「熊だよ。山中をのそのそと歩きまわっている——あれさ」
「おれに、熊になれ、というのか」
「左様——」
顔十郎は、けろりとした顔つきであった。
「熊になって、何をする？」
「末松家の江戸上屋敷を乗っ取るのだ」
「……」
十太夫は顔十郎を瞶めかえしていたが、
「面白そうだな」

と、云った。
この時、末松邑久守が、急に、自分は口がきけるのだということを思い出したような音声で、
「わしは、上屋敷へ、もどりたい。たのむ！」
と、必死に、たのんだ。
「まだ、早うござるな。まず、熊が、奸臣の頸根でもおさえつけて、泥を吐かせてからのことにいたそう」
顔十郎はあっさりこたえておいて、十太夫に、
「熊になってくれるか？」
と、問うた。
「ならぬでもないが、むかしのおれとちがい、生命は惜しくなって居るぞ」
「すぐ生命をすてたがる奴は、信用できぬ。わしも、生命は惜しい」
顔十郎は笑って、
「恩も義理もない家のために、せっせと骨を折ってみる。これが、わしらのさだめられた運命というやつであろうな。あの世へ行ったら、恩を売っておいた連中から、よほど、もてなしてもらわねばなるまい」

千姫伝奇

一

元公儀庭番佐野十太夫は、事を処すに、きわめて慎重な人物であった。

顔十郎から、備前邑久の藩主末松邑久守数正が、藩の重役によって、狂人にされて座敷牢におしこめられた一件に、首を突込む協力をもとめられるや、

「一両日、待て」

と、受諾をのばした。

そして、二日後、顔十郎と顔を合せるや、

「末松家の先祖を、お主は知っているか」

と、云った。

「知らんな」

「わしは、昨日、調べて来た」

「何者だ？」

「千姫だ」

「なに！」

顔十郎は、眉宇をひそめた。

「まことか？」

「まちがいない」

「千姫に、子供があったのか」

顔十郎は、腕を組んで、うなった。

千姫という女性は、いまでは、一種の伝説的存在となっている。

二代将軍徳川秀忠を父とし、淀君の末の妹達姫――後の崇徳院を母として生れた千姫の生涯は、まことに数奇といえた。

権勢を得んがための政略のひとつとして、戦国の世の女性たちは、おのが意志を一片すらも示し得ぬ傀儡とされた。

千姫は、生誕と同時に、祖父家康の政略の犠牲となり、豊臣秀吉亡きあとの大阪城へ送られることがきめられた。

慶長八年秋七月、千姫は、わずか五歳で、十歳の豊臣秀頼と、華かな婚儀の式を挙げている。

しかし、それは、ただ、名ばかりの夫婦であった。婚礼の翌日から、秀頼と千姫は、別々の館

に住んで、顔を合わせるのは、なにかの祝いの儀式の際だけであった。淀君は、千姫を、あくまでも、徳川方の人質としかみなさず、秀頼にも、「決して、妻と思うてはならぬ」と、厳しく、云いふくめていたのである。

秀頼と千姫は、十年経っても、ついに、夫婦の契りをむすぶことはなかった。

「天樹院殿（千姫のこと）入輿ありけれども、関東をきつかいがりて、秀頼、一度も奥へ入らず」

と、記録にある。

千姫は、ついに、大阪城が炎上するまで、名のみの御台で、処女だったのである。

秀頼が自刃した際、三十余人の女性が殉死している。その筆頭に、前の伊勢国司北畠氏の姫君わごの方という名がみえる。おそらくは、わごの方が、事実上の御台であったのであろう。

大阪城がついに陥る日、家康も、流石に、可憐な孫娘を殺すにしのびなかった。

麾下の者に、

「千姫を救い出した者には、何人たるを論ぜず、姫を与え、封一万石を給すであろう」

と、告げた。

ただちに、申出たのが、坂崎出羽守であった。

出羽守は、勇猛衆に勝れた士であったが、「容貌きわめて醜悪、色黒く、膚肥にして、野様なり」と伝えられている醜男であった。

家康の許しがあるや、出羽守は、槍を揮て、敵勢を排し、炎烟を冒して、城中に突入し、寝殿

の守将赤井源左衛門と凄絶な一騎討ちののち、まっしぐらに駆け入って、将に自刃しようとする千姫を、救い出した。

出羽守は、千姫を、ひとまず、旗本の陣営につれて来て、一夜泊めた。すなわち、千姫は、出羽守によって、はじめて、肌をひらかされたのである。おそらく、千姫は、殆ど生きた屍となっていて、出羽守の抱擁をこばむ意志も力もうしなっていたものであろう。

翌日、出羽守は、あらためて、家康から、恩賞とともに賜るものと信じて疑わずに、千姫を、本陣へともなった。

やがて、論功の賜宴がひらかれたが、出羽守に対してだけは、なんの沙汰もなかった。

焦躁した出羽守は、ついに思いきって、家康に、約の果されることを乞うた。

すると、家康は、不機嫌な面持で、

「沙汰のないのは、そちの胸におぼえがある筈、重ねて、せがむな！」

と、云った。

すなわち、勝手に千姫を犯した罪を咎めたのである。

後刻、本多正信は、出羽守をまねいて、千姫が尼となって、亡夫秀頼の菩提を弔いたいと考えて居る故、御身も願いをとりさげるように、とさとして、千五百石の加増をつたえた。

千姫が、それから暫くのあいだ謹慎の意を表していたならば、出羽守も、黙ってひきさがっていたであろう。

某日、千姫は、憂さばらしに、隅田川に舟を游べた。その帰途、本多美濃守忠刻に出会った。

忠刻は、評判の高い美丈夫であった。

千姫の胸に、はじめて、恋心が萌した。

それから、一月ばかり後に、千姫が本多忠刻に再縁するという噂が、ひろまった。

坂崎出羽守は、武士の一義として、きゝずてにできなかった。

憤激のあまり、親戚の矢沢志摩守、伊東喜左衛門らと謀って、一書を、老中永井信濃守に上った。

曰く、

「老将軍の言に信なくんば、政道明ならず。臣等徳川氏の禄を食むを慊しとせず、親族二十六人、袂を連ねて、職を辞するあるのみ」

永井信濃守は、愕いて、酒井讃岐守をまねいて、相談した。

讃岐守は、出羽守一族二十六人の旗本衆をまねいて、千姫の婚儀は風聞である、と諭した。しかし、親族一同は、信じなかった。

讃岐守もやむなく、出羽守の隣りに屋敷をかまえている柳生但馬守宗矩に、密かに、解決をもとめた。

但馬守は、日を期して、出羽守とその一族を招いて、酒を饗応した。

但馬守は、わざと、しきりに老中の秕政を誹った。出羽守らは、つい、それにつりこまれて、幕府の失政を罵った挙句、場合によっては、徒党を結んで反を謀る企てもある、ともらした。

但馬守は、即座に、

「謀叛の徒を、宥すべからず」

と、一喝して、隣室にひそませておいた柳生一門の手練者二十人を、どっとふみ込ませた。

出羽守らは、はかられたとさとったが、もはやおそく、無念の泪をのんで、その場に、屠腹して果てた。

千姫が、本多美濃守忠刻に嫁いだのは、それから、半年後であった。

二

「千姫と本多忠刻との間に、一子があったというのか？　初耳だな」

顔十郎は、長い顎を撫で乍ら、云った。

「いや、本多忠刻との間に、一子はない」

十太夫は、かぶりを振った。

「吉田御殿で、何者とも知れぬ男の子を生んだのだ」

本多忠刻が、それから三年後に逝くや、千姫は、賄料一万石を給せられて、麹町三番町に館をたまわった。人はよんで、これを吉田御殿、と云った。

千姫は、この吉田御殿で、あくなき淫蕩三昧の生活を送った、と伝えられている。

鉄砲組の若ざむらい磯野源之丞はじめ、美貌の噂たかい旗本を、つぎつぎと、招いて、酒食を饗し、閨の友としたという。

そして、醜聞の他に洩れるのをおそれて、かれらを殺害して、庭に埋めた。

千姫は、やがて、士ばかりか、町人職人までも、御殿にひき入れるようになった。

神田白壁町の大工職政次郎も、この運命に遭うた。親分の助五郎は、行方不明の政次郎を探しているうち、この事実をつきとめ、職人気質の一徹な江戸っ子の持前で、子分数十人をひきつれて、御殿の門に迫り、政次郎をかえせ、と喚きたて、はては、門を破り、塀を毀す乱暴狼藉の挙に出た。

町奉行の出動をみて、ようやく、助五郎はひきさがったが、その噂は一日で、江戸中へひろまった。

幕府では、千姫を、江戸に置くことをはばかって、ひそかに、関西へおとした。千姫をつれて行く役目は、柳生但馬守に命じられた。

千姫が、ついに、関西の何処の地で、その数奇な生涯の幕をとじたか、不明である。

「十太夫、お主は、千姫が吉田御殿で、淫蕩三昧にくらしたという説を、信じるのか？」

顔十郎は、薄ら笑い乍ら、訊ねた。

「そのような記録はのこって居らぬ。しかし、千姫が、但馬守につき添われて、江戸を去った時、幼児をつれていたという事実は、たしかだ。その幼児が生長して、末松邑久守となった。千姫は、備前邑久郡国府村で、逝去しているに相違ない」

十太夫は、こたえた。

顔十郎は、しばらく、黙然として、目蓋をとじていた。

十太夫は、その異相を眺めているうちに、巨きな鼻梁が、さらにすこしずつ、高くなって来るような錯覚が起った。

「わしには、千姫が、淫婦であったとは、思えぬ。……千姫は、しかし、子供が欲しかったのではないかな」

顔十郎は、独語するように云った。

「いずれにしても、何者とも知れぬ男の子を生んでいることは、疑いないぞ」

「さ、それだ。その男が、名も知れぬ旗本の青二才や、商家の手代や、大工の子分であった筈がない」

顔十郎は、きっぱりとした口調で、断定した。

「なぜ、そう考える？」

「どこの馬の骨ともわからぬ男のせがれを、公儀が、三万石の領主にする道理があるまい」

「ふむ！」

「その男の正体をあきらかにすれば、このたびの謎も解ける——そうは思わぬか、十太夫？」

「よし、もう一両日、待て！」

十太夫は、云った。

その夜のうちに、十太夫が、忍び入ったのは、江戸城内にある文庫蔵であった。

二日後、十太夫は、顔十郎と対座すると、にがにがしげな面持で、

「記録と申すものは、信じられぬな、顔十郎」

と、云った。

「どうしたな？」

「坂崎出羽守が、千姫を救出した、という証拠は、どこにもない。駿府記や慶長見聞記では、大野修理亮が、秀頼と淀君の命乞いをさせるために、千姫を脱出させた、とある。つまり、豊臣方の方便であったことだ」

「あるいは、しからん」

「別の記録では、徳川家からつき添って来た刑部卿の局が、隙をうかがって、千姫を落した、とある」

「いずれにしても、千姫は、季女のままに、大阪城から脱出したことになる。千姫が、はじめて身をまかせたのは、本多美濃守であろう。とすれば、吉田御殿の乱行も、眉唾だな。千姫は、むしろ、つつましいくらしを送ったと想像した方がよさそうではないか」

「そうなると、ますます、判らなくなる。千姫が生んだ子の父親が、何者であるか？」

「ますます判らなくなったのは、何歩か前進した証左だな」

顔十郎は、にやりとしてみせた。いかなる場合でも、苛立たず、むしろ、おちつきはらってみせるのが、顔十郎の長所であった。

三

「なにっ?!　殿が、牢を破ったと――」

猿江の館からかけつけて来た宿直の士の報告を受けて、愕然となったのは、末松藩の江戸家老瀬良頼母であった。

「くわしく申せ！」

しかし、いつの間にか、煙のように、座敷牢から消えうせていたのであってみれば、その経過を説明できる筈もなかった。

瀬良頼母は、「うつけ者どもが揃い居った！」と吐きすてておいて、座を立って、奥へ入った。

当時、大名屋敷は、江戸城にならって、どこでも、表向と奥向とに分けられて居り、その境には、錠口が設けられていた。

奥向に入ることのできるのは、殿様のほかには、医師と薬餌係りの茶坊主だけであった。

錠口には、奥側に女中、表側に小姓がひかえていて、殿様が出入の際、鈴を引いて告げる。暮六つ過ぎには錠がかけられ、殿様と雖も、出入できぬ。

それほど、厳重なしきたりが守られていた。

しかし、末松家では、いつから、そのしきたりが破られたか、江戸家老が、錠口に至ると、小姓は、当然のように、鈴を引いた。

さっさと、錠口を通った瀬良頼母は、女中の案内もなしに、長い廊下を歩いて行った。
頼母が入ったのは、末松邑久守の生母佐久の方のすまいの化粧の間であった。
化粧の間といっても、三間から成って居り、頼母が入ったのは女中の控え間であった。
二人の女中が控えていたが、頼母を見ると、さっと当惑の面持になった。
頼母は、それが何を意味するか、即座にさとった冷やかな態度で、そっと、仕切襖に寄った。
五分ばかりの隙間をつくって、鋭い視線を注ぎ入れた。
みだらな光景が、そこにあった。
すでに五十路にさしかかった佐久の方は、肥満したからだを、崩して、脇息に凭りかかり、なげ出した足の爪を、薬餌係りの茶坊主に、切らせていた。
乱れた裾から、緋縮緬の二布が散って、膝まであらわになっていた。当時、大名旗本の奥方は、緋のものなど、腰には巻かないならわしであったが……。
茶坊主は、この役目に狎れている無表情で、爪を切っていたが、それがすむと、いかにも、いとおしくてたまらないように、そっと蹠を撫でた。
「ほほ……宗円、また、いたずらを――」
佐久の方は、くすぐったげに、身もだえた。
「お方様、これが、宗円の生甲斐でございまする」
うわずったような声音も、老いた女をよろこばせる効果をねらっているのであった。
茶坊主は、すっと、顔を近づけると、佐久の方の足指を、口にくわえた。

「ええ、もう……いたずら者めが――」
云いつつ、佐久の方は、ますます、からだを崩し、片膝をたてて、下肢を菱形に開いた。
茶坊主は、その両足のうらを、くすぐり乍ら、指から脛へと、舌の愛撫を移行させる……。
「宗円、……もうよい。もう、ゆるしてたもれ」
脇息にしがみついて、身もだえるにつれて、前は乱れ、茶坊主の青頭を、股のあいだにはさみ込むあんばいとなった。
茶坊主は、もとより、この悪戯があくどすぎればすぎる程、老いた女が悦ぶのを知っていた。
……二布の中へ、さらにふかく、青頭を突込みざま、両手を膝にかけて、さらに大きく拡げさせた。
「あぁ……」
佐久の方は、脇息へ、頬を押しつけると、あたりをはばからぬ呻きをたてた。
瀬良頼母は、そこまで目撃して、不意に、大きな咳払いをした。
茶坊主は、はじかれたように、佐久の方から、はなれた。
頼母は、佐久の方が、居ずまいを正すのを待って、襖をひらいた。
佐久の方は、しらけた表情で、江戸家老を迎えた。
対座すると、頼母は、抑揚のない口調で、
「殿が、消えうせてござる」
と、告げた。

「なんと申しやった？」
「殿が、牢を破られたのでござる」
佐久の方は、腑抜けたような眸子を、頼母にくれた。
佐久の方は、わが子が本当に狂人になったと、信じ込まされていたのである。
「城代が出府されるのが、あと十日あまりにせまって、殿が姿を消されたとは、皮肉なもの——。お方様、いかがいたしましょう！」
「さがせば、見つかるのではありませぬか？」
「江戸は、広うござる」
「いくら、広うても、気のふれた者ゆえ——」
「お方様。殿は、お一人で、姿を消されたのではござらぬ！」
頼母は、烈しい語気になった。
「何者かが、手びきをいたしたに相違ござらぬ！」
怯えた佐久の方を、凝視しつつ、
「表向には、それがしを裏切るような者は一人も居り申さぬ。ただ、この奥向に、それがしの目のとどき申さぬのにつけ入って、間者めが入り込んで居るのではなかろうか、と疑うべきふしがござる」
「そ、そんな……」
「お方様が、茶坊主対手に、たわむれておいでになるのをさいわいに、間者めは、当家の内情

を、思うがままに、さぐって居るのではござるまいか」
「……」
「いちど、あらためて、女中たちを一人のこらず詮議いたさねばなりますまい」
「そのような大げさなことをせずとも……」
「お方様が、間者をさがし出して、捕えてやる、と申されますか？」
頼母は、せせらわらった。
佐久の方は、目を伏せてしまった。
頼母は、立ち上ると、
「茶坊主とおたわむれになるのも、ほどほどになされるよう——」
と、云いのこした。
廊下をひきかえして来た頼母は、一人の女中とすれちがって、三、四歩行き過ぎてから、背後に視線を感じた。
ふりかえった時には、その女中は、後姿をみせて、しずかに遠ざかっていた。頼母は、気のせいであった、と思いかえした。
その女中は、顔十郎に、熊退治をたのんだ娘にまぎれもなかった。於与里（おより）といった。

贋行列

一

この日——。

若年寄松平大和守は、所用あって、江戸城から下るのが、半刻ばかりおくれ、大玄関に出たのが、暮六つになっていた。

大手御門が、閉められた時刻である。

徒歩で、下乗橋に来ると、駕籠だけが待っていて、供の者たちは、すでに、大手御門の外に出ていた。

駕籠わきには、供頭と傘持ちと草履取だけが、ひかえていた。

大和守は、供頭に、

「行列を四ノ切にして、さきに戻らせい」

と、命じた。

若年寄の登場の供揃いとなると、大層ものものしい。

先箱、道案内（右左歩行小姓たち）、長刀、馬廻り、供頭、駕籠者、乗馬、馬柄杓、乗替馬、茶弁当、小姓小頭、目付、駕籠者小頭、草履取、長柄傘、挟箱、供頭馬、供槍、中押足軽、供挟箱、合羽籠などえんえんとつづくのである。

したがって、この長い行列は、諸人通行の邪魔になるので、三ノ切、四ノ切など、間を切って、進むようにする場合が多かった。

ふつう、老中はじめ、諸侯の下城は、八つ（午後二時）が、だいたいの定刻になっていた。

暮六つになると、街中は、陽の落ちる前の、あわただしい雑沓を呈する。この時刻、長い大名行列が行くのは、庶民にとって、はなはだ迷惑である。

大和守は、それを考えて、主人のいない行列を、さきに行かせて、自分は、忍びで帰ることにしたのである。

徳川譜代大名のうちでも、名門として、格式の高い、川越十万石の藩主松平大和守は、名君のほまれ高い人物であった。

駕籠は、街に出た。

上屋敷は、内桜田の大名小路にあるが、大和守は、明日は登場がないので、白金の下屋敷へ行くことにした。

わずか数人の供をつれた駕籠を、通行人たちは、よもや若年寄とは、思わなかったろう。

尤も、葵の紋どころがうってある立派な打上網代の駕籠なので、注意ぶかい人なら、不審をおぼえるに相違ない。

駕籠は、やがて、二本榎の坂を登って行こうとした。

その折、むこうから、かなりの格式をもった行列が、しずしずと下って来た。

大和守は、駕籠の戸を引上げ、簾の蔭から、街の景色を眺め乍ら、やって来ていたので、

——これは、面倒なことになったな。

と、苦笑した。

大名行列が出会えば、当然、作法が要る。行きちがう時には、引戸の駕籠ならば、なかば開き、打上げならば簾を巻きあげて、互いに目礼しなければならぬ。あいてが、御三家ならば、駕籠を降りなければならない。この場合は、たいがい、避けることになる。

大和守は、供揃いをしていない忍びなので、ちょっと弱ったのである。

——まあ、よかろう。

洒脱な大和守は、平気で、あいてと目礼して行くことに、肚をきめた。

駕籠と駕籠は、ゆっくりと近づいた。

大和守の供頭は、簾を、そっと巻きあげた。

ところが、むこうの駕籠は、引戸を開かなかった。

こちらが忍びと見て、そ知らぬふりをするつもりであろうか。しかし、こちらは、わざわざ、簾を巻き上げたのである。

「殿！」

供頭が、ひくく、呼んだ。

あいての無礼を咎めましょうか、と無言で問うたのである。

「よい」

大和守は、制しておいて、そのまま、すれちがわせた。

坂をのぼりきってから、大和守は、

「右門！」

と、呼んだ。

駕籠のすぐうしろに従って来ていた中年の士が、すっと、脇へ寄った。

どこといって目立たない、背丈もひくく、むしろ貧弱な体格の男であったが、これが、大和守の身辺を常に守っている稀代の伊賀者であった。

祭右門、という。

「あの行列が、どの屋敷に入るか、見とどけて参れ」

大和守に命じられると、祭右門は、無言で一礼して、駕籠脇をはなれた。

そして、次の瞬間には、路上から、煙のように消え失せていた。

その行列が、白金猿町から品川台町にさしかかった頃、その後方を、蟬の羽のような紗の十徳をまとい、宗匠頭巾をかぶった、白いあご髯の老人が、杖をついて、歩いていた。たちまちにして変装した祭右門であった。

二

その行列は、ただ何気なく一瞥しただけでは、べつだん、どこにも怪しいふしは見えなかった。

大和守としても、あいての駕籠の引戸が開かれて、目礼を交していれば、疑惑を抱かなかったに相違ない。

——はてな？

ふっと、気がついたのは、供の者たちの目つきが一様に鋭いものであったことである。

大名行列においては、士も足軽も、のこらず、おのが個性を消して、主人の威儀をかざる分子となって、表情をつとめて没我の裡に置くものである。

その行列の供の者たちは、どうやら、それぞれ、異分子同士が集ったような、一種怪しい雰囲気をつくっている、と大和守には、直感されたのである。

殊更に、鋭く、あたりに神経を配りつつ進んでいるとも思われなかったが、たしかに、その目つきは、おのが身分に安らいでいる藩士のそれとは、ちがっていた。

怪しいと看破した大和守は、後日、おのが眼力を誇ってよかった。

……行列は、雉子宮のわきをぬけて、いったんひろびろとした百姓地に出てから、野道を大きく迂回して、下目黒の行人坂へ出た。

そして、行き着いたのは、末松邑久守の上屋敷の正面前であった。

供頭が、つかつかと歩み寄って、

「高家田辺式部太夫、只今、到着！　御開門！」

と呼ばわった。

あらかじめ通達してあったとみえて、門扉は、左右に開かれた。

行列は、しずしずと、屋敷内へ通った。

途中で姿を消していた祭右門は、いつの間にか、かなりはなれた地点に現れて、その光景を見とどけていた。

——田辺式部太夫は、高家のうちでも、家柄はよいが、甚しく貧乏だ。これだけの供揃いはできぬ。

祭右門は、この行列を贋ものとさとった主人の直感力に、あらためて敬服した。

——忍び入って、何故に贋ものが乗込んだか、仔細をつきとめねばなるまい。

そうほぞをきめた。

駕籠は、玄関に据えられたが、引戸は開かれなかった。

駕籠わきにより添ったのは、異様に鼻梁の巨大な、顔の長さが常人の二倍もある異相の武士であった。

出迎えた江戸家老瀬良頼母にむかって、

「あるじ儀、目下わずらって手足が不自由でござれば、このまま、駕籠にて、奥へ通ることを、

おゆるし下されたい」

と、云った。

末松家としては、高家が、不意に、公儀御用向きの儀につき、内談いたしたい、と通達して来て、一刻も経たぬうちに、行列を進み入れて来たので、ただならぬ不安をおぼえさせられていた。

高家というのは、今日の官職で云えば、式部官のような職務を執っていた。朝廷からの使者を迎えてもてなすとか、将軍宣下の祝儀をとりしきるとか、日光東照宮へ代参するとか、伊勢神宮へ使いに行くとか。

身分は高いが、禄高はすくなく、万石の家は絶無で、たいてい五千石を限りとした。しかし、礼法三千威儀三百の時世であってみれば、大名たちは、その都度、高家の世話にならなければならなかったので、常に、まいないしていた。高家は、多くの大名衆と昵懇であったため、したがって、公事以外の仕事も引受けていたのである。

たとえば、宮廷や公儀の祝儀などに、各大名に寄附させるにあたって、そのわりふりなど、高家に、自由に、まかされていた。大名衆は、その割りあてられた寄附の多寡が、内証にひびくので、高家の機嫌をとらねばならなかったのである。

高家の不意の訪問が、大名屋敷としては、最もうす気味わるかったのは、このためであった。

駕籠は、そのまま、奥へかつぎ込まれ、書院の上段へ据えられた。

そのわきに正座した贋御側用人——顔十郎は、大きくひらいた眸子で、瀬良頼母を見据えて、

「邑久守殿には、いまだ、病臥中と仄聞いたすが、御公儀御用向きの儀、重大にござれば、当方より、御病室へうかがっても、苦しからず、と存ずる」

と、云った。

頼母は、あわてて、

「長い年月の病臥にござれば、まことに見苦しきていにて、その儀はご容赦下されますよう——」

と、あやまった。

「しかし、邑久守殿には、当邸にて、おやすみでござろうな？」

「はい」

「いつわりではござるまいな！」

顔十郎は、念を押した。

「相違ありませぬ」

「されば、御公儀御用向きの儀、ただちに取次いで頂けるのでござるな？」

「もとよりのこと」

顔十郎は、膝に扇子を立てて、半眼になり、それなり、口をきかなくなった。

こうした場合、顔十郎の面貌は、対手の不安をつのらせるのに、最も適していた。

頼母は、顔十郎が口をきるのを待ち乍ら、時折ちらちらと、窺っているうちに、次第に、圧迫感で胸苦しくなった。

三

いつまで経っても、顔十郎は、不動無言の姿を変えようとしなかった。
しびれをきらした頼母は、とうとう、
「失礼乍ら、御公儀御用向きの儀、仰せきかされますよう――」
と、促した。
御側用人が駕籠の引戸を開けて、あるじの田辺式部太夫の顔を見せようとしないのも、なにやら意味ありげで、不気味であった。
顔十郎は、かっとまなこを瞠くと、
「御当家所領に、無人の島がござろうか？」
と、唐突に訊ねた。
「ありまする。ざっと、七島ばかり――」
「その島々に、けものは棲息して居り申すか！」
「鹿、猿、鶴など――」
「熊は？」
「えっ?!」
「熊は、棲息して居り申すか？」

頼母は、咄嗟に、返答をまよった。
「しかと、御返答をうけたまわりたい」
「いまだ、見とどけた者は居りませぬが、あるいは」
「棲息すると申されるか？」
「多分――」
「ははは……、それで、安堵いたした」
急に、笑い声をたててから、顔十郎は、やおら立ち上って、頼母のそばへ寄って来ると、いかにもなれなれしげに、
「ものは、相談でござる、御家老――」
と云って、扇子で、ぽんと肩をたたいた。
頼母は、対手のあまりな豹変ぶりに、あっけにとられつつ、
「な、なんでござろうか？」
と、不安半分に、怪訝の視線をかえした。
「熊の居るその島へ、もういっぴき、おつれ願えまいか」
「えっ？」
「実は、日光山中に棲息して居る熊が、どういう風の吹きまわしか、東照宮まで降りて参り、陽明門のあたりを、うろうろしはじめた、と思われい。ただの熊ならば、木戸門外へおびき出して、仕止めることも、許されるのでござるが……、なんと、熊は、いつの時代にそうされたか、

頭から、葵御紋入りの御札をぶらさげていたのでござる。すなわち、この熊こそ、日光東照宮の御使いでござったな」

「……」

頼母は、ただ、黙って、きいているよりほかはなかった。狐とか蛇とか百足とかが、神の使いになるのだから、熊がなっても、べつにふしぎではない、というものの、なんだか、おかしな気もする。

顔十郎は、しゃあしゃあとして、つづけた。

「やむなく、苦心のすえ、熊を生捕り申したが、さて、飼うわけにも参らず、寺社奉行より、評定所に、このしまつの御相談があり、猟師に撃たれぬ安全な場所に放つことにすることに相成り申した。日光御社係りたる当家に、その場所をさがしてくれるように、との御依頼があり、八方を調べた挙句、御当家所領の、瀬戸内海の島がよかろう、と白羽の矢をたてたのでござる」

これをきいて、頼母は、やれやれ、とひそかな安堵をおぼえた。

――そんなことだったのか。お安い御用だ。

檻に入れた熊を、護送するぐらいの負担は、やむを得ない。

大したことではなかったのだ。

「日光東照宮おん使いを、当家所領の島に預けるとの仰せ、有難く、お受けつかまつります」

頼母は、こたえて、頭を下げた。

「左様か。では、御承知下さるか。忝なく存ずる。では――」

顔十郎は、駕籠に寄ると、引戸を開いた。

頼母は、あっとなった。

乗っていたのは、高家肝煎ではなく、熊だったのである。

やおら歩み出た熊は、愕然と色を喪った頼母にむかって、のそりのそり、と迫った。

「こ、これは……」

仰天しつつ、頼母は、顔十郎へ、猜疑の視線を送った。

顔十郎は、冷然として、

「神熊でござるぞ。粗略にあつかわれるな」

と、云いはなった。

四

「ふむ！　面白いな。駕籠から、熊が現れたか」

翌朝、戻って来た祭右門から、逐一報告を受けた松平大和守は、微笑して、いくども、頷いた。

「それがし、一夜を、末松家の屋敷ですごすついでに、主人邑久守を捜してみましたところ、病人はおろか、病室さえも見当りませなんだ」

「邑久守は、欝気が高じて、口もきけぬ有様になった、ときいていたが……、そうか、姿がな

かったか？」

「念のため、夜明けがた、下屋敷の方へ忍び入って、しらべてみましたが、やはり、不在でございました」

「よもや、みまかったわけでもあるまい。……右門、御苦労であった」

「熊はまだ、かの屋敷に居りますれば、本日も様子を窺ってみようかと存じます」

「そうか。そうしてみてくれ」

右門が、下って行ったあとで、大和守は、書庫に入ると、末松邑久守の系譜を調べはじめた。

瀬良頼母が、人間の化けた熊に、なすところもなく、屈服しているわけはなかった。

ひそかに、急使を、高家田辺式部太夫邸へ趨らせた。

ところが、田辺家では、意外にも、

「たしかに、御当家へ、側用人をつき添わせて、熊をおとどけ申した」

と、返答をしたのである。

頼母としては、公儀へ訴え出るのには、はばかる秘密を持っていた。

のこされた手段は、唯一つしかなかった。

頼母は、深夜をえらんで、こうした危機の場合、援助してくれる約束のある、四谷伊賀町の町道場主浅間一念斎に、一書をしたためた。

浅間一念斎は、灘波一方流の達人で、剣のみならず、槍、薙刀、棒、いずれの奥義をもきわめているという噂があった。

灘波一方流の極意は、乱曲、払い斬りと名づけられて居り、大太刀を下段に構え、地にひらめかせて、敵のから脛を払い斬りにし、さらに、つばめ返しに、上段にふりかぶって、まっ向から斬り下す迅業である。

これは、他流と試合を禁じられているくらい、烈しいただ一閃裡の太刀であった。一念斎は、この太刀を継ぐ唯一の剣客ということであった。

頼母とは、二十年来の知己であった。

筆を擱いて、紙を巻き了えた時であった。

不意に、背後から、

「それがしが、使者をつとめ申そう」

と、申出た者があった。

いつの間に忍び入って来たか、贋御側用人であった。

悸っとなって、首をまわした頼母は、全身を石のように、こわばらせた。

顔十郎は、にやりとして、

「それがしは、かねて、浅間一念斎とは、ひと太刀交えてみたいものだ、と考えて居り申した。ちょうど、よい機会でござる。使者をつとめるついでに、立合って参ることにいたす」

そう云いはなって、長い腕をのばすと、手紙を摑んだ。

「それがしが、一念斎を撃ち負かせば、お手前は、もはや、何人に救いをもとめることも、叶い申さぬ。神熊を、瀬戸内海の島へ送るよりほかに、すべはござるまいな」

不思議の勝利

一

昏れるには、まだ半刻ばかりあり乍ら、空には、細い月が、かかっていた。

今日もいちにち、大変な暑気であったが、夕風が立って、すべてが活きかえったように、樹々のざわめきも涼しく、家々や路上に、さまざまの物音も起っていた。

四谷伊賀町の表通りにあるかなりな構えの道場から、数名の門弟に見送られて、浅間一念斎は、しずかな足どりで、往還へ出た。

どこといって目立たない風貌の、むしろ小柄な、痩せぎすの姿は、儒家と見た方がふさわしい。

剣のみならず、槍、薙刀、棒まで、ことごとく奥義をきわめた、稀世の達人とは、どうしても受けとれない。

とある辻から、細い通りに折れ、やがて、一念斎が、歩み入ったのは、幸運の夢見をさせる観世音菩薩で名のある古刹の境内であった。

佳夢を願う日は、春秋の一日に限られているので、平常は、ひっそりとしている。

山門をくぐって、立ちどまった一念斎は、彼方の鐘楼わきの花見石に腰かけている人影をみとめて、凝っと、眼眸を置いた。

物の影の濃くなった世界に、その人物の面貌だけが、異様に、鮮やかに、浮きあがった印象であった。

――骨相も、これは、きわまったものだ。

一念斎は、胸中に、ふっと、不安にも似た妙なさわぎをおぼえた。

対手は、にやりとして、やおら、腰をあげた。

その微笑は、ふと、こちらも微笑をさそわれる明るいものだったが、一念斎は、敢えて無表情を保ち、口を真一文字にひきむすんでいた。

対手の方から、歩み寄って来た。

ぶざまなくらい、膝を曲げた、のそのそとした歩み癖にも、一念斎は、かえって、うす気味わるさを感じた。

「それがし、顔十郎と申す者。よろしく――」

名のって、軽く一礼した。

一念斎は、黙って、礼をかえし乍ら、ダラリと脇へたらされている双手を、観ていた。

——只者ではない。

ただ何気なく、ダラリと携げているようで、その双手には、剣で謂う無拍子の静けさが湛えられていた。

一念斎ほどの達人になると、この微妙な静けさが、一瞥で、判る。

剣気を、そのまなこや、全身にあふらせている敵は、さして、おそるるに足りない。

顔は、いっそ明るく、姿を飄乎たるものに見せ乍らも、その双手に、一瞬の後には、どんな意外の迅業でも使う気配を示している対手には、生涯のうちに、そう屢〻出会うものではない。

「見知らぬ拙者に、真剣の試合を所望されるとは、なにか、仔細があってのことでござろうか？」

一念斎は、訊ねた。

「剣の奥義をきわめたく——と申すと、いかにも、きこえはよろしいが、あいにく、それがしは、兵法者ではないのでしてな。……つまり、一口に申してしまえば、お手前が、それがしがやろうとしている仕事の邪魔になる。それですな」

「邪魔になるとは？」

「末松邑久守の江戸家老瀬良頼母から、援けをもとめられると、お手前は、どうやら、イヤとは、かぶりのふれぬ事情がおありのようですな」

「……」

「その事情を、うかがっても、こたえてはいただけまい。……それがしは、目下、瀬良頼母の頸根をおさえつけて居り申す」

「……」

「これだけ申上げておけば、この場の真剣勝負は、避けられぬものと、納得されるであろう。……参ろう」

こともなげな口調で云ってのける顔十郎を、一念斎は、なお無表情で、見戍っていたが、

「こちらから、ひとつだけ、お伺いしておきたい」

「なんなりと——」

「瀬良殿と争っているのは、末松家の家督の件でござろうな？」

「おことわりしておくが、それがしは、欲得ずくで、一役買っているわけではない。……正常な人間が、きちがい扱いをされて、人知れず、私牢にとじこめられているのを知って、いわば人道上のお節介をやきたくなったまでのこと。もののはずみで、首を突っ込んでみると、謎やら秘密やら、いろいろ怪しげな幕が張られていて、これを破ってみようという料簡を起すのは、人情と申すものですな」

「……」

口をつぐんだまま、視線に冷たい色を加えていた一念斎は、すっと、一歩さがると、絽小紋羽織をぬぎすてた。

それが、挑戦に対する応えであった。

二

一念斎は、すでに、その下に革襷をかけていた。

「参ろうか」

差料の刳形へ左手をかけて、もの静かに、そう云う一念斎を、凝視し乍ら、

――わしの生涯で、これほどの危機は、そうザラにはないな。

顔十郎は、思った。

敵の一閃で、血煙りをたてて仆れる想像が、容易に、脳裡を掠めていた。

しかも、なお、みじんの戦慄も、背筋にも四肢にも、つたわらぬ。対手の姿が、あやしいまでに、柔和な美しさを湛えているせいであったろうか。

――この試合は、ふしぎの勝以外にはあり得ない。

顔十郎は、おのれに、云いきかせた。

剣の大名である松浦静山の剣談に、次のような問答がみられる。

曰く「勝に不思議の勝あり。負に不思議の負なし」

問う「如何なれば不思議の勝というや?」

曰く「道に遵い、術を守る時は、その心、必ずしも勇まずと雖も、勝を得る。その心を顧る時は、則ち不思議とす」

問う「如何なれば不思議の負無しというや?」

曰く「道に肯き、術を違う時は、敗れること疑いなし」

業と理の会得に、優劣がなく、この一刻の世界を、おのが剣の中に容れて、心気を冴え渡らせて闘って、いずれかが、勝利をつかむとすれば、そこに――一刹那の裡の不思議の運が、勝者に与えられたことであろう。

顔十郎は、挑んだ者の作法によって、おのれから、先に、鞘をはらって、青眼の構えを、示した。

その折、夕風が起って、百日紅の赤い花びらを、この対峙の空間へ、ひらひらと散らせた。

しず心なく舞う花びらの、いかにも、のどかな「動」は、決闘寸前の「静」に対して、いかにも、美しい風情を添えた。

一念斎は、数秒の間、顔十郎の構えを凝視していたが、おのれは抜かずに、つと、一歩、地をすべって、出た。

抜きつけの居合術を使う心得とみえたが、この場合、これは、無謀にひとしかった。

居合は、鞘の中にあって、勝つ、という。居合を使うと、敵にさとらせては、居合にならぬ。

一念斎が、敢えて、それを為したのは、顔十郎の青眼が、実は、青眼破である、とさとったからである。

青眼破とは、敵に撃たせず、こちらから進み、それへ乗って来た敵の境内に、ふみ込む法をひそめている。

すなわち、顔十郎は、灘波一方流の極意である乱曲、払い斬りを封じたのである。

灘波一方流は、決して敵に先手を用いさせず、青眼から下段に移るやいなや、切っ先を地にひそめて、襲う迅業を、独特のものと誇っている。

それを封ずるには、青眼破以外にはない。

一念斎が、抜くやいなや、顔十郎は、ふみ込むぞ、と予告したのである。

一念斎としては、乱曲、払い斬りを封じられたからには、もはや、抜きつけの秘伝を発揮するよりほかにはなかった、といえる。いわば、おのれも斬られる覚悟をきめたのである。

顔十郎は、兵法者というものが、剣の道において、いかに、生命を毫毛の軽きに置くかを、視た。

顔十郎自身は、正直なところ、この試合で、死ぬのはまっぴら御免であった。

一瞬——。

顔十郎の痩身は、ぱっと、一間をとび退った。

一念斎は、咄嗟に、

——卑怯！

と、感じた。

感じつつ、もうその瞬間には、鞘走らせて、大上段にふりかぶっていた。

乱曲、払い斬りは、下段からの攻撃である。したがって、大上段にとっては、その極意は、使い得ない。

顔十郎に対して、一念斎は、別の極意をかくしたのである。

看破できぬことが、顔十郎に、にやりとさせた。

奇妙な男である。敵の手の内が判らぬと、かえって、いきいきと、闘志が、全身にめぐるのであった。

——右旋して来るか？　左転して来るか？

顔十郎の興味は、それにかかった。大上段にふりかぶった一念斎は、新陰流でも一刀流でもないのである。そのまま、構えを固着させる筈がなかった。

真っ向から、斬り下して来るのは、固着状態から、潮合きわまっての、疾風怒濤の勢いによる刀法である。これは、新陰流、一刀流の術である。

灘波一方流という世に稀な流儀をもった一念斎が、その術をならうわけがない。

はたして——。

一念斎は、両足を、右八字に開いて、氷上でも滑るがごとく、すっすっと、顔十郎の左側をのぞんで、迫ってきた。

——さて、これをどう躱すかだ！

顔十郎は、ゆっくりと、あと退りつつ、左旋して来た敵に対して、五体をすこしずつまわした。

顔十郎は、もはや、おのれから先に撃つ心をすてていた。

敵が蜘蛛であり、おのれが昆虫と化した状態となったのである。じたばたすればするほど、お

のれの業は、縛られてしまうのである。

まさに剣の闘いは、虚々実々だった。

敵が、おそるべき太刀をひそめて肉薄して来れば、こちらは、その石火の間に、おのれ自身でも思いがけぬ幻妙の受太刀を、魔術のごとく発する以外にすべはないのである。

三

新免武蔵の「兵法三十五箇条」のうち、第二十一条に「拍子の間を知るという事」というのがある。

拍子の間を知るのは、敵によって、はやきも、おそきもある。敵にしたがう拍子である。心のおそい敵には、太刀合いになるや、我は、身を動かさず、こちらの太刀の起りを知らせずに、迅い拍子をとる。これが、一拍子である。気のはやい敵に対しては、我は身と心をうち出して、敵の動きの迹を撃つ。これを、二のこしという。無念無想というのは、おのれの身をうち出して、心と太刀をのこし、敵の気の合を、空より、強く撃つ。また、おくれ拍子というのは、敵の太刀を受けんとする時、いかにもおそいように間を置くことである。

顔十郎が、この「拍子の間」を、あやまたずに、えらび得るならば、むざと負けはすまい。

一念斎の方は、それをえらばせまいとして、動きつづける。

位置は、完全に、九十度の角度を移行した。

この時、顔十郎は、はじめて、愕然となった。

——しまった！

不覚にも、顔十郎は、おのが後方に、さきほどまで、自分が腰かけていた花見石があったことを、忘れていたのである。

その花見石は、いつの間にか、自分の右側に、より添うようにして、在った。

もはや、顔十郎は、右側へ、躱すことは不可能であった。

みごとに、一念斎によって、死地においつめられたのである。

——来るぞ！

直感とともに、顔十郎の五体のいっさいの器官は、その一瞬に備えて、動員された。

一念斎の面上に、はじめて、残忍な冷たい色が刷かれた。

次の刹那——。

剣魂が、満身から、噴く凄じい気合とともに、一念斎の太刀は、顔十郎の頭上へ、落ちた。

同時に。

顔十郎の長身は、ひくく地に沈んだ。

二つの白刃の閃きは、刃風を一颯に合せて過ぎた。

そして、両者の体勢は、そのまま、動かぬものとなった。

一念斎は、真っ向から斬り下して、ちょうど、顔十郎の頭上一寸の空間で、ぴたっと、停めていた。

顔十郎は、片膝を折り、身を跼め、首をひくめて、右手摑みの一刀を、横へまっすぐに、さしのべていた。

一念斎は、顔十郎にむかって、かっと双眼をひき剝いていたし、顔十郎はその視線を受けて、細目になり、なにやら、一種惑わしげな面持を保っていた。

およそ、十秒間も、その静止の状態があったろうか。

一念斎の立姿が、徐々に崩れた。

とたんに、脇腹から、噴水のように、血潮が、音たてて、迸り出た。

顔十郎は、地ひびきたてて、地べたへ倒れる一念斎を、眺めて、大きく吐息してから、やおら、身を起した。

まさしく、「不思議の勝」であった。

顔十郎は、一念斎が斬り下して来るや、本能の迅さで、片膝を折り、首をすくめて、刀身を頭上に、水平にかざし、鋒を後に流し、柄を頭前に突き出し、唸って来た白刃を受けとめざまに、柄さきで、一念斎の胸を撞くがごとくに、びゅっと胴を薙ぎ斬ったのである。

自身で自身が、おそろしいほどの、意外の受太刀をやってのけたのである。平常の工夫で為し得る業ではなかった。

「危かった！」

心から呟いて、顔十郎は、一念斎に、合掌した。

同じ時刻——。

何者が火を放ったか、末松邑久守の上屋敷内から、濛っと、黒煙が、夕空に巻き上った。

一月あまりも雨を見ない空へ、巻き上った黒煙が、風を呼んだか、夕焼雲をみるみる掩いつつ、西方へ崩れ落ちた。

ここ下目黒の行人坂は、大名屋敷といえば、末松邸だけであったので、町家は、にわかに、擦り半の鐘を鳴らしはじめて、騒擾のちまたと化した。

土蔵や穴蔵が開かれ、家財道具が投げ込まれた。老幼者が、風脇の家へ送られるために、ひっぱって行かれた。大店には、出入りの仕事師がかけつけて、土蔵の目塗りをはじめた。

どの往還も、持運ばれる荷物でうずまり、大包みを背負った者たちが、悲鳴をあげてのがれて行こうとする。

その混雑の中を、主家へむかって騎馬がおどるので、さらに、叫喚すさまじいものになる。

黒煙の下から、紅蓮が噴いて、火の粉を空いちめんに撒き散らしはじめた。

燃える音、物の倒れる音、風の吼える音、それらが群衆のどよめきとひとつになって、行人坂一帯は、地獄図絵となった。

末松邸から、なだれ出た家臣や女中たちは、いったん行人坂の途中で、屯していたが、馬で駆けだして来た瀬良頼母に、

「散れっ散れっ！」

と、叱咤されて、思い思いの方角へ、奔りはじめた。

頬母自身は、濛っ濛っとたつまき状に噴きあがる黒煙と火柱を、狂気じみた形相で眺めていたが、急に、頬の筋肉をびくびくと痙攣させると、

「これでよし！」

と、頷いて、馬首をまわすや、一散に、何処かを目指して、疾駆して行った。

佐久の方が、茶坊主宗円に抱きかかえられて、裏門から遁れ出て来たのは、もう建物の大半が、崩れ落ちた頃あいであった。

文函を胸に、しっかとかかえ乍ら、譫言のように、恐怖を口走っていた。

胸も裳裾も乱れて、肌はあらわになっていたが、わが身のさまにも気がつかぬくらい、逆上していた。

「――お方さま、しっかりなされませ」

宗円は、いまいましげな口調で、ひきずるように、歩かせて、

「ともかく、ひと休みしましょうぞ」

と、とある横丁へ、つれ込んだ。

佐久の方は、もう歩けぬ、とかぶりをふって膝小僧もあらわに、べったりと、地べたにすわり込もうとした。

「ここへ、お坐りなされては、あまりに見苦しゅう……」

と、云いかけた、宗円は、急に何を思ったか、きょろきょろ、とまわりを見まわした。

人影は、もうあまり見当らなかった。

宗円は、不意に、佐久の方を、突きころばした。

「な、なにをしやる！」

内股あらわに、バタバタともがく佐久の方から、

「えい！　寄越せ！」

と、かかえている文函を、もぎとった宗円は、悲鳴に追われつつ、一散走りになった。

佐久の方は、言葉にならぬ絶叫をあげて、はね起きると、追いかけようとしたが、裳裾にからまれて、また、ぶざまに、転倒してしまった。

火は、昏れてなお、空を彩った。

黒姫島

一

当時、白金といっても、一丁目から十一丁目に至る往還に面した大名屋敷や町家のうしろは、

一望の百姓地であった。

武蔵野の森もふかく、若い女などは、真昼でも、一人では、森の中を抜けるのを、おそれなければならなかった。

そうした森のひとつに、いつの頃の構えであろうか、豪族の栄華を偲ばせる館址が、のこっていた。

濠とか築地とか、庭とか池泉とかが、森の中に、荒れはてている眺めは、いかにも、さびしかった。

涸れた池泉のほとりに、草庵がひとつ。

これは、藁屋根に草をのびさせているが、近年になって建てられたものらしかった。風雅を好む人物が、世をすてる場所を、ここにもとめて、さびれた景色にふさわしいたたずまいを、と心を配った草庵と見受けられた。

いま——。

草庵の主は、柿葺の土庇のふかい座敷で、一人の訪客と対座していた。

ふかい木立の梢に、雲ひとつない青空がわずかにのぞいて、眩しい真夏の陽ざしは、荒れた庭までとどかずに、樹々の葉むらを光らせていた。蟬が、鳴きしきっていて、静けさがふかい。

座敷は、仄暗く、木立をくぐって来た微風が涼しいのであった。

主は、五十年配で、眉目に強い意志を刻んだ、只者でない風貌の持主であった。

客は、まだ二十三、四の浪人者であった。

「君は、伯夷叔斉を、実生活に無用の人物だ、と誤解しているようだ」

主は、微笑し乍ら、云った。

「べつに、誤解しては、居りませんが、私たちのような泰平繁昌の時代に生きている者には、采薇をうたって首陽山に餓死した伯夷叔斉のえらんだ行動を、必ずしも、廉潔だとは、受けとりかねます。……手を袖に入れて、天命を待つには、人間の一生は、短かすぎるような気がいたします」

若い浪人者は、いかにも、思いつめたような気色であった。

主は、じっとその様子を眺めていたが、黙って、机上から、巻紙を把ると、客に手渡した。

「これが、草稿だ。どれだけの役に立つか知らぬが、昨夜、書いておいた」

「拝見いたします」

若い浪人者は、披いた。

某頓首再拝。謹ンデ書ヲ執事某殿ニ奉ル。夫レ人ノ旧ヲ思フハ、情也。理也。賢モ愚モ、タレカ此ニ眷恋セザルコトヲ得ンヤ。禽鳥ノ知無キモ、ソノ帰ルヤ、猶旧巣ヲ尋ヌ。人ニシテ旧ヲ忘ルハ、情ニ非ル也。理ニ非ル也。鳥猶木ヲ択ンデ棲ム。人ニシテ択バズ、コレ理ニモトリ情ニ反ス。人ノ為ス所ニ非ル也。某モ亦人也。鳥ニ之如カザランヤ。安ンゾ独リ理ニモトリ情ニ反シ、旧ヲ忘レ、昏ニ就クノ為ヲ為サンヤ。ソレガシ、不似（愚鈍）ナリト雖モ、亦固陋ノ心ヲ飾ラバ、東西ニ、南北ニ、未ダ必ズシモ仕フルコトヲ求メ難シトハ言フ可カラズ。然モ尚之カズ。然モ尚干サズ。コノ一書ヲ奉リ、執事ノ門ニ謁セント欲スルハ、区々ノ情、旧ト明ト

ニ就テ理ニモトリ情ニ反スルノ為ヲナサザラント欲スレバ也。……

草稿は、ながながと、綴られていた。

すなわち、これは、仕官懇願書であった。

どんな小禄でもよい。いかなる小藩でもよい。禄にありつきたいと願う若い浪人者のために、主は、したためてやったのである。

読み了って、客は鄭重に礼をのべた。主は、こんな採用懇願書が、全くの反古でしかないことを知っていたが、これに希望をかける若い浪人者に、敢えて冷酷な言葉をあびせる必要も、みとめなかった。

客を送り出してから、濡れ縁に立って、荒れた庭へ、目をやると、

「……果して知りぬ、昼錦の栄（故郷に錦を飾ること）卒に以て神の襟胸を慰する無きを。すなわち、恥を故国に忍んで、敢て身の竜鐘（落魄）を醜とせず、か。……人間の運命などというものは、棺の蓋を掩うてみなければ、わからぬことだ」

と、独語した。

陽気な唄声が、ひびいて来たのは、それから小半刻のちのことであった。

「色気ないとて、苦にせまいもの、

と来たあ。

賤が伏家に月もさす。

見やれ、茨にも花は咲く。

田植もどりに、袖つま引かれ、

今宵逢おうと、目づかいに、

招く合図の小室節。

すすきにのこる、露の玉、

かしく、と読んだが、無理かいな。

ハイ、御免なさい。旦那は、おいでですかい」

庭へまわって、ひょいと、首をつき出して、座敷をうかがったのは、四十がらみの遊び人ていの男であった。

「三五郎か。珍しいな」

横になっていた主は、起き上って、微笑した。

何をしてくらしているのか、えたいの知れぬ男であった。博奕をやったり、後家を騙したり、書画会を開いて、贋物を金持につかませたり、その日その時で、巧みに智慧を働かせて、浮世を泳いでいるのであった。しかし、あくどい、いやらしい手妻をつかって、正直者に一杯くわせるようなことはせず、悪事が露見しても、対手に、「あいつにしてやられたのは、こっちの不覚だった」と苦笑させているのは、もって生れた人柄というものであろう。

「へい、御機嫌およろしゅう――、とんと、ごぶさたで」

のこのこと上り込むと、早速、手に携げて来た風呂敷包みを、ひらいた。

塗りの剝げた文函が、あらわれた。

「これはこれ、古今東西の妙薬珍品七千余種のうち、朝鮮のうわばみ、漢土の玳瑁竹、武蔵の蔓烏頭、蛮産の堪達爾汗、飛騨の魚尾竹――にはこれあらず、奇妙奇天烈、てれつくてん、なんともはや、おどろき入ったるしろもので……」

「気を持たせずに、蓋をとったらどうだね？」

「ようし、開けてびっくり、玉手箱。鬼が出るか、蛇が出るか。はい、蓋をとりますよ、蓋を」

いかにも、おそろしげな手つきで、ぱっと、蓋をとった。

二

主は、覗いてみて、

「ほう――」

と、声をあげた。

一尺に足らぬ文函の中に、まことにみごとな、縮景が納めてあったのである。

海原の中に、ひとつの小島が浮かんでいた。浜辺の白砂も、断崖からさしのばされた松も、そして、頂上に建った阿弥陀堂も、ほんものそっくりに、何万分の一かに、縮めて、作りあげられてあった。

主は、天眼鏡を把って、それらにあててみた。松の小枝ひとつにも、手を抜いたところはなかった。

これほど精巧な模型を、主はまだ、観たことがなかった。

「いかがです、旦那？」

「大したものだな。お前がこれまで持参した品は、ぜんぶ贋物であったが、これは、本物だ」

「冗談じゃありませんや。去年持って上った万年青は、あっしが売ったのはただの十両、それが、転売されるにつれて、五十両ずつ上って、いま水戸様にありますがね、なんと百五十両ですぜ。あっしは、三百両で買いもどしてえくらいでさあ」

「お前が、手に入れた時は、たった一両だった筈だ。おまけに、ねうちを知らなかったぞ。せいぜい、三、四両で、そこいらの隠居に売りつけてやろう、というこんたんだったようだな」

「まあ、そんなことは、どうでも、よござんす。しかし、こいつは、大変なしろものだということは、みとめて下さったね、先生」

「うむ。……どこで、手に入れた？　お前のことだ、また、小金持の後家を、たぶらかしたのだろう」

「とんでもない。あっしは、一生一代の義俠を発揮したんでさ。義をみてせざるは勇なきなり。裾をみて、はぐらざるは、色男にあらず。裾のみだれて、脛ききょう、中かきわけて、股さぐり、月は野末の草の露、しっぽり濡れる心地よさ、君を松虫夜毎にすだく、と来た」

「なんのことだ？」

「つまり、その――この三五郎が、あろうことか、渋紙面の婆あを、燃えさかる地獄の業火の中

から、救い出したとおぼし召せ」

「美人をたすけようとして、あわをくって、婆さんをひっかかえて出て来たわけか」

「なに、君子危きに近よらず。火事場へとび込んだのは嘘で、焼け出されて、倒れているところを、ひろってやったのが、事のはじまりでさあ。おっと、忘れていた。その婆あを、実は門口まで、駕籠で、運んで来て居ります。ただいま、これへ――」

「迷惑なことだ。なぜ、ここへ連れて来た？」

「因果はめぐる小車の、火宅の門を出でざれば、って謡曲にもありまさ。連れ参るほどに、とくと、皺面を見とどけておくんなさい」

三五郎に肩を借りて、よろめく足どりで入って来た老婆を一瞥した主は、愕然と、息をのんだ。

末松邑久守の母佐久の方に、まぎれもなかった。

この草庵の主は、曽て、末松家の江戸家老であった。江原平左衛門という。邑久守には、伯父にあたる。

致仕した理由は、誰も知らぬ。

家中に判っているのは、この森の中に、そのむかし、千姫が住んだ吉田御殿が在り、末松家の所領地となっていたのを、江原平左衛門が、乞うて、下げ受けて、この草庵をむすんだということであった。

佐久の方は、冷たく凝視する平左衛門の眼眸から、顔をそむけるようにして、崩折れると、

「……屋敷が、焼けてしもうて――」

と、呟いた。

「旦那、つまり、婆様が、その時、ひっかかえて出て来た品が、これなんで――。そいつを、お茶坊主の宗円てえ野郎が、かっぱらって逃げたんでさ。そうときいては、義をみてせざるは三五郎じゃねえ、たちまち、宗円めを、とっ捕えて、坊主頭をひと撫でしてやったら、泥を吐きやがった次第を、ひとつ、述べますかね」

宗円は、かねて、佐久の方が、この文函を最も大切なものにして、女中たちにも、手をふれさせなかったのに、目をつけて、さだめし、高価な宝ものが入っているのだろう、と狙っていたのである。

さらって、逃げて、蓋をとってみると、たしかに、みごとな縮景であったが、これは、宗円にとっては、猫に小判であった。こういう品は、どこへ持ち込んでも、出所を糺される。かくしようはないのであった。したがって、一文にもならぬ。

がっかりしているところへ、三五郎にふみ込まれたので、あっさりと、手渡したのであった。

平左衛門は、佐久の方へ、きびしい視線を据えて、

「これは、末松家所領の黒姫島と存ずる。この縮景を、お持ちであったとは、すこしも知り申さなんだ。なぜ、これだけを大切にかかえて、遁れ出られた？」

「……」

佐久の方は、なかば放心のていで、文函の中へ目を落して、こたえようとしなかった。

「お方が、このような品を愛されぬおひとであることは、それがしが、一番よく存じ上げて居り

ますぞ。理由がなく、大切にされたり持ち出されたとは思えぬ」
平左衛門の語気は、佐久の方の胸を刺す鋭さがあった。

三

「なぜ、返答なさらぬ？」
しばしの沈黙を置いてから、平左衛門は、佐久の方を促した。
「そなたは、もはや、末松家の御仁ではありませぬ。説明する必要はありますまい」
佐久の方は、ようやく、威厳をとりもどしてみせた。
「家中から去っても、それがしが、藩主の伯父たることに変りはない。失礼乍ら、お方は、藩主の実母がみまかったおかげで、側妾より、なおった女性ですぞ。公儀には、いまだ、正室として届け出ては居らぬ筈。いわば、蔭妻ではありませんか。……この品は、たぶん、末松家に古く伝わった家宝のひとつと存ずる。とすれば、お方が、わたくしなさることは叶わぬ」
それをきくや、佐久の方は、急にヒステリックに、
「そなたなどの知ったことか！　渡しませぬぞ！　死んでも渡しませぬぞ！」
と、口走って、文函を、ひっかかえようとした。
とたんに——。
文函は、生きもののように、するすると、畳をすべって、濡れ縁へ、にげた。

一条の天蚕糸が投げられて来て、文函にからむと、引いたのである。
「曲者っ！」
平左衛門は、脇差の小柄を抜くやいなや、池泉の畔の木立めがけて、びゅっと投じた。
しかし、姿を見せぬ曲者は、その未熟を嗤うがごとく、文函を宙に躍らせて、木立の中へ奪った。
「おのれっ！」
平左衛門は、差料を抜きはなつと、庭へ跳んだ。
平左衛門が、その木立めがけて、疾駆せずに、左方へ奔って、築地を躍りこえたのは、賢明であった。
鼠色の筒袖に、同じ色のたっつけをはいた曲者は、文函をかかえて、平左衛門の前方二間ばかりの濠ぶちへ、ひょいと、姿を現した。
「動くな！」
平左衛門は、青眼につけて、じりじり迫った。
濠は、二間以上もある。よもや、跳びこえられまい、と思われた。
「この品、暫時、拝借つかまつる。盗むのではござらぬ」
曲者は、云った。
「ほざくな！　この草庵を窺っていたのは、主命であろうが、貴様の主人はおそらく公儀の要人であろう。生かしては、還せぬ！」

「語るに落ちる。末松家には、公儀にかくさねばならぬ秘密がござるようだ」
余裕をもって、曲者は、うそぶいた。
平左衛門は、猛然と、襲った。
瞬間——。
曲者は、かるがると、濠の上を、飛んだ。勢いあまって、あやうく、濠からすべり落ちかかった平左衛門は、かろうじて、ふみとどまって、
「待てっ！」
と、絶叫した。
「御免——」
曲者は、一礼しておいて、悠々と去ろうとした。
しかし、次の瞬間、悸となって、足を停めた。
森の中をひとすじ通じている小径を、ゆっくりと歩んで来た者が、二十歩あまり彼方から、こちらを視ていたのである。
その人物の存在に、気がつかなかったのは、忍びの者として、不覚というほかはなかった。
平左衛門も、その人物の出現に気づいて、
「お願いでござる！　その曲者を討ちすてて頂きたい！」
と、咽喉をふりしぼった。
偶然であった。

顔十郎は、末松家の元江戸家老が、この森に隠棲しているときいて、会いに来たのである。
「曲者か——ほう、わしより一足さきに、おとずれたのが、忍者とは、面白い」
にやにやして、のそのそと、進んで来た。
松平大和守にやとわれている伊賀者祭右門は、顔十郎の歩行ぶりを観て、
——この浪人者に、背中は向けられぬ。
と、覚悟をきめた。

佐野十太夫は、おのが長屋で、末松邑久守に、尋問を開始していた。
なぜ、贋きちがいにされていたか？　どうして、熊に怯えるのか？　家中に大きな陰謀がある模様だが、知っているのか？　末松藩が近頃にいたって、次々と借財を返済しているらしいが、果して、どのような手段で、その金が入手されているのか？
公儀屈指の隠密であった十太夫の尋問であった。
邑久守の口は、おのずと開かざるを得なかった。
はじめのうちは、
「わしは、何も知らぬ」
と、かぶりを振るばかりであったが、とうとう、すてばち気味になり、
「黒姫島へ行って、調べるがよい！」
と、云った。

「末松藩所領の島のひとつですな？」
「そ、そうじゃ」
「貴方様は、その島に、何かが隠匿されていることを、ご存じですな？　いや、お気づきになったので、奸臣どもから、贋きちがいにされて、押しこめられた——そうでは、ありませんか？　いかがです？」
「そうじゃ！　その通りじゃ！」
邑久守は、なげ出すように、こたえた。
「何が隠匿されているのでござろう？　お教え下されたい」
「いいや、それは、知らぬ。……わしは、ただ、古文書によって、黒姫島を調査することにした。末松家の窮乏を救うのは、黒姫島を措いてほかはない、と記されていたからじゃ。……わしは、黒姫島に渡った。……そこで、熊に出会うて、崖から落ちた。わしは、一時、たしかに、頭が空白になっていた様子だ。し、しかし、狂いはせなんだ。正常にもどるのに、しばらくの日時を要したまでじゃ。……正常にもどった時、わしは、座敷牢にとじこめられて居った。……もう、これぐらいで、よいであろう。……わしに、また、烈しい頭痛をあじわわせて、くれるな！」
そう云って、邑久守は、両手で頭をかかえると、ふかく、俯向いてしまった。

姉の仇（かたき）

一

松平大和守は、書庫に在って、古い記録をひらいていた。
それらは、ことごとく、千姫の生涯に関する事であった。
いま、大和守が、目を通している冊子には千姫の介添として大阪城に入った小野お通という才女の生涯が、記されていた。
小野お通は、浄瑠璃節をつくった、とつたえられている。
浄瑠璃節は、浄瑠璃姫物語——すなわち、十二段草子を語った曲節に起源し、浄瑠璃という名も、ここに基いている。その十二段草子を、小野お通がつくったのである。
しかし、これほど、重要な存在である小野お通の伝記は、これまで、霧につつまれたように、不明だったのである。

小野お通は、織田信長に仕えた侍女であったとか、秀吉に寵愛されたとか、十二段草子は、お通の作ではないとか、異説まちまちであった。

大和守が、調べている記録にも、それらの異説が、みえていた。

小野お通が、浄瑠璃節をつくったおこりとしては——。

ある年、織田信長が、大病の後、不眠の夜がつづくので、数人の男女に伽をさせて、いろいろの昔話を語らせた。そのうちの一人に、小野お通という遊女がいた。お通は、能書文者であったので、なにか面白い文を作って、信長をなぐさめようと思い立った。幾日か思案をめぐらした挙句、源義経が、舎那王と称していた頃、東へ下る途中、三河国矢矧の長者の娘上るりという少女と恋をした一篇の物語をつづって、信長に、きかせた。

信長は、大層よろこんで、いくども、読ませた。

しかし、くりかえして、素よみをすれば、あきて来る。同じ伽の城玄勾当、角都勾当らは、これに節をつけて唄ったなら、よろしいのではなかろうか、と相談した。

丹後七郎左衛門、橋本筑後という二人の士は、歌に曲をつけるのに秀れた利発者たちであった。信長から、命じられて、この物語に、節をつけたところ、これが、すばらしい出来であった。とりあえず、この節には、上るり、と名づけられた。

信長は、そのうちに、この上るりをうたうばかりなのにもあきて、人形の仕形をつけるように命じた。西の宮の傀儡が召されて、文句のあやを仕形にして、人形をまわした。あやつりは、これが濫觴である。

浄瑠璃の起りは、永禄年中の比、織田信長公の侍女に小野お通と云いし秀才の艶女あり、古の小野小町をもあざむく美女なりしかや、信長公のために、牛若丸が三河国矢矧の宿の長者が娘浄瑠璃御前と忍び給うて、ぬれにぬれたる言の葉を、十二段に綴りたり、時の人、この草子を、浄瑠璃本と唱えける。

ところが——。

実は、小野お通が、信長に仕えたという事実はなかったのである。

大和守は、古い記録を調べているうちに、小野お通の正しい生涯を発見したのである。

小野お通は、常陸水戸の城主武田常陸介信吉の家臣小野和泉の女であった。はじめ、関白秀次の御家人塩川志摩という士の妻となったが、良人に死別後、徳川家康に見出され、その手がついて、側妾格になり、千姫が、大阪城へ入輿の際、介添になって、供をした。

家康の手がついた、というのは、あやしいが、千姫にしたがって、大阪城に入ったという事実は、疑いなかった。

大和守は、さらに、くわしく、お通の伝記を調べてみた。

——お通ほどの才女が、千姫の生涯についての覚書をのこさぬ筈はない。

そう考えたのである。

関ヶ原の合戦の時、お通は、三十四歳であった。この際、天下の大小名は、東奔西走して、京畿に於てしばしば集合会盟していたが、お通は、茶道をはじめ、琴碁書画また詠歌の師として、

礼式に通じていたので、それら諸侯の会席に招聘せられて、中年増の藹女として名高かった。

したがって、家康に見出されて、千姫の介添として大阪城に入っても、決して、臣下として、仕えたのではなかった。千姫の教養の師として、ついて行ったのである。

お通が、大阪城に入ったのは、三十六歳の時であった。

元和元年、大阪城は炎上、豊臣氏は、亡んだ。

お通は、千姫とともに、徳川家へもどった。お通は、もはや、千姫の師をつとめる必要はなかった。お通は、その余生を、好きなように送ったに相違ない。

二

「お！　これだ！」

ある冊子を手にとって、ひらいたとたん、大和守は、思わず、声をあげた。

それは、

「新十二段草子」

という題名の浄瑠璃物語であった。

義経が亡きのちの、浄瑠璃の後半生を綴った物語であった。

だが、これは、「十二段草子」とは、あきらかに、別の物語であった。

一刻ののち——。

読み了った大和守は、

「そうか！　そうであったか！」

と、合点した。

「新十二段草子」は、千姫の後半生を、いつわりなく、記したものであった。秀頼を義経に、千姫を浄瑠璃にみたてたのである。

お通は、千姫からはなれると、東福門院が入内したのに従って、奉仕して、二百両百人扶持を与えられ、静かな余生を送っている。「新十二段草子」は、そのあいだに、書かれたものであろう。

大和守は、これには、殆ど、虚構はない、とみてとった。

とすれば。

千姫の後半生は、やはり、数奇である。

「殿——」

書庫の戸際で、呼ぶ者があって、大和守は、われにかえった。

祭右門の声であった。

「あちらで、待て」

大和守が、なお、さらにくわしく調べるために、数冊を携げて、居間に戻ってみると、自分の座の前に、一個の古びた文函が、据えてあった。

右門は、末座で、俯向いていた。

大和守は、その顔色を一瞥して、眉宇をひそめた。

「いかがいたした、右門？」
「その文函、ご覧下さいまするよう――」
「いや、そち自身のことだ。手負うたな？」
「いささか――」
「いささかではあるまい。そうしていて、大事ないか？」
「御心配下さいませぬよう――。これしきの傷に、弱る右門ではございませぬ。生命に別状ございませぬ。それよりも、その文函を……」
「これは？」
「末松藩の元江戸家老江原平左衛門の隠宅より、掠めて参りました。先代邑久守の側室佐久の方が、大切に所持していた品にございます」
「ふむ」
蓋をとって、目を落した大和守は、海原の中にひとつの小島を浮かべた縮景に、思わず、感動の声をもらした。
「これに、曰くがありそうか？」
「多分――」
右門は、その隠宅で目撃したことを、逐一報告した。
黙って、きき了った大和守は、
「ご苦労であった。右門、下って、ゆるりと休息せい。いかに鍛えたからだでも、深傷には勝てぬぞ」
と、やさしく、云った。

右門が、音もなく消え去ってから、大和守は、あらためて、文函の中の縮景に見入った。
まことに、みごとな模型であった。
しかし、鑑賞用に作ったものとすれば、こんな文函の中に、とり出せぬようにはめ込んでしまったのは、不審である。これは、床の間などに飾るために作った品ではない。
――なんの目的があって、作ったのか？
疑いつつ、大和守は、ふと、先程読んだ「新十二段草子」の最後の場面を思い泛べた。
女主人公浄瑠璃――すなわち千姫は、終焉の地として、備前の沖あいにある小島をえらんでいた。
ほんのひとにぎりほどの、無人の小島に、草庵をむすんだ千姫は、下婢一人、老僕一人に仕えられて、さびしく、数年をすごしてから、ある朝、ねむるがごとく、臥牀の中で、逝っていた。
おそらく、覚悟の服毒であったろう。
――末松家の家宝とすれば、あるいは、千姫他界の島が、これではなかろうか？
大和守は、想像したのである。そして、この想像は、当っているような気がした。
と――。
急に、大和守は、顔を擡げて、次の間との仕切襖へ、視線を投げた。
「右門、なぜ、そこに居る？」

忍びの護衛役は、大和守がこの居間にいるかぎり、次の間に、身じろぎもせずに、控えていることになっていた。

深傷を受けた右門が、そのつとめをつづけていることが、大和守には、すこし腹が立った。

返辞はなかった。

右門ならば、打てばひびくように、こたえる筈である。

瞬間——座を立った大和守は、奔って長押の槍を摑みとりざま、

「えいっ！」

と、襖をつらぬいた。

どうしたのか、槍は、そのまま、押すことも、引き抜くことも、できなくなった。

襖のむこうにひそんだ者が、むずと、柄を摑んだのである。よほどの手練者である。

大和守は、槍をすてると、さっさと、座に戻った。

襖が、しずかに、開かれた。

敷居ぎわに、片手をつかえて、

「おひさしゅう存じます」

と、頭を下げた者を見て、大和守は、びっくりした。

「顔十郎ではないか。これは、珍しい！」

数年前、大和守は、公儀の重大な任務をはたすために、顔十郎の腕を借りたことがある。その時、大和守は、顔十郎に、ぞっこん惚れ込んだものであった。

なろうことなら、自分の腹心として、永く仕えてもらいたい、とたのんだが、顔十郎は、笑って受けつけず、飄然として何処かへ、姿を消し去ったのである。

「なぜ、敵意をかまえているように、そんな場所に、ひそんだな？」

玄関から案内を乞うてくれれば、よろこんで歓迎する客である。

「無礼の段、お詫びつかまつる」

顔十郎は、のそのそと、入って来た。

大和守は、はっとした。

「顔十郎、そちだな、わしの家来を手負わせたのは？」

「殿のおそば衆とは、露知らず、申しわけないことをいたしました」

顔十郎は、右門を討ちとれなくはなかった。わざと、加減して、傷を負わせたのは、逃走力をにぶらせるためであった。そして、あとを、尾けて来たのである。

「あの男を手負わせることができるのは、江戸ひろしと雖も、そちを措いて、ほかにはあるまいな。そうか、そちの仕業であったか」

「殿のおそば衆と存じて居れば、闘わずに済んだことでござる。いや、なかなかみごとな技の持主でした。あやうく、この顔十郎、売りものの鼻を殺がれるところでありましたな」

「顔十郎、そちは、末松藩の元江戸家老と、懇意か？」

「いや、一面識もありません」

「どうして、味方した？」

「殿は、末松邑久守が、気が狂って、座敷牢に押しこめられている、という噂を、おききおよびではありませんか？」

「きいていた。一昨日、そちが手負わせた男に、ひそかに、しらべさせてみたところ、上屋敷にも下屋敷にも居らなんだ。別のところに、いるのかな？」

「猿江も、ずっと遠い野にある古館に、とじこめられているのを、それがしが、救出つかまつった」

「ほう……と申すと？」

「贋狂人にされていたのでござる。どうも、末松家には、奸臣がはびこって、騒動が起っている模様でありますな。殿は、それをお知りになって、あのおそば衆を使われているのではありませんか？」

「なんとなく、怪しいと思って、ちょっと、小当りに当らせてみただけの話だが……、そちが動いているとすれば、大きな騒動であろう。そちの話を、まず、きこうか」

顔十郎は、三百諸侯のうちで、この松平大和守を、最も信頼のできる大名だ、と考えていたので、包まずに、打明けた。

深い興味をそそられて、きき了った大和守は、微笑し乍ら、

「そちは、千姫が何者の子を生んだか、そこらあたりに、謎を解く鍵が、かくされている、とみたか」

と、云った。

「まず――」

「末松藩の所領のうちの島のひとつに、これと、同じ島がある筈だ」

大和守は、文函を、押しやった。

顔十郎の大きな眸子が、その縮景にそそがれて、光った。

「わしは、たぶん、千姫終焉の島であろうと思う」

「御慧眼――」

「どうだな、顔十郎、ひとつ、出かけてみるか」

「乗りかかった船でありますれば、参らねばなりますまい」

顔十郎も、微笑をかえした。

三

黄昏どきの雑音の満ちた長屋で、末松邑久守は、ひとり、昏れた部屋に、しょんぼりと坐っていた。

十太夫は、午すぎに出かけて行ったきり、まだ戻って来ていなかった。

悪夢をみているような日が、もう幾月つづいていることであろう。

周囲の者たちが、云うように、自分は、本当に狂人ではないか、と疑い、それを強く否定する気力さえもなくなっていたところを、救い出されたのである。

しかし、もう、自分は、殆ど廃人同様の身になっている、という意識から、まぬがれることができなくなっている邑久守であった。

こうして、薄穢い長屋の一軒にともなわれて、茫然と坐りつづけている自分には、もはや、自身から動く意志は、全く喪われているようであった。

ふと——。

われにかえった邑久守は、格子戸の開く音に、なんとなく、ほっとした。

破れ障子が開かれるのへ、うつろな視線を向けた邑久守は、それが、十太夫ではなく、若い女であるのをみとめて、どこかで会ったような、と思った。

女は、顔十郎に熊退治をたのんだ於与里という腰元であった。

邑久守の前に坐った於与里は、冷たい眼眸を据えて、

「殿、みじめなお姿におなりなされましたな」

と、云った。

「そ、そちは……？」

「わたくしは、於与里と申します。上屋敷の方にご奉公して居りました」

「そうか」

「わたくしの姉も、ご奉公して居りました。於兎和と申しましたが、ご記憶でございますか？」

「於兎和？　……お、おぼえて居らぬ」

「おのが子を懐妊した女子の名も、おぼえておいでではありませぬか？」

於与里の表情が、険しいものになった。

「懐妊?!　わ、わしは、知らぬぞ」

「姉は、懐妊したために、殺されました」

「……」

邑久守は、息をのんだ。

「殿！　知らぬ、とは云わせませぬぞ！」

「知らぬのじゃ。わしは、本当に、知らなんだ」

「それは、おのれが、暗愚であることを示す証左ではありませぬか！　おのれが手をつけた女子の名も知らねば、懐妊したことも知らず、奸臣どもに殺されるにまかせた痴呆ぶりを、思い知るがよい！」

於与里は、胸から懐剣をとり出して、邑久守の前に、置いた。

「自決なされませ！」

「……」

恐怖の形相になって、邑久守は、ずるずるとあとずさった。

「おのが暗愚をつぐなうためには、自決のほかに、とるべき途がありましょうか」

「ゆ、ゆるせ！」

「殿！　いやしくも、一国の城主が、その卑劣な言葉は！」

於与里は、懐剣を把りざま、抜きはなった。

「自決の勇気がなければ、この於与里があの世に送ってくれる！」
「た、たのむ！　わ、わしは、生きたい！　ゆ、ゆるせ！」
邑久守は両手を合せた。
於与里は、あまりのなさけなさに、唖然となった。
その隙をうかがって、邑久守は、脱兎のごとく、はねあがって、逃げ出した。
「殿！」
於与里は、裾をけって、追いすがった。
死にもの狂いの迅さに、於与里は、一撃をはずされるや、かっとなった。
「姉のかたき」
柳眉を逆立てて絶叫した。

秋扇譜

一

気遠くなるほど、美しく澄みわたった秋空の下に、のどかな時世の、街道景色が、ある。
「……浪たいらかに、街道の松並木、枝を鳴らさず、往来の旅人たがいに、道を譲りあい、太平を唄うつづら馬の小室節ゆたかに、宿場人足その町場を争わず、雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのずから独行し、女同志の道連れ、ぬけ参りの童まで、盗賊かどわかしの愁にあわず、かかる有難き御代にこそ、東西に走り、南北に遊行する雲水のたのしみ、えもいわれず――」
これは、十返舎一九の「膝栗毛」の一節である。
見わたしたところ、たしかに、その通りの、のびやかな風景だが、人間に、色と欲がひそんでいる限り、それぞれの胸裡に、何がひそんでいるか、わかったものではない。
街道を行く伊勢参りの群、出府の役人、帰国の武士、御用飛脚、巡礼親娘、普化僧、問屋駕

籠、乗りかけ駄馬など——かれらがせおっているこの世の業も、秋の美しい陽ざしの下では、のどかな風物の仲に溶けているばかり。

半裸の馬子が、大声で、悪たれ唄をどなって行く。

ええ、こらやあ
お国は大和の郡山、お高は十と五万石、茶代がたった二百文、こちゃえ
人のわるいは、鍋島、薩摩
暮六つの七つ立ち、こちゃえ
銭は内藤豊後守
袖から、ぼろが下り藤、こちゃえ

六郷川を渡って、鶴見、生麦、子安と過ぎ、入川村にさしかかった地点であった。

馬子は、何気なく頭をまわして、後からのそのそとやって来た浪人者をみとめた。

天狗のようにおそろしく鼻の高い、途方もなく頤の長い貌で、着流しの黒羽二重を、尻端折りして、毛だらけの臑を、秋風になぶらせている。

——こんな素寒貧野郎じゃ、しようがねえ。

馬子は、かぶりを振った。

とたんに、

「馬子衆、三島までは、いくらで行く?」

と、声をかけて来た。

「へ? こいつは、おどろいた」

「なにがだな?」

「人は見かけによらねえ、ということでさ」

「風体で、ふところを読んではいかんな。とかく、世間というやつは、外見だけで、人の器量やらふところやらをはかりたがる。九百九十九匹の鼻欠猿めらは、満足な一匹の猿を嗤う——わかるか、馬子衆」

「へえ、どうも——。しかし、旦那、山吹色を拝ませておくんなさるなら、話は別だが、そんなに無頓着な恰好をしていなさるんじゃあ——」

「成程な。馬子にも衣裳か。熨斗目をつければ、この面も、一万石程度に見えるかな。雁が飛べば、糞蝿も羽づくろいをせねばならんか。……ところで、尋ねるが、腰元風の武家娘が、急ぎ足で、行かなんだかな。人相は——そうさな、木彫のように、冷たく、眉と眦が少々つりあがっている」

「ああ——」

馬子は、頷いた。

川崎の宿場で、女の一人旅とみて、しつっこく、馬をすすめた——あの武家娘に相違ない。

娘は、そ知らぬ顔でさっさと行き過ぎて行ったが、その眸子の冷たさと、おそろしく足が速

かったことを、馬子は、思い出した。
「会いましたぜ。市場まで追いかけたんだが、べらぼうに足がはやくて、どうも、ただの娘じゃなかったね」
「いま頃は、どのあたりを歩いていると思う？」
「まだ、神奈川台を越えていめえな」
「そうか」
キラリと光ったものが、馬子に抛られた。反射的に、掌に受けてみて、
「へっ！」
と、馬子は、目を剝いた。
一両小判であった。
「馬子衆、それで、一杯ひっかけて、あとから来い」
その声は、馬上から降って来た。
きょとんとしている隙に、駄馬は駅馬に生れかわったように、土煙りをあげて、たちまち、彼方へ駆け去った。

二

江戸から七里——神奈川台は、海の上に在る。

点々と漁家のちらばる横浜の湾を眼下にするこの台地は、布帆軽鷗の飛び行くまにまに、霞をへだてて、黛のような上総房州の遠山までも容れて、宏大な眺めであった。
「程ケ谷へ一里九丁」
の道標のある茶屋に、武家娘於与里は、腰かけて、膝に、茶碗をのせていた。
東海道をこえて、備前国へ行こうとしている於与里であった。
於与里は、姉の仇を討つかわりに、一枚の絵図面を、手に入れたのであった。末松邑久守は、於与里から、頭上に短剣をかざされるや、
「ゆるせ！　ゆるせ！」
と、絶叫しつつ、無我夢中で、懐中から、油紙に包んだものをひき出して、さし上げたのである。
「こ、これを、呉れる！」
於与里が、手に把ってみると、それは、絵図面であった。海原の中に、ひとつの島が詳密に描かれてあった。
「これを、呉れてどうするのじゃ？」
睨めつけると、邑久守は、喘ぎ乍ら、
「十万両が、そ、そちのものじゃ！」
と、こたえた。
「たわけたことを！」

やはり、ほんものの狂人であったか、と疑った。

邑久守は、絶望の面持で、

「その、図面の島に、十万両、か、かくされていることを、わ、わしは、知った。……知ったばかりに、わしは、き、きちがいにされたのじゃ……」

と、告白したのである。

末松領の島のひとつ——黒姫島というその島こそ、末松家の始祖千姫が、終焉の地であった。千姫は、十万両に達する慶長大判小判を、島の某処に埋めておいて、逝った、という。埋めた理由があった。

千姫が最後の良人は、瀬戸内海に棲む海賊の頭領松木嘉門であった。

徳川の天下になって、村上水軍の苗裔たちは、ことごとく、その牙を折られて、猫のようにおとなしくなってしまっていた。一人、備前の沖にある幾個かの島嶼に拠る松木嘉門の海賊船だけが、なお、徳川幕府に屈せずに、内海航行の御用船を襲っていた。

松木嘉門の父民部之丞は、曽て、文禄慶長の朝鮮役に、水軍の一将として参加し、異様な功績をたてた士であった。

すなわち、敵首の代りに、鼻を斛いで、後送する任務をはたしたのである。

鼻を斛ぐ、ということは、今日の常識からすれば、いかにも、むごたらしい。しかし、当時は、血汐のしたたる敵の首を、大将の前にさし出して、実検を請うのが、軍人として当然の慣習であった。鼻を斛ぐくらい、なんでもなかった。

松木民部之丞は、朝鮮役中最も熾烈をきわめた南原の攻囲戦において、敵の屍から、実に、五千五百二個の鼻を斛いで、日本へ送った。

秀吉は、それらの鼻を、京の大仏の前に瘞め、その塚の上に五輪塔を建てて、五山の僧徒を招いて、大施餓鬼を営んだ。

役人は、これを耳塚とよんだが、それが鼻塚であることは、秀吉が、島津兵庫頭らに与えた感状によって、証明されている。

民部之丞の嫡子嘉門は、豊臣家が滅亡するや、備前の海辺二万四千石の領土をすてて、海賊となり、ほしいままに、跳梁したのである。

嘉門と千姫が、どうして結びついたか、その記録はのこっていない。しかし、千姫が、嘉門の子を生んだことは、まちがいない事実として、末松家の家系図のはじめに、記されてあった。

千姫は、その一子が十五歳になって、元服し、末松邑久守に任ずるや、自分は、離れて、黒姫島に移り住んだのであった。

その時、嘉門は、二百余の部下とともに、琉球の方へ、のがれていた。幕府の水軍に追われたのである。

千姫は、かれらがふたたび、帰って来た時の軍用金として、十万両を、かくしたのである。

於与里は、邑久守から、この秘められた事実をきいて、その生命を奪うかわりに、絵図面をわがものにしたのである。

いま、渺茫たる景色に、目を送り乍ら、於与里の胸は、大きな欲望で、ふくらんでいる——。

三

茶代を置いて、街道へ出て、すたすたと歩き出した於与里は、坂を駆けのぼって来る馬蹄をきいたが、べつに、気にもとめず、振りかえりもしなかった。

奔馬は、たちまち、於与里の背後へ来た。

そのまま、かたわらを駆け抜けるとみえた。

瞬間——於与里は、からだが、ふわっと、宙に浮いた。

「おのれっ！」

その叫びだけが、むなしく、宙にほとばしっただけで、馬上にかかえられた刹那には、もう、当て落されて、ぐったりとなっていた。

ふと——。

気がついた時には、深い山中らしい、灌木の茂みにかこまれた、小さな草地の陽だまりの中に、仰臥させられていた。

後手にしばられていた。

於与里は、のっそりと彳んでいる顔十郎の異相を見出すや、冷たい眸子を、そむけた。

「そなたが、忠義の娘と思い込んでいたのは、こちらの不覚であったな。邑久守を、古館から救い出させたのは、仇討のためであったとはな」

顔十郎は、笑い乍ら、しゃがみ込むと、

「智慧は働くようだが、女としては、なにか、ひとつ欠けているのではないかな」

「余計なことを云わずに、はよう、生命を奪うがよい！」

「殺すために、捕えたのではない」

「はずかしめるためか？」

「左様、男という奴は、あさましいもので、こうなると、弄びたい衝動を制えきれぬ」

「では、さっさと、はずかしめるがよい」

「弄ばれても、よいのかな？」

「あがくだけ見苦しい、と知った以上、こちらも、男がどのようなけだものと化すか、見とどけてやる」

「そういうところが、女として、なにやら、欠けている」

「欠けて居ろうが居るまいが、おのれの知ったことか！　はよう、犯すがよい！」

於与里は、自ら、裾を蹴って、両膝をひらいた。

「ふむ。では、女らしゅう、してやるためにも、犯さぬわけに参るまい」

顔十郎は、にやにやし乍ら、枯枝をひろいとると、着物と下着の前を、左右に、めくりはじめた。

水色の二布も、容赦なく、枯枝のさきにひっかけて、するりとめくって、豊かに肉の盈ちた、まっ白な内腿へ、陽ざしをそそぎ入らせたとたん——。

油断があったか、顔十郎は、いきなり、その長頤を、したたか蹴とばされて、あっけなく、ひっくりかえった。

もそもそした動作で、起き上った顔十郎は、

「不覚、不覚――」

と、笑って、無遠慮な眼眸を、あけ拡げられた股間へくれたが、

「ほう！」

と、口をとがらせた。

「心得ある婦人は、道中には、防備おさおさ怠らずときいて居ったが、成程な」

於与里は、白い六尺を、きりりと締めていたのである。

「わしが、このふんどしを、解かねばならんのかな」

顔十郎が云うと、於与里は、目蓋を閉じて、両脚をぴったりと合せた。

「絵図面をこのふんどしの中に、かくしているとすれば、やむを得ないが、どうだろうな？」

顔十郎は、邑久守の口から、そのことをきいて、急いで、於与里を追って来たのである。

なお、千姫が、松木嘉門の子を生んだ事実は「新十二段草子」を読んだ松平大和守の明察によって、あきらかとなり、顔十郎は、すでに知っていた。

「よいかな？　かまわぬかな？」

「……」

顔十郎は、すばやく、於与里のからだを、くるっと、俯伏させた。

とみるや、脇差を抜きはなちざま、むっちり盛りあがった、ふたつの鏡餅のような臀部の谷あいへ食い入った白いふんどしを、すばっと断った。

とたんに、於与里が、さも可笑しそうに、高い声をたてて、笑い出した。

すると、顔十郎は、自分の行為に、なんとも云えぬおぞましい屈辱をおぼえた。

――この勝気な娘は、犯すよりほかに、従順にさせるすべはないようだ。

急に、烈しい衝動が起った。

四

それから小半刻のち――。

程ケ谷にほど近い街道を、顔十郎は、於与里をつれて、歩いていた。

いつもの飄乎たる表情は、うしなわれていた。鬱気の翳が、眉間にあった。

於与里の方は、あいかわらず、木彫のような無表情を保っている。

顔十郎は、於与里を犯していた。於与里は、季女であった。しかし、その疼痛を、一語ももらさず、死んだように、じっとしていただけである。

起き上った時、顔十郎の方に、かえって、おぞましい屈辱感が、増していた。

ふんどしの中には、絵図面は、なかった。どうやら、於与里は、それを、身につけていないようであった。

顔十郎は、やむなく、於与里を、備前までつれて行くことにきめた。

尤も、縛ってつれて行くわけにはいかないので、うしろに跟いて来させることになった。

三、四歩おくれて、歩く於与里の胸中に、どんな思いが去来しているのか、顔十郎には、見当もつかなかった。

顔十郎は、沈黙をまもっているのが、やりきれなくなって、頭をまわすと、

「わしに、隙があったら、いつでも、刺し殺してくれて、かまわぬ」

と、ことわった。

於与里は、冷たく見かえしただけで、唇をかたくひきむすんでいる。

陽が、傾いた頃あい、程ケ谷を抜けた。

顔十郎は、藤沢宿まで、歩きつづけることにして、茶屋に休もうともしなかった。

武蔵と相模の境である境木で、陽は落ちた。

品野坂という、ゆるやかな坂をのぼりついたところで、顔十郎は、道祖神わきの懸樋水を、両手にすくって、飲んだ。

その隙をうかがって、於与里が、電光のように迅い、懐剣の一撃を、背中へくれて来た。

間髪の差で、身をひねって、その利腕を摑んだ顔十郎は、

「修業、いまだし！」

と、云った。

白刃は、そのまま、胸の鞘にもどさせておいて、顔十郎は、ふたたび、前に立った。

ものの二町も進んだ頃、於与里は、はじめて、口をひらいた。

「わたくしを、妻になさるのですか？」

「その存念は、毛頭ない」

顔十郎は、冷酷に、つっぱねた。

「では、絵図面を手に入れたら、古草履のように、おすてになるおつもりですか？」

「そういうことになろうな」

於与里は、それきり、口をつぐんだ。

藤沢宿に入った時は、すでに、どの旅籠も客を呼び入れて、ものしずかになっていた。

とある旅籠にあがると、顔十郎は、さっさと、入浴した。

そのあいだに、於与里の姿が消えているかも知れぬ、と思っていたが、戻ってみると、同じ場所に、同じ姿勢で、坐っていた。

無言裡に、夕食をすませて、女中に、牀を二つ、のべさせた。

顔十郎は、さきに、横になった。

於与里は、屏風の蔭で、衣ずれの音をさせていたが、燃えるような長襦袢姿であらわれると、自分の牀には就かず顔十郎のそばへするすると入って来た。

「わしを、憎んでは居らぬのか」

顔十郎は、びっくりして、訊ねた。

「隙があれば、必ず、刺してみせます」

於与里は、こたえた。

「ではなぜ、ここへ入って来た？」

「操を与えたからには、貴方が、わたくしの良人です。夫婦は、ひとつ牀に休まねばならぬものときいて居ります」

「成程――」

しかし、顔十郎には、女心というものが、さっぱり、わからなかった。

ともあれ。

自ら進んで入って来たものを、抱いてやらないわけには、いかなかった。

双腕の中へ擁えると、於与里は、身もだえするように、からだをすり寄せて来た。

――これを、果報というのか？　因果というのか？

顔十郎は、なかばとまどい乍ら、胸の裡で、呟いたことだった。

修羅図絵

一

藤沢より平塚まで、三里半。本馬二百二十文。

平塚より大磯まで、二十七町。本馬四十文。

大磯より小田原まで四里。本馬二百五十文。

馬入川を渡って、平塚に着く頃から、旅人は、江戸を遠く、離れた感慨をふかいものにする。

旅――というものは、当時は、足で歩くことであった。いわば、一日、一日をすごして行く人生に似ている。

晴れた日もあれば、どんよりと曇った日もある。烈風豪雨も、待ちかまえている。平坦な街道を過ぎれば、嶮岨な山路にさしかかる。

旅衣の袖にふりそそぐ村時雨も、やがて、はれわたると、西の空には、茜を染めた雲の影が、

うすく漏れる。山家の幽寂を探そうと、細流断橋を渡って、駅端の茅店に入ったとたん、また も、パラパラとしぐれて来る。浮世の油断も隙もならぬなりわいそのままである。

夕日さす山は見るまにしぐれかな

足で歩く旅には、天気の観測が、いちばん重要であった。

「申、子、辰の時に降り出さば長し。酉、丑の時に降り出せば晴れる。西北の方、黒雲は雨なり、日の色輝くは、風なり。日の傘、白く、暮に黒く、赤き色は風なり」

などと、経験が教えている。

俚諺の、

「夕やけ小やけ、あすは天気になれ」

も、経験によるものである。

広重の描く東海道も、その場所にふさわしい空模様をえらんでいる。

大磯では、雨の道中を写している。

大磯では、五月二十八日の雨を、虎が雨、という。そのむかし、曽我兄弟の討入の日、兄十郎の愛人虎御前が流した泪をとむらうためであり、広重は、それを忘れなかったのである。

「虎が雨、大磯小磯荒れまわり」

と、古い川柳にある。

その虎が雨が、いまにも来そうな昏い空模様で、海を渡って来る風は、季節はずれな肌寒さだった。

もう、疾くに南方へ飛び去った筈なのに、この風に追われたように、一羽のつばめが、街道の上を、掠めすぎた。

「あ——つばめが！」

仰いで、声をたてたのは、於与里であった。眉を落して、ういういしい女房姿であった。

道を歩く顔十郎は、珍しく、深編笠で、顔をかくし、道中袴をはいていた。

「せきにせかれて濡れつばめ、というのを知っているかな、於与里さん」

「存じませぬ」

「ぬれにぞ、ぬれし色はかわらじ、というしゃれだな」

「……」

「雨風いとわず遠くの道を逢いに北から来る燕——か。ははは……」

屈託のない笑い声をたてたとたんであった——はてな？

顔十郎の神経が、急に冴えた。

とある立場茶屋から出て来た一群の普化僧が、一列になって、歩き出すのへ、目をあてたのである。

——何者たちか？

顔十郎が、疑ったのは、その歩行ぶりであった。

常人が見たかぎりでは、べつになんの変りもない歩行ぶりであったが、武術の修業のできた者が、よく注意すれば、あきらかに、ふつうの人間の進みかたではない。

忍者の修業法の中に、「無形」および「無跡」というのがある。

「無形」とは。

森とおし鎮まった夜の空気の中を、人間が歩いて行けば、当然、からだの通って行くところに、空気の動きがのこる。その空気の動きを、つとめてすくなくするための、独特の歩行法がある。すなわち動かないと同じような動きかたをするのである。

無跡とは、文字通り、歩いた跡を消すことである。

こうした修業を積んだ者は、白昼、ただ普通に、歩いているようにみえても、どことなく、歩きかたに、微妙な変化をしめすのである。

無意識のうちに、おのがからだが、空気にふれる面を細くして、空気の滑りをよくしようとする。地面に受けさせる足さわりを柔かくするための、かるやかな、するすると辷るような、姿勢をややひくめにしたかたちになる。

顔十郎の目は、虚無僧たちの歩行が、無形、無跡の修業を積んだ者たちだ、と看破したのである。

——予感というやつだな。あの連中が、おれの西国行と無関係とは、思えないぞ。

顔十郎は、自分に呟いた。

そのまま——顔十郎は、虚無僧の一団のあとを、尾けるかたちになった。

二

小田原の東門——江戸口に来た時であった。

一人の早飛脚が、とっとと、顔十郎たちを追い抜いて行った。

追い抜きざまに、顔十郎の手に、掌にかくれるほどの忍び筒を、投げ与えて行った。

忍び筒というのは、密書などを小さく折りたたんで封じておく容れ物であった。戦国の頃には、よく飼いならし、訓練した鳥にくわえさせて、敵地の上空を、通信に使った。地面に落しても、音もたてぬ、かるい容れ物であった。

顔十郎は、そ知らぬふりで、その忍び筒を袂に入れると、小田原の町に入った。

おびただしい旅籠のならんだ蹴上坂にさしかかってから、顔十郎は、於与里をふりかえって、一軒の旅籠を指さした。

「今夜は、そなたは、そこの旅籠に、一人で泊まることになるな」

と、云った。

「なぜですか？」

「いずれ、わかる」

「この機会をのがさずに、逃げるかも知れませぬ」

「行先は、わかっているのだから、逃げることにはなるまいな」

「二度と、貴方には、捕えられますまい」
「わしの女房になったと、自分を納得させた筈ではなかったかな?」
顔十郎は、編笠の蔭で、笑った。
「いったん、貴方と離れたら、もう、わたくしは、貴方の妻などではありませぬ。敵同士です」
「どうであろうかな」
於与里は、つと、顔十郎の袖をつかむと、
「貴方に、一生つれ添うか、それとも、生命をいただくか——そのいずれかの道をえらぶよりほかはありませぬ。わたくしを、はなさないで下さい!」
「女子というものは、男を脅してはいかんな。こっちは、これから、一生一代の乱闘をやろうというのだ。せめて、笑顔で送ってもらいたい」
「乱闘? ……何者と、なさるのです?」
「まだ、判らぬ。判っているのは、箱根を越えることができるのは、対手がたか、こっちか、どちらかだ、ということだな。双方ともに、越えるのは、ゆるされぬようだ」
「わかりました」
於与里も、ただの娘ではなかった。
「わたくしは、明日、三島の宿で、お待ちして居ります」
「できた! さすがは、わが女房殿——」
顔十郎は、於与里の肩を、ポンとたたいて、くるりと向きかえらせると、

「さ、入ったり、上ったり、泊ったり——」
と、押しやった。

それから、半刻ばかりおくれて、一挺の駕籠が、蹴上坂へやって来た。
先棒が、足をとめて、
「へい、奥方様、ここが、小田原の旅籠通りでさあ」
と、告げた。
すると、後棒が、息杖で、たれをはねあげて、
「奥方様よ、ついでに、箱根も越えろ、と云いなさるなら、小田原相談じゃねえが、チト長くなるが、そこは、お心づけ次第で……」
と、云い乍ら、覗き込んで舌うちした。
「ちょっ、だらしねえ面をして、ねむってやがる」
口を半びらきにして、いい心持に、船を漕いでいるのは、佐久の方であった。
佐久の方は、無謀にも、単身で、国許へ帰ろうとしているのであった。大名の夫人や息女は、江戸住みのさだめで、国許へ帰ることは許されない。「出女に入鉄砲」という言葉があるくらい、このことは、厳重に監視されている。
佐久の方が、その禁を犯そうというのは、もちろん、目的がある。
雲助たちは、顔見合せてから、息杖で、その膝を突いた。

はっと、目をさました佐久の方は、
「あ、ここは？」
と、きょろきょろと、見まわした。
「寝ぼけちゃいけねえ。ここは、小田原でき」
「いま、何刻じゃ？」
「陽は、まだ、てっぺんにありまさあ」
「では、箱根を越えましょうぞ」
「越えましょうぞ、と仰せられ奉っても、駄賃が、少々高うなりやすが、ようがすかね？」
「もとより承知じゃ」
「話が早えや。じゃ、相棒行こうぜ」
雲助たちは、ふたたび、駕籠をかついだ。
須雲川を経て、畑村を過ぎ、杉や檜の鬱蒼としげった急勾配の道を一里ばかりのぼったところで、
「奥方様へ――」
と、後棒が、声をかけた。
「なんじゃ？」
「へっ、こんどは、目をさましてござらっしゃる。失礼さんでござんすが、手形をお持ちで、ござんしょうね？」

「手形？　それは、なんじゃな？」
「こいつは、びっくり――どころか、ひっくりだあ、あとへ、けえる、がつかあ。冗談じゃありませんぜ。奥方様よ、関所を通るのに、手形が要らねえのは、さむれえと芸人だけですぜ。芸人なら、役人の前で、手妻を使ったり、逆立ちしてみせりゃ、いいんだが……まさか、奥方様が、逆立ちは、できめえ」
「無礼な雑言を申しますまい！」
「と、そう威張ったって、はじまらねえ。手形がなくて、どうして、関所を通るおつもりですかい？」
「そなたたち、どこかで、貰うて来てくれるわけには参りませぬか。金子なら、いくらでも、出しましょうぞ」
「やっぱり、婆さまは、けえる、だあ。上へ、あきれ、がつかあ」
先棒は、後棒へ目くばせした。
「奥方様、手形がなくちゃ、金輪際、関所を通しちゃくれませんぜ」
「事情を話して、たのんでも、見のがしてはくれませぬか？」
「冗談じゃねえ。おめえ様は、どうかくしたって、米をといだり、鰯を焼いたご人ていじゃねえことは、一目で判りますぜ。……どうでげす。いっそ、肚をきめて、間道を抜けなさるか。そのかわり、捕ったら、磔刑だ。あっしらも、一蓮託生で、打首になることだが、地獄の沙汰も金次第で、いっちょう、やっつけますぜ」

「では、たのみます」
おそろしさを知らぬ承知ぶりだった。
「相棒、きまった。行こうぜ」
「合点だ」

三

箱根の山腹を縫うている杣径を、駕籠は、辿って行き、やがて、水音高い渓谷に降りた。
霧が、樹林の中から、噴きあがるように、湧きあがって来たかと思うや、たちまち視界をとざした。とみるうちに、巨きな力で押しやられるように、みるみるうちに、いずこかへ消えはてて、けわしい山岳の稜線を、すっきりと、あけはなたれた空に、浮きあげていた。
陽あしは、しかし、もう渓谷から遠のいて、山腹も、ずっと上の方を照らしているだけであった。
奇岩の重なりあった足下を落ちて行く蛇骨川の水は、見ていると吸い込まれそうな清冽な青さであった。
駕籠は、その流れを渡って、黄昏のようにくらい、杉木立の中に入った。
ふいに、梢で、けものの鳴らす物音が、うす気味わるいくらい、深山の寂寞は、深いのである。

雲助たちは、湿った苔の上へ、駕籠を据えると、たれをはねあげた。
佐久の方は、不審そうに、顔をのぞけて、
「どうしたのじゃ？　休息などしているいとまはありますまいぞ」
「そっちになくても、こっちに、あるんでさ」
佐久の方は、いきなり、肩を摑まれて、ひきずり出された。
「な、なにをするのじゃ？　ぶ、ぶれいな！」
よろけて、べたっと、苔の上へ坐り込み乍ら、肩を喘がせて、雲助たちを睨みあげた。
「婆様よ、金を、たんまり、肌身につけていなさるようだね？」
先棒が、ぬっと、顔をつきつけて、にやりとした。
「お、おのれ！　そ、そなたらは、追剝ぎか！」
「もののはずみで、ちょくちょくとね」
瞬間——佐久の方の右手に、白い刃が、閃いた。
大名の夫人である。多少の武芸の心得があった。
ふところの懐剣を、抜きはなつ手さばきは、早かった。
「うわっ！」
悲鳴をあげて、先棒は、はねとんで、臀もちをついた。額から小鬢にかけて、ななめに一直線に截られたのである。
「この、くそ婆あ！」

後棒が、横あいから、とびかかって、懐剣を、もぎとった。

必死に匍匐して、遁れようとした佐久の方は、顔を血だらけにした先棒から、押さえつけられ、苔の中へ、目も鼻も口も突き込まれた。

「じたばたしやがるねえ！」

みるみる、帯を解かれ、衣裳を剝ぎとられ、素裸にされた佐久の方は、やがて、観念すると、雲助たちのなすままに、まかせた。

雲助たちは、胴に巻きつけた白い晒の中から、ばらばらと、こぼれ落ちた小判に、目を瞠った。

「へえ、こいつは、見たこともねえお宝だぜ」

ひろいあげて、二人は、首をひねった。当節の小判ではなかった。慶長の頃につくられた、純度の高い小判であった。

「そなたたち、下種の者らが、使える金子ではない」

胸も腹もはだけて、仰臥した佐久の方が、さげすみをこめて、云った。

「ほざくねえ。雲助が、小判を使っちゃいけねえという掟があるもんけえ」

先棒が、顔の血をぬぐい乍ら、呶鳴った。

後棒の方は、佐久の方の、五十女とは思われぬ、意外な肌のつややかさに、目の色を変えていた。たしかにむっちりと肥満したからだは、生涯を美食にあけくれた美しさを保っていたのである。

「相棒、おめえ、ちょっとの間、そっぽを向いていて、くんな」

後棒に云われて、先棒も、はじめて、佐久の方の肌に、好色の視線をくれた。

「おうおう、おめえとおれとは、なんでも、折半でゆく約束だぜ」

やがて——。

五十女の十七、八貫はあろう白い豊かなからだは、黒い逞しい二個の裸体から、上下にはさまれて、せわしく蠢かされていた。

四

そこから、ほど遠からぬところに、ごうごうと、白い瀑布が、落ちていた。

その飛沫がつくるのか、瀑布の上には、美しい虹が、架かっていた。

そのむかし、南朝の忠臣新田義隆が、かくれて、ひそかに、愁心をつつむ傷身を浸けたのは、この滝つぼであろうか。

時折、義隆の勇壮の義心にあやかるべく、修験者や兵法者が、そこに、印をむすんで、立つことがあった。

いまも、一個の痩身が、幽鬼のごとく、水中に在った。

千年も、いや、それよりもまだ太古から、絶え間なく、ごうごうと、天地を、その轟音ひといろにつつんで、落下している白い瀑布の下で、微弱な人間は、妄執を断たんとして、衣服をすて

て、原始のすがたにかえるのだが……。

その男も、心我の悟りをもとめて、そうしているのであったろうが、やがて、動いて、滝つぼから、岩縁に上って来た貌は、やはり、妄執から、のがれられぬ陰惨な業念の色を湛えていた。

かげろう左近は、血を喀きつづけ乍らも、なお生きていた。

江戸から姿を消して、もう一年あまりになっていたが、いつの間にか、この箱根山中に、かくれ住んでいたのである。あるいは、おのが惨めな死にざまを、人目にさらすことをきらって、さまよい入ったものであろうか。人間というもののあわれは、病み疲れて、虚無の業念もあまりに深くなりまさると、かえって、自ら生命を絶つことが、できなくなるものであろう。

よごれた衣服をつけ、大小を腰に落した左近は、あらためて、瀑布に正対した。

そして、長い間、動かなかった。

突如——。

目にもとまらぬ迅さで、抜刀するや、頭上に、一閃の円を描いた。

飛沫から生れたような、小鳥が一羽、白い腹をかえして、滝つぼの中へ、音もなく、落下して行った。

血闘山

一

また、霧が湧きあがって、樹木も岩も渓流も、おしつつんだ。

かげろう左近は、その白い闇の中を、黙々として、歩いて行く——。

一刻ちかくも、滝に打たれた五体は、氷のようにひえきっていた。心もまた、氷に似ていた。

ふしぎに、このような荒行で、病軀をいじめ乍ら、血を喀かずにいるのであった。

それというのも、そのむかしの兵法者の修業のようなこの孤独ないとなみが、左近の胸中に、ほんの微か乍ら、ある冴やかな感覚をめばえさせていたからであったろうか。

心——というものは、ふしぎである。

心を動かし性を忍ぶ、という言葉が、孟子にある。また、禅林類聚の祖偈門にも、……菩提本樹に非ず、明鏡亦台に非ず、本来無一物、という言葉もみえる。

幾歳も、なんの生きる目的もなくして生きつづけていた者が、死期を迎えたと知って、その身を、全き孤独の中に置いてみる時、ふと、生命の光のようなものを看る、というのも、これは、むしろ自然であろう。

但し、悟りでもなければ、活力の蘇ったのでもない。業念は、依然として、胸中にわだかまっているのである。

ふと——。

左近は、足をとめた。

霧が、流れすぎたあとの、黄雀色のこめた木立の中に、左近は、あさましい光景を視出した。

黒い裸身が、白い裸身を、上下にはさんで、蠢いているのだ。

一瞬、左近の眸子が、燃えた。そして、目蓋を、ほそめた。

八本の肢に巻きつかれた白い肥満したからだは、あきらかに、自らの発作で、蠢いていた。

ねじまげられるように、こちらに向けられた貌は、老いて、みにくいものだったが、恍惚と陶酔した表情は、むしろ、あどけないくらいだった。

きれぎれに、呻きが、三つの口から、もらされつづける。

二個の異物を、体内に容れた老女の、いっそ、むざんなまでに執拗な本能の働きを、樹蔭から、凝っと見戍った左近は、ふいに、押し出されるように、歩み出た。

左近の出現に、雲助たちは、ぎょっとなって、顔色を一変させた。

しかし、老女だけは、なお、陶酔の境にさまようて、ひしと、目蓋をとじていた。

左近は、抜く手をみせず、差料を鞘走らせると、一直線に、斬りおろした。

絶鳴の撒かれた下で、三個の首が、刎ねとんだ。

左近は、その血刀を携げたまま、しばらく、からみ合った三つの屍体を眺めていた。もはや、それらは、人間ではなかった。なんとも名状しがたい、奇妙な物体であった。

——これは、なんだ？

——これは、浮世の反吐だ！

蹌踉として、歩き出した左近は、ふいに、かわいた笑い声をたてた。

たて乍ら、おのれが、もう狂いはじめている微かな恐怖をおぼえていた。

二

箱根は、東海道を旅する者の第一の難険道路であった。

三枚橋を渡って、北条早雲や宗祇法師などの墳墓旧跡で知られた早雲寺の坂より須雲川を経て、元箱根に達し、蘆の湖を望む。

山色湖光は、眼前に展け、富士の嶺が、その影をさかさに写す。

さかさ富士を眺めるのが、東海道を旅して来た者の、土産話のひとつとして、欠かされぬ。

また、この山越えは、秋こそ、無比の美観である。

陳腐な形容をかりれば、満山錦を飾る屏風の内を歩む心地である。

むかしは、もみじを黄葉と書き、いまは、紅葉と書く。

漢の武帝は、

「秋風起ッテ白雲飛ビ、草木黄落シテ雁ハ南ニ帰ル」

とうたった。

唐の杜牧は、

「車ヲ停メテ坐シテ愛ス楓林ノ晩、霜葉ハ二月ノ花ノ紅ナリ」

と、うたった。

小田原より箱根宿まで四里八丁。

箱根宿より三島の宿まで三里二十八丁。

あわせて八里が、紅葉の中にある。

これで、関所と雲助がいなければ、天国であろう、と旅人たちは、語りあったものである。

箱根の関所は、日本中で、一番厳重であった。

槍を小者に持たせて通る身分のあきらかな武家は、さしつかえないが、そのほかの旅人は、ことごとく、通行手形を所持しなければならなかった。

就中（なかんずく）、婦人が、江戸を出て上方方面へ向う時は、きわめて厳しかった。人妻、禅尼、比丘尼、髪切（後家）、少女、乱心などの区別を、手形証文に明記するのを要した。

関所では、番女あるいは改め婆などとよぶ女をやとっておいて、髪を解き、衣類をあらため、はては、陰部までも調べさせた。

男子の方は、人相書を廻付されている御尋者（おたずね）（兇状持ち）と怪しまれない限り、手形以外に身体をしらべられることは、先ずなかった。但し、参覲の大名と雖も、弓鉄砲を携えて江戸入りする場合は、手形証文通関証明に、老中の裏判を必要とした。

定

一、関所を出入る輩、笠頭巾をとらせ通すべき事。
一、乗物には出入の輩、戸を開かせて通すべき事。
一、関より外に出る女は、つぶさに証文に引合せて通すべき事。
一、手負い死人並に不審もの、証文なくして通すべからざる事。
一、堂上の人々、諸大名の往来、兼々申聞えあるは沙汰におよばず、若し不審の事あるに於ては、誰人によらず改むべき事。

右の条々厳密に可相守者也仍執達如件

正徳元年五月　　奉行

天和元年、井上通女が十六歳の秋、父に伴われて、讃州丸亀を出て、江戸へ旅をしたことがある。その時、関所で、手形の書式が不十分のために、書式の書換を命じられた。

すなわち、「わきあけたる少女」と書くべきところを、ただ「女」とのみ書いてあったのを、咎められたのである。

そこで、わざわざ、大阪まで、急使を書き換えにはしらせ、十日間も、待った、と手記にのこしている。

夜明けに、小田原の旅籠を出た於与里は、もちろん、手形を所持していたが、役人の不審の目を受けて、改め婆に、はだかにされた。

その屈辱に堪えて、ようやく調べ所を解放された時、普化僧の一団が、一列になって、しずしずと通るのを、見かけた。

かれらは、べつに、なんの疑いも抱かれるようなことなく、通過していった。

——女が、このように、男と区別され、さげすまれてよいものか！

勝気な於与里は、腹が立った。

関所を出ると、待ちかまえていた雲助たちが、ぞろぞろと寄って来た。

「おうおう、お嬢様よう、馬をやらんけえ」

「馬より、駕籠がよかんべえ。馬の上で居眠りは険呑だが、駕籠の中なら、安心して、好きな男の夢がみられるでのう」

「やい、八、よけいな邪魔だてしやがると駕籠ごと、蘆の湖へ、たたき込むぞ」

「なにをこきやがる。てめえこそ、大きな面しやがると、老いぼれ馬の脚を、おっぺしょって、薪にするぞ」

「野郎！」

「来るか！」

於与里の面前で、つかみあいをはじめた。

これはなれあい喧嘩で、当惑した娘を、駕籠か馬か、どちらかへ乗せて、怪我代までふっかけようとのこんたんであった。

於与里は、その手に乗らなかった。

突如、鋭い気合いのこもった声で、

「下郎ども、下れっ！」

と、きめつけ、きょとんとなった髯面どもを、ずうっと見まわして、

「大奥中臈楓とは、わがことじゃ。このたび、御台様のご命令によって、伊勢大神宮へ、忍び参りの道中ぞ。わらわに対しいささかの粗相あっても、そちらの首は、即刻、飛ぶであろうぞ」

云いはなって、おいて、すたすたと歩き出した。

雲助たちは、あっけにとられて、見送ったばかりであった。

「箱根雲助多シ、山中博奕ヲ催ス、負ケ来ッテ焚火ニ当ル、散ジテ作ル胡麻ノ灰」

とは、銅脈山人が、たわむれに詠じたところ。

東海道名物のひとつである箱根山の雲助を、追いはらうのは容易ではなかった。

三

本宿を過ぎて、峠の上の茶屋の床几に憩うた時であった。

遠くかすんで見える伊豆の海に、目をほそめていた於与里は、ふと、せわしい騎馬の音を、きいた。

旅人たちは、どこかの大名に異変でも起っての早馬か、と視線をまわした。

箱根路を、馬をとばす者など、絶えてなかったのである。

馬脚をあおっているのは、編笠をかぶった武士であった。浪人てい、と見て、人々は、追われているのか、と別の不審をおぼえる表情になった。

掠めて行く迅さは、おそろしいくらいであった。

騎馬は、あっという間に、茶屋の前を駆け過ぎて行った。

於与里は、はっとなった。

それは、顔十郎にまぎれもなかった。

於与里は、あわてて、茶屋をとび出した。

騎馬の駆け過ぎた路上に、むすび文が落ちていた。

披いてみると、

「わがいとしい妻どのへ

亭主があの世へ行き申したならば、黒姫島の十万両は、そなたの自由じゃ。されど、敵は、五万と襲うて参るほどに、くれぐれも要心されるべし。十万両をせしめたならば、世の貧しい人々へ頒ち与えて、後生を願うが、正しい道と存じそろ。さらば——

鼻の亭主より」

そう走り書きしてあった。

於与里の胸に、はじめて、純粋に疼くものが生れた。

——あの人を、死なせては、ならぬ！

於与里は、心で、叫んだ。

騎馬は、まっしぐらに、ゆるやかな坂道を、駆け下って行った。

やがて、普化僧の群の後方に——とある曲り角をまわって、躍り出た時、馬上から、乗り手の姿は、消えていた。

にも拘らず、馬は、せなかにその人を乗せていたと同じ速力で、疾駆していた。

普化僧たちは、もとより、乗り手をうしなっている騎馬を、かえりみて、怪訝に思いつつ、身をかわした。

馬は、真一文字に、左右にわかれた普化僧のあいだを、駆け抜けた。

刹那——。

先頭に立っていた一人が、血煙りをあげて、のけぞった。

乗り手は、馬の胴にかけた黒い腹まきの中に、吸いつくように、身をかくしていて、駆け抜けざまに、先頭の者を、斬ったのである。

斬られたのが、統率者であった。

普化僧に化けた公儀隠密団が、これからおもむく場所を知っているのは、統率者一人だけで

あった。

顔十郎は、小田原の江戸口で、早飛脚から、忍び筒を受けとっている。

忍び筒には、佐野十太夫の手紙が入っていたのである。

それによれば——。

このたびの末松家騒動が、大目付浅野図書のかぎつけるところとなった。それというのも、末松藩江戸家老瀬良頼母が、わが身の危険をさとって、ひそかに、浅野図書に、救いを乞うたためである。

浅野図書は、直ちに、末松邑久守の捜索方を、町奉行に依頼するとともに、隠密の一団を、備前にむかって、発足させた。

隠密たちを、途中で、襲うて、のこらず、斬り殪すことは、もとより不可能だが、さいわい、その行先と目的を、図書より打ち明けられているのは、指揮をとる黒辺某だけである。黒辺某は、神道無念流の達人で、一騎討ちでも、容易に斬れる対手ではない。なんとか、工夫あって、討ちとってもらいたい。自分の方は、邑久守を、町方役人などに、渡すようなへまは、絶対にせぬ故、安心されたい。

以上のような内容であった。

一読した顔十郎は、おのれの予感が的中したのに、にやっとしたことであった。

で——。

この奇抜な襲撃方法をえらび、見事に、黒辺某を仕止めたのであったが……。

敵は、並の武士ではなかった。

次の瞬間。

数本の手裏剣が、同時に、馬腹めがけて、飛び来った。

その一本を肩に受けた顔十郎は、鞠のように、はねて、街道わきのくさむらへ、ころがった。

「おっ！　顔十郎！」

一人の隠密が、驚愕の叫びを発した。

曽て、顔十郎とともに、働いたことのある男であった。

「なにっ！　顔十郎だと！」

公儀隠密で、その名と腕前を知らぬ者はなかったのである。

顔十郎は、のっそりと、くさむらに立つと、肩に刺さった手裏剣を抜きとってから、

「やあ！」

と、笑顔をみせた。

「貴様、何の理由で、黒辺殿を斬ったぞ？」

「理由を、ここで述べるのは、面倒くさい。敵にまわったことだけを、みとめておいて頂こうか」

問答は、それだけで、足りた。

統率者を、一瞬裡に討ちとられた隠密たちは、後日弁明の余地のない屈辱感ゆえに、野獣のような獰猛性を発揮させることになった。

対手が、曽ての仲間であった顔十郎であることにも、闘志をあおられた。

一斉に、刀を抜きつれるや、草を蹴って、顔十郎に、殺到して来た。
顔十郎は、くるっと、背中を向けるや、脱兎のごとく逃げ出した。
深傷ではなかったものの、血を流している以上、体力の消耗は早い。顔十郎は、一挙に襲いかかられて、これを斬りはらう愚をさとったのである。
敵は、隠密である。集団による攻撃について、充分の訓練を積んでいる。
殺到のしかたは、一見各個ばらばらとみえて、実は、整然たる陣形をたもって、水ももらさぬ巧妙な包囲策を用意しているのであった。
顔十郎は、あっという間に、半町あまり駆け下って、そこで、自らもんどりうって、ころがった。
頭上を、手裏剣が、三、四本、掠めすぎた。
この躱(かわ)しぶりは、いわば、霊感的なものであったといえる。
はね起きざまに、一刀を、びゅっと、横薙いだ。
その白い閃光をあびて、一人が、よろめいた。
顔十郎は、立つやいなや、さらに、一人を、まっ向から、斬り下した。
「おっ！」
「う、うっ！」
叫びと、呻きと、刃音と、倒れる音と。
撒き散る血飛沫(ちしぶき)の下で、それらが、殆ど同時に起った。

ふたたび、顔十郎は、走り出した。
例によって、恰好のいい走りかたではないが、その迅さは、青嵐が吹くに似た。
とある地点で、また、ころんだ。
追手のはなった手裏剣は、むなしく、宙を飛んだ。
はね起きざまに、顔十郎の突き出した白刃にむかって、一人が、それをのぞむがごとく、おのが胸を与えて、びゅっと血を噴き出させた。
顔十郎は、抜きとるが早いか、横から跳びかかって来た悪鬼のような形相の者へ、
「とーっ！」
山気をつらぬく気合とともに、すりあげの一颯を送った。
頤を割られて、のけぞる姿を、みとどけるいとまもなく、顔十郎は、三度び逃げ出した。
――もう、いかんな！
途中で、ふっと、微かに、絶望感が、脳裡を掠めた。
顔十郎は、こんどはもはや、ころがる気はなかった。
行手は、断崖であった。
そこまで、追いつめられれば、こんどこそ、堂々と、闘わねばならなかった。
とある高い松の木に来て、それを楯にするかのごとく、くるっと向き直った顔十郎は、同時に、追い迫った一人を袈裟がけに斬りすてておいて、地を蹴った。
べつに忍びの修業をしたわけではないが、必死のこころみは、みごとに成功して、九尺ばかり

高処の枝へ、片手で、ぶらさがるや、一廻転して、つッ立った。

そして——。

こんどは、逆に、懐中に用意した手裏剣を、おそろしい迅さで、眼下の敵めがけて打ち込みはじめた。

目を、肩を、胸を、やられて、敵陣は、たちまち、乱れた。

闘う能力をのこした者を三名のこして、はじめて、顔十郎は、ひと息ついて、額の汗を手の甲でぬぐった。

「お主たち、どうだろう、ここらあたりで、休戦にしては——」

そう云いかける声は、凄絶な血闘を演じた者とは思えぬ明るいひびきをもっていた。

妖　刀

一

——これは、いかんな！

疾駆する馬上で、顔十郎は、ふと、不吉な予感を、おぼえた。

高熱が発していたのである。

箱根山中で、手裏剣を受けた肩の傷口から、どうやら、毒が入ったらしい。手裏剣に、毒が塗ってあったのかも知れぬ。

手当をするいとまもなく、逃走をつづけて来た顔十郎が、それと気がついたのは、吉原を駆け過ぎる頃であった。

妙に五体が、けだるくなり、四肢から力が抜けて来たのである。

富士川を、一気に、馬で乗り越えたのが、いけなかったようである。

蒲原に達した時、熱が発した。

しかし、休息してはいられなかった。追手も、躍起になって、馬をとばして来ている筈であった。

顔十郎は馬腹を蹴って、薩埵峠を、一散に過ぎようとして、にわかに、烈しい眩暈におそわれてしまった。

薩埵峠は、旅人には、不吉の場所として知られる。里人の迷信で、「さった」の詞を忌み、嫁入の行列など、絶対に、この峠を越えなかった。

大田蜀山人が、この迷信をわらって、

「山の神去った峠の風景は、三くだり半に書きも尽くさじ」

と、詠んだものである。

山路は、険しいので、迷信も手つだってか、峠下の海辺沿いに、便路が設けられていて、旅人の殆どは、そこを通って行く。

倉沢といい、波際の巌上に、掛茶屋数軒がならび、鮮魚や栄螺の壺焼きで、一酌をすすめる。

沖合の眺めは、美しいのであった。

顔十郎は、わざと、不吉の峠をえらんだ。

峠の頂上に達した時、体力が、尽きた。

「鼻の顔十郎、熱には勝てぬ」

軒のかたむいた阿弥陀堂の前で、落ちるように、地上へ降りると、

「よう、走ってくれた。もどってもよいぞ」

頭をたたいてやっておいて、堂内へよろめき入ると、そのまま、死んだように、動かなくなった。

阿弥陀三尊が、薄くらがりの中で、顔十郎の寝姿を、じっと見戍っていた。

それから、どれくらいの時刻が、過ぎたろう。

顔十郎は、ふっと、意識をとりもどした。

額に、濡れ手拭いが、あててある。

からからに干いた口腔内に、なにやら、ひどくにがいものが、含ませられている。薬のようであった。

薄目をひらいた顔十郎は、かたわらに、一人の男を見出した。

抜きはなった白刃を、食い入るように、凝視しているのであった。白刃は、箱根山中で、十余人を斬った顔十郎の差料であった。

——妙な男だな。

顔十郎は、ただ、ぼんやりと、そんな印象を受けた。

熱で狂った目で視るせいではなく、たしかに、奇妙な顔つきの、しかも、子供のように小さな目鼻をもった男であった。醜くはない。どちらかといえば、愛嬌のある造作である。

装は、町人であった。

顔十郎の視線を、感じて、男は、顔を向けると、

「たくさんの人をお斬りなされても、刃こぼれひとつ、ありませぬな」
そう云って、にこにこした。
あの血みどろの闘いを、目撃していたに相違ない。
「おぬしの含ませてくれた薬は、効くな」
顔十郎は、微笑をかえした。
熱は、かなり下っていた。
「一昼夜も、ねむりつづけておいでなされば、加減もよくなりましょうわい」
「一昼夜？　わしは、そんなに、長いあいだ、ここに倒れていたのか」
「まずまず、安心でございまするわい。一時は、おからだに、斑紋が浮いて、もういけぬ、と思いましたぞ。常人なら、とても、たすからぬところでございましたな。よほど、からだを、きたえておいでなさいます。……それにしても、途方もない刀を、所持しておいでございます」
「おぬし、何者だな？」
「そのおたずねが、てまえにとっては、いちばん、苦手でして――」
「なぜだ？」
「てまえにも、自分が何者か、よくわかりませぬな」
「莫迦なことを云ってはいかんな。自分で自分がわからぬ人間が、どこにある」
「それが、事実だから、しかたがありますまい。……目下の稼業は、さよう、盗賊と申上げておきましょう。せっせと、刀を集めて居ります。欲しい刀は、お大名の屋敷や、豪家の倉などにあ

りますので、金でゆずって頂くわけには参りませんので、しかたなく、盗賊の真似をしなければならぬのでございますな」
「わしの刀が、欲しゅうて、尾けていた――そうか？」
「その通りで――」
男は、にこにこし乍ら、頷いてみせた。

二

「わしの刀が、途方もない、と云ったが、別に、吟味して、差料にしたしろものではないぞ」
顔十郎は、起き上ると、重い頭をふった。まだ、ふらふらしていた。
「柳原のがらくた店にころがっていたのを、斬れそうだと思って、たった一両でもとめた無銘刀だ」
「旦那、これが、千子村正だと申上げたら、どうなさいます」
「冗談だろう」
「いえ、てまえの目に狂いはありませぬよ」
男は、確信をもった口調で、云った。
「村正なら――」
顔十郎は、笑って、云った。

「所持しているおれが、いずれ、のろわれて、ほろびることになるな」

この時代にあっては、千子村正は、妖刀という観念が定まっていて、心得ある士たちは、佩刀にはおろか、家の中に置くのも忌んでいたのである。

村正が忌まれたのは、徳川家に祟ったからである。

家康の祖父二郎三郎清康は、重臣阿部大蔵大輔定吉の嫡子弥七郎正豊から、誤解されて、斬られて、わずか二十五歳で、あえなくなった。弥七郎の用いた刀が村正であった。

それから十年後。

清康の嫡子広忠は、二十歳になり、岡崎城の主となっていた。某夜、ふかい睡りに入っているところを、突如、斬りつけられ、太腿に衝撃をうけた。咄嗟に、数廻転して、第二撃を躱した広忠は、曲者を、一瞥して、仰天した。

家臣の岩松八弥であった。三河譜代の忠義の一人で、家中きっての腕前であった。片目であったが、戦場における活躍はめざましく、片目出現ときいただけで、敵兵は逃腰になった。

広忠は、この忠義の家臣が、なぜ、寝所に踏み込んで来て、斬りつけたのか、わけがわからなかった。ひどく酩酊している様子で、まなこがつりあがっていたが、酒に心を奪われるような八弥ではない筈であった。乱心したとしか、思われなかった。

股肱の植村新八郎が、かけつけて来て、仕止めたが、八弥は、なんの抵抗もせず、案山子のように、斬られた。八弥の摑んでいた刀が、村正であった。

広忠の長子家康は、幼い頃から、今川家の質子となって、武人としての苦難をつぶさになめて、いかなることにも、氷のように冷静であるべく、己をきたえたが、村正という刀だけは、きらった。祖父や父を斬った刀に対する憎悪は、脳裡に刻みついていたのである。阿部弥七郎も片目八弥も、もし村正を帯びていなければ、あのような狂気と化さなかったであろう、と思われてならなかった。

天正七年、家康は、織田信長の脅迫によって、泪をのんで、長子信康に死を命じた。服部半蔵と天方山城守通興が使者となって、遠州二俣におもむいた。

信康は、山城守に介錯をたのみ、おのが佩刀を与えた。それが、村正であった。

その報告をきいた家康は、沈思ののち、

「村正は、当家にとって不吉じゃ。のこらず、とり棄てよ」

と、命じた。

関ヶ原の合戦において――。

織田河内守長孝は、石田三成方の戸田武蔵守重成とわたりあって、首級を討ちとった。

家康は、河内守長孝を、高名比類なし、とほめて、一千石を加増した。その時、近臣が、かたわらから、言葉を添えた。

「河内守の槍は、武蔵守の兜の鉢形を左から右へ、突き通したのでございますが、いささかも、刃損じなき由にございます」

家康は、長孝に、その槍を、持参させた。

鞘をはらって、視ようとしたとたん、どうしたのか、家康は、それを取り落してしまった。は

ずみに、右手を傷つけた。

家康は、眉宇をひそめて、

「これは、村正ではないか」

と、云った。

控えていた長孝の父の織田有楽斎が、

「いかにも、村正でござる」

と、こたえた。

家康は、不快げに、

「当家に随身する者は、村正をふるって功名を挙げても、よろこびとはせぬものぞ」

と、云いすてた。

長孝は、すすっと進んで、槍を把るや、脇差を抜きはなって、まっ二つに斬った。

村正は、しかし、家康が亡きのちも、徳川家にしばしば祟った。

駿河大納言忠長が、大逆の罪を蒙って、自刃した時、用いたのも、村正であった。

村正が、妖刀として名高くなった頃から、剣相が流行りはじめた。

剣相というのは、刀剣の鑑定ではない。人相や家相と同様、その吉凶をうらなうことである。

もちろん、剣相術は、ずっとむかしから、あった。迷妄のはなはだしい国柄だけに、何事につけても日や方角の吉凶を観たくらいであるから、当然、士が帯びる刀について、吉凶を云々したのは、当然である。

室町初期に著された「観智院本銘尽」には、天国、安綱、月山などは主人をきらい、菊作は不浄を消す、などと記されている。

刀の祟りを鎮めるために、銘のまわりに、ボロンという梵字を、持主の年齢の数だけ刻むことなども、室町時代から、行われた。

剣相術が、大きな権威をもって、体系化され、流派を生じて、流行ったのは、江戸時代に入ってからである。この流行に、村正という妖刀が、重大な役割をはたしたものである。

剣相術の原理は、陰陽五行説と占星術の応用であった。

焼刃に、日や月の形をした飛び焼きがあれば、大吉の宝剣である。焼刃に逆足が入っていれば、物事が後もどりする凶相。焼刃に乱れ足がそろっていれば、家が安泰である、とか——。

人工衛星時代でさえ、なお、日の吉凶、年の運勢、方角の善悪など、大まじめでうらなわれている。科学未発達の時代において、剣相が信じられたのも、当然である。

殿中刃傷の血刀にも、村正が多かった。刃傷を決意すると、わざわざ、村正をさがしもとめたのかも知れない。

天明四年三月、田沼山城守意知を、江戸城桔梗の間に襲った新番士佐野善左衛門政言の刀も、村正であった。

それから十年後、松平外記忠憙が、殿中において、朋輩を斬りまくった刀も、村正であった。

外記は、松平頼母忠順の嫡子で、御書院番であった。御書院番の勤務は、全員が、星順をもって勤める内規であった。ある時、星順をもっては、古番だけにしよう、という提案がなされた。

これは、裏がえせば、新番は、星順によらず、無制限に使おう、という古番たちの横着なこんたんであった。

これを看破した外記は、断乎として反対して、この案をつぶしてしまった。古番たちは、外記を憎んで、爾来ことごとく、外記を阻礙した。

外記誹謗の急先鋒は、安西伊賀之介という男であった。伊賀之介は、上野の花見の折、座光寺玄番の娘を見そめて、即座に申込んだが、すでに、外記との婚約がととのっていた。伊賀之介は、赤恥をかいた遺恨を、胸中にくすぶらせていたのである。

外記は、弓術と馬術に長けていた。将軍家の騎射上賀にも、名誉の射手を仰付けられたことも、一度や二度ではなかった。そのことも、朋輩の反感を買っていた。

文政四年春の追鳥狩に、外記は、拍子木役を命じられた。朋輩たちの反感は、絶頂に達した。

拍子木役とは、追鳥狩における勢子の総指揮者のことである。はじめに、この役は、曲淵大学という御帳掛が、任じられていたが、にわかな眼病のために辞退したので、代役として、弱年の外記が任命されたのであった。

その予行演習となるや、朋輩たちは、勢子をそそのかして、わざと遅刻させたり、命令をきかせなくしたりして、とうてい、外記が、役を勤められぬようにした。そればかりか、外記の鞍のあぶみや拍子木を隠したり、弁当に馬糞をつめる悪戯までやった。

外記は、無念の泪をのんで、病気を理由に、拍子木役御免を願い出た。

駒場野における追鳥狩は、将軍家親臨のもとに滞りなく終了した。

翌日、蒼白な顔を俯向けに登城した外記は、書院番休息所に、終日坐っていた。

下城時刻になった頃あいであった。

書院番部屋へ、外記は、幽鬼のように、音もなく、すっと入って来た。

帳簿をつけていた伊丹甚四郎は、それに気がつかず、不意に、濡れ手拭いをはたくような音がしたので、顔を擡げた瞬間、眼前に、となりの本多伊織の首が、ごろんところがるのを視て、悲鳴をあげた。

間部源十郎は横臥しているところを、頸根から肋下まで斬り下げられた。神尾五郎三郎も、同じく横臥していたが、我破とはね起きて、逃げようとするところを、背後から割りつけられた。

戸田彦之進は、深手を負いつつ、小窓の障子でふせいでいたが、二の太刀で、仆れた。沼門右京は、外記を、素手でとり押えようとして、一刀のもとに、斬り伏せられた。

その外の者は、厠やら縁の下やらへ、逃げ込んだ。井上政之助は、無腰のまま、袴もはかずに、わが家まで逃げ帰った。

外記は、安西伊賀之介をとりにがした無念を口にもらしつつ、血刀へ懐紙をまきつけて、おのが腹に突き立てた。

その刃傷刀が、村正であった。

三

「この刀が、村正と判る剣相が、あるのか？」

顔十郎は、だるそうに、ひとつ、背を反らしてから、訊ねた。

「左様。村正には、このように、焼刃の乱れと乱れのあいだの刃が、狭くなりまして、焼刃が消えかかって居りますな。これを、山形流では、不吉として、祝儀の席には、さして行ってはならぬ、といましめて居るのでございます。それから、ここ——鍔もとの焼刃が、大きく乱れて居るのこそ、村正の特徴でございます。これは、小笠原流によれば、佩用者は高慢になり、主君に無礼を働く、と忌みきらいます。それに、この村正には、まことに不吉な星と疵が、三つ四つ、ついて居りますぞ」

「どんな疵だな？」

「横死の星、為すことみな不運となる疵。……ごらん頂きましょう。この切っ先についている三つ星は、取り放し星、と申して、凶中の大凶。勝負において、ついに、最後に、敗れる星でございます」

その刹那——。

白刃は、男の手から、顔十郎の手に、移った。

あまりの迅業に、男は、きょとんとなった。

顔十郎は、鞘に納めて、立ち上ると、腰へさした。

「おぬし、なんという名だ？」

「へい。徳兵衛と申します」

「看護してくれて、忝じけない。いずれ、また、めぐり会う時があろう。その節は、恩にむくいることもあろう」

「旦那。わるいことは、申しませぬ。その村正は、てまえにおゆずり下さいまし。代りに、てまえが、大吉の名刀を、さしあげましょう」

「おぬしにゆずれば、おぬしが祟られるのではないかな？」

「いえ。てまえのような下賤な者には、村正は祟りなどいたしませぬ」

「さあ、どうかな」

顔十郎は、街道へ出た。

徳兵衛は、のこのこ、跟いて来た。

「わしが、ゆずるまでは、離れぬつもりか？」

顔十郎は、ふりかえって、笑った。

「どうも、てまえは、いったん欲しゅうなりますと、もう、やみくもに、是が非でも、と気ちがいになります」

「わしが昏絶しているあいだに、盗めばよかったのだ」

「所持しておいでの方が、災難に遭うておいでの場合は、お救いしてからでないと、村正は、頂

戴できませぬ」
「律儀な迷信だな。では、勝手に跟いて来て、隙をうかがって、盗むがよかろう」
「そうさせて頂きます」
——奇妙な盗人だ。
顔十郎は、のそのそと、歩きつづけた。
峠を下って、海に沿った地点に来た時、
顔十郎は、歩き乍ら、
「徳兵衛、村正は、もう、おぬしに祟っているかも知れぬ」
と云った。
「ご冗談を——」
「冗談ではない。かぶりを振ってみるがいい」
「かぶりを——？」
徳兵衛は、怪訝な面持で、云われた通り、首を横に振ってみた。
とたんに、髷が、ぽろっと、地べたへ落ちた。
「はっはっは、徳兵衛、おぬしは、阿弥陀堂を出た時から、切られた髷をのせて、歩いて来た。祟りだのう」

贋宮本武蔵

一

東海道江尻。
江戸へ四十一里半。京へ八十三里二十一丁。
五十三次のうちでも、最も気候和順の地である。ここから、竜華寺に上れば、富士山を望む絶好の丘陵。滝沢馬琴は、その「玄同放言」で、よくこれを、旅客に案内している。
巴川に架けられたのを、稚児橋という。川下へ五、六丁下れば、清水港。三保の松原の名所に、いたる。
三保神社、羽衣の松など、謡曲に舞踊に、あまりにも有名である。このへんを、有渡郡といい、有渡山、有渡の浜の称がある。
浜辺には、老松が繁茂して、日夜、風声が絶えない。某歌人によって、

役に立たで年を経るこそうれしけれ
有渡の浜なる松の大木

という歌が詠じられている。「うどの大木」の俚諺は、ここから起ったか。

宿はずれの立場茶屋で売る桶鮨に、道中有数の美味を誇っていた。

顔十郎は、盗賊徳兵衛をともなって、その立場茶屋で、憩うていた。

つけ髷でごまかしている徳兵衛は、べつに顔十郎の悪戯に腹を立てている風もなく、従者然とした顔つきをしていた。

「旦那、村正というのは、いったい、いつ頃の刀工でございましょうかね？」

「不明だな」

顔十郎は、かるいあくびをして、こたえた。

「第一、村正というのは、どうも一人ではないようだ。三人ばかり居るようだな」

「ご冗談を――」

徳兵衛は、信じようとはしない。

村正は、たしかな年代はつまびらかでないが、応永の頃――すなわち、室町初頭の刀工のようであった。

俗説によれば、村正は、五郎入道正宗の弟子になっている。

秋の日昏れに、頭に白髪をいただいた老人が、桑名街道を、駕籠に乗って、通りすぎようとして、ふと、鎚音をきいた。

「この近くに、刀鍛冶がいるのかな？」

老人は、駕籠昇きに、訊ねた。

「村正という刀鍛冶が居りやす」

「ほう、そうか。みごとな鎚音じゃ。刃が冴えて、斬れ味はよいであろう。一流に相違あるまいが……名刀にうちあげるには、いま一息の工夫が足らぬようじゃ」

と、呟いた。

老人を、旅宿に送りとどけておいて、ひきかえして来た駕籠昇きの一人は、村正の許に立寄って、老人の言葉をつたえた。

村正は、矢庭に、おのが作をひっ携げると、家をとび出して行き、旅宿に至り、老人の部屋にふみ込んで、

「鎚音で刃切れがおわかりとは、鋭い神経をお持ちだが、工夫が足らぬとは、いかに？」

と、迫った。

老人は、微笑して、

「鎚音が、当方の胸に、針でも刺さるように、ひびき申したでな」

と、こたえた。

「それが、いかぬ、と申されるか、お手前は何人か？」

「名もない刀鍛冶でござる」
「さらば、そのかたえの刀は、自作でござろう。勝負つかまつろう」
村正は、威丈高に、うそぶいた。
老人は、迷惑だと、かぶりをふったが、村正は、肯かなかった。
旅宿の裏手に、小川が流れていた。
村正と老人の刀が、刃を上流に向けて、立てられた。
幾枚かの木の葉が、流れて来た。
どういうものか、木の葉は、老人の刀の前に来ると、すうっと避けてしまった。一枚も、刃にふれなかった。したがって、切れ味を見ることはできなかった。
それにひきかえて、村正の刀には、木の葉は吸い込まれるように寄って来て、触れるか触れないうちに、ぱっとま二つになって、左右へ散った。幾枚が来ても、同じことだった。
「これでは、勝負にならぬわ！」
村正は、せせらわらった。
老人は、微笑して、
「剣というものは、斬れることのみをもって貴しとせぬ。邪悪を、遠ざける徳をそなえてこそ――」
と呟くように云った。
「小ざかしい説法を――」

村正は、老人を睨みつけた。
その折、街道上に、人々の騒ぐ音がきこえた。
見れば、一匹の大きな赤犬が、躍り狂って、人々を逃げ散らさせていた。と見るうちに、こちらに向って、疾駆して来たので、村正も老人も、それぞれ、おのがきたえ上げた刀を持った。
それは、あきらかに狂犬であった。
村正は、まずおのが刀の冴えを示すべく、老人より一歩前へ出て、狂犬めがけて、一颯を振りくれた。
手許が狂って、空を搏った隙に、狂犬は、はねあがりざま鍔もと近くの峰を、がっと噛んで、首をひと振りして、村正の手から、奪いとった。
瞬間――老人が、すっと一歩出て、切っ先を、狂犬の鼻さきへ、つき出した。
狂犬は、たちまち、村正の刀をとり落して、尻尾を垂れると、その場へうずくまってしまった。
老人は、五郎入道正宗であった。

二

「旦那、てまえは、もう、あきらめました」
徳兵衛は、云った。

「なにをあきらめた？」
「お腰の村正を頂戴することでございます」
「あきらめんでもよかろう。隙があったら、遠慮なく奪ってくれ」
「いえね。この村正は、どうも、旦那にだけは、祟らないような気がいたしますよ」
「さあ、どうかな。試してみなければ、わからんな」
その時、不意に、背後から、
「それがしが、試して進ぜようか」
と、声が、かかった。
破れ衝立があって、その蔭の畳敷きに、一人の武士が、寝そべっていたのである。
総髪で、黒羽二重に小倉の袴をはいた大兵の人物であった。携げた差料は、三尺余の長剣であった。
いかにも、兵法修業を積んでいて、無敵の気概を誇っている様子であった。
「それがしは、作州浪人宮本武蔵政名」
大真面目で、そう名のった。
徳兵衛は、二百余年前の達人の名をぬすんでいるこの剣客に、目を瞠った。
顔十郎の方は、無感動な面持で、見かえしていたが、
「お手前の佩刀は、なんでござろうかな」
と、訊ねた。

「葵下坂康継」
贋宮本武蔵は、明快にこたえた。
どうやら、それも、でたらめのように思える。
下坂康継は、村正と反対に、徳川家康から、惚れ込まれて、中心に葵紋をきることを許され、康の字を賜った刀工である。
贋武蔵は、顔十郎が村正を帯びているときいて、咄嗟に、その嘘を思いついたのかも知れぬ。
「よろしかろう。ひとつ、立合い申そうか」
顔十郎は、あっさり、承知した。
「お主、流儀は？」
「正しく学んだことが、一度もないので、流儀は、ないとおこたえするよりほかはありませんな。お手前は、宮本武蔵氏だから、二天一流でありましょうな」
「左様、二天一流とは、二刀の法。曽て備後鞆津を遊歴の際、海辺の農民らが、夏の炎田に水争いがあり、それがしは、滞留した庄屋に援助をたのまれ申した。農奴らを対手に、真剣を用うのは、大人気なし、木太刀を片手に警戒いたした。ふと、路傍に、櫂があるのを見つけて、それを左手に執って、待ち受けているところへ、一群の土民が、得物をかざして押寄せて参った。されば、と心得て、それがしは、左の櫂で、敵どもの得物を受けとめて、右の木太刀で撃ち伏せ、一人のこらず地べたに伏さしめ申した。二天一流は、その時思いついて、工夫研究して、成ったもの。御覧に入れ申そう」

「拝見つかまつる」
顔十郎は、立ち上がった。
徳兵衛が、そっと、袖をひいたが、顔十郎は、知らぬふりをした。
徳兵衛には、対手が、狂人の部類に入る、と思われてならなかったのである。
場所は、有渡の浜辺が、えらばれた。
おだやかな秋の陽ざしの盈ちた午さがりであったので、老松の林には、人影が、かなり見受けられた。
顔十郎は、徳兵衛から矢立を借りて、懐紙に、
兵法試合事
仲裁御無用
としたためて、臥竜と名称をつけられそうな砂匍いの老松の幹へ、小柄で止めた。
「さて――」
顔十郎は、対い立つと、贋武蔵に、
「立合いにさき立って、ひとつ、相談がござる」
と、云い出した。
「なにか？」
贋武蔵は、もう決闘を開始している気組みで、全身に剣気をみなぎらせ、眼光を鋭いものにしていた。

「お手前の葵下坂と、それがしの村正を、交換いたしたい」
顔十郎は、平然として、そう申出た。
松樹わきに立っていた徳兵衛は、それをきくや、目を剝いた。
「ふむ――？」
贋武蔵は、一瞬、顔十郎のこんたんが奈辺にあるか、疑う表情になったが、
「よろしい。換えるぞ」
と、承知した。
「はてな？　旦那は、わしらより役者が一枚上のようだぞ」
徳兵衛が、呟いた。
顔十郎が、わざわざ、おのが生命を、その妖気みなぎる兇剣の下にさらすわけはないのだ。
「抛られい」
「よし、同時に――」
対峙の距離は、三間余あった。
双方とも、刀の柄に手をかけた。とみた瞬間、二本の白刃がひらっと躍って、宙を交叉して、過ぎた。
顔十郎も、贋武蔵も、敵から投げ与えられた白刃を、むずと摑んで、目を当てた。
顔十郎は、べつになんの感情も現わさなかったが、贋武蔵の方は、にやりとした。
一瞥して、素晴しい刀と看てとったのである。

びゅっと、ひと振り素振りをくれて、大上段にとり、
「参る！」
と、叫んだ。
宮本武蔵と誇称するだけあって、熟練した構えであった。満々たる自信があればこその大上段であった。
これに対して、顔十郎は、受太刀の八相に構えた。それも、直立させて肩にひきつけるのではなく、刀身を担ぐような、一見ぶざまな恰好を示した。
贋武蔵は、未だ曽て観たこともない奇妙な構えに、意外の念を催して、ひくく唸った。
木太刀か、しないの立合いならば、体当りで、敵の構えをみじんに砕く初太刀を入れることができる。真剣勝負では、一撃が、肝心である。
贋武蔵は、顔十郎の変った八相の構えに対して、容易に、一撃がこころみられなかった。ぶざまではあるが、その受太刀には、おそるべき技倆がひそめられているように、感じられたのである。贋武蔵は、それを看てとるだけの修練を積んでいたのである。

三

しばらくは——。
贋武蔵は、大上段にふりかぶって、満身からの気合を発して、恫喝をくれていたし、顔十郎の方は、これを風と受け流して、石像のように不動であった。
すでに、見物人は、数十人も遠巻きにして、固唾をのんでいた。
やがて、恫喝が無駄と知った贋武蔵は、大上段から中段に、白刃を直して、じりじりと、迫りはじめた。
贋武蔵は、機先を制して、勝利を一気に占める肚のようであったが、顔十郎の変形八相の構えに対して、どうしても術の施す隙のないのをさとるや、対峙の時間をかけて、体力の消耗もやむなし、と覚悟をきめ、じりじりと圧迫する戦法にかえたのである。
爪先を、砂に食い込ませ乍ら、一寸刻みに迫って来る敵に対して、顔十郎は、同じ速度で、あとへ退りはじめた。
要するに、贋武蔵は、戦法をかえるとともに、顔十郎がいかなる一流の太刀筋をかくしているかも、考えないことにしたようであった。
「敵の構え如何に頓着せず、立合うやただちに、手の内に斬り込んで、敵の腹部を突く兵法こそ、流儀を超えたる必勝の秘伝なり」
という極意は、しばしば、説かれるところである。
「ええいっ！」
猛然と、贋武蔵は、斬りつけて来た。
これは、肋一寸を見込んで、間合をとった一撃で、当然躱すであろう敵の腹部めがけて、その撃ち込み太刀を、一直線に突き出す術を用意していた。

しかし、顔十郎は、贋武蔵に、その術を使ういとまを与えなかった。
目にもとまらぬ迅さで、その撃ち込み太刀を、ぱあん、と刎ねあげておいて、一間余を跳び退ったのである。
「うっ——むっ！」
面に朱を刷いた贋武蔵は、奮然として、砂上を滑走した。
顔十郎は、さらに、一間を遁れた。
うしろの見物の群は、どーっとあとへ退った。
贋武蔵は、もはや、立ちどまることを知らなかった。
顔十郎は、退りつづける。
肉薄と退却と——砂上に描く足跡は、ゆるやかに彎曲する線を描いた。
見物人の目には、どう見ても、もはや、勝敗は、あきらかであった。
贋武蔵の肉薄ぶりは、いかにも兵法にかなった堂々たるものであったし、剣気が、かげろうのように、巨軀から燃え立っていたのである。それにひきくらべて、顔十郎の退却ぶりは、まことにぶざまな恰好であったし、ただ遁れるに懸命な気色としか受けとれなかった。
顔十郎は、尻端折りして、長い毛脛をむき出した風体だったのである。
ついに——。
顔十郎は、一札を小柄で貼った臥竜松の幹へ、背中を押しつけられるまでに、追いつめられた。

贋武蔵の面上に、残忍な快感が滲んだようである。
息詰まる数秒間が、経過した。
「やああっ！」
怒濤の中から躍りあがる巨鯨にも似た勢いで、贋武蔵は、顔十郎を、真向から、斬り下げた。
見物人の中には、血煙りを見るのをおそれて、反射的に、目蓋をとじたり、顔をそむけた者もあった。
血煙りは、上らなかった。
そのかわり、
ぱあん！
という鋭い焼刃のはじける音が、発した。
はっと、視線をはなった見物人たちは、贋武蔵が、臥竜松へ、ふかぶかと斬り込んでいるのを、みとめた。
そして、刀身が、なかばから折れ飛んでしまっているのに、唖然となった。
顔十郎はと視れば、いつの間にか、幹をまわって、そのうしろに、立っていた。まさに、風の迅さといえた。
「うぬっ！」
折れ刀をすてた贋武蔵は、脇差に手をかけた。
しかし、なかばも抜くいとまもなく、顔十郎から、ぴたっと、切っ先を、鼻さきにつきつけら

れた。

「士は、勝つも敗れるも、いさぎよくありたきもの――」

そう云って、顔十郎は、にやっとしてみせた。

顔十郎は、無腰で、もとの立場茶屋へもどって来た。

うしろから跟いて来た徳兵衛は、

「村正が折れるとは、おどろきました。まるで、折れるのを、ちゃんと見通しておいでなさったようだ」

と、云った。

顔十郎は、茶屋の婆さんに、地酒を所望して、ひと息に飲み干してから、

「徳兵衛、わしは、無腰では、道中できぬな」

と、云った。

「左様でございますな」

「一本、取って来てもらおう」

「へえ――？」

「但し、わしは、好みの刀でなければ、差料にせぬ。おぬしは、わしの好みを先刻承知の筈だな」

「お待ち下さいまし」

徳兵衛は、姿を消した。

顔十郎が、尻端折りの無腰姿を、府中宿へ入らせた時、徳兵衛が、とっとと、追いついて来た。

「へい、お待ちどおさまでございました」

さし出したのは、先刻まで顔十郎が腰に帯びていたのと、寸分こしらえのちがわぬ刀であった。

実は、これの方が、ずっと長い年月、顔十郎のからだにくっついて来たほんものの村正であった。

顔十郎は、徳兵衛が、昨夜泊った由井宿の旅籠で、すりかえたのを、ちゃんと知っていて、黙っていたのである。

徳兵衛も、今更、すりかえたとは白状しなかった。

この奇妙な二人組は、当分、はなれずに、肚の中をさぐりあい乍ら、道中しそうであった。

犬死

一

東海道は、鳴海宿から、尾張に入るが、道筋は名古屋に寄らず、宮に入る。

宮とは、熱田の宮という意味である。ここから、伊勢の桑名にむかって、海上七里を舟渡しとなる。但し、すこしでも、風が出ると、昼七つ過ぎからは、絶対に船を出さぬように、舟番所で、禁じていた。

この日も、船は出ないことになった。

顔十郎は、しかたなく、熱田神宮に詣でることにした。

熱田神宮は、日本武尊の草薙の宝剣を祀ってある古社である。織田信長が桶狭間へ出陣にあたって、当社へ詣でて祈念するや、白鷺二羽が、神殿より舞い出て、東方へ飛んだ、という霊験のことは、あまりに有名である。つまり、武運の神宮である。

徳兵衛を連れた顔十郎は、樹齢数百年を閲する森につつまれた境内を、のそのそと、歩いて行った。

神楽殿をまわって、拝殿へ向おうとした時であった。

「顔十郎ではないか」

不意に、頭上から、呼ぶ者があった。

仰ぐと、神楽殿の舞台のまん中に、どっかと大胡坐をかいた大兵の武士が、髯だらけの顔を、なつかしげに、ほころばせていた。

十余年前、江戸の町道場で、稽古をつけ合った真柄丹五郎であった。貧乏御家人の次男で、市井無頼になり下るか、それとも、上州へでも流れて、博徒の用心棒にでもなるよりほかはない身であったが、どういう風の吹きまわしか、この尾張藩の大普請奉行に見こまれて、養嗣子になる幸運を得た男であった。

丹五郎が、江戸を去ってからは、一度も、顔十郎は、会っていなかった。

「相変らず、髯だらけだな」

顔十郎は、笑った。

群を抜く大兵で、腕も立ったが、性格も豪放で、磊落であり、元服した時から、髯をのばしはじめて、誰人が忠告しても、絶対に切らなかった。

丹五郎は、大胡坐をかいたまま、

「お主も、相変らず、長い面をしているな」

と、高い笑い声をたてた。
「そこで、太神楽でもやるつもりか？」
「いや、人を待っている」
「では、わしは、詣でて来よう」
「顔十郎、詣でて来たら、ひとつ、おれのたのみをきいてくれ」
「なんだな？」
「おれは、昨日で、致仕して来た。勿論、養子返上だ。もとの御家人真柄丹五郎にもどった」
「どうしたのだ？　もうしばらく辛抱して居れば、大普請奉行になれるのではないか」
「千五百石、くそくらえだ。おれは、十年間、我慢した。もう、しびれがきれた。この尾張藩の奴らは、おれ一人を、毛虫のごとく、嫌悪し居ったぞ。どだい、この土地は、他国者を絶対に受け入れんところだ。おれのような人間は、なおさらだ。おれは、十年間、ざっと家中三百人と一度も挨拶を交して居らん」
日常作法の枠内で、事なかれ主義に生きることは、ひどく苦手な男であった。なにかある毎に、丹五郎は、家中の面々と、喧嘩をしたに相違ない。
大普請奉行といえば、事実上の重職で、専ら要害の防備工事を主宰する。近年、軽い中風の発作を起した養父に代って、丹五郎は、城廓の修理工事にたずさわったが、平常反目している人々から、陰険な邪魔だてをされて、ついに堪忍袋の緒を切ってしまったのである。
「丹五郎、お主が十年辛抱したということは、ほめた話ではないか。もう十年ばかり、辛抱せぬか？」

「莫迦を云え！　おれは、十年を無駄にしたのだぞ。あと十年無駄にしたら、おれは、なんのために生れて来たか、わからん。……まあ、いい、詣でて来い」
顔十郎は、拝殿に進んだ。
黙禱をおわった時、背後で、徳兵衛が、
「旦那、あのおさむらいは、果し合いをする模様でございますよ」
と、早口に告げた。
顔十郎が、視線をまわすのと、丹五郎が神楽殿から身を躍らせて、玉砂利上へ降り立つのが、殆ど同時だった。
裃姿の若い藩士が、そのむこうに立っていた。丹五郎は、その藩士を、待ちかまえていたのである。
「右門！　今日こそ、貴様の陋劣卑賤の根性に、この丹五郎の活殺剣をあびせてくれる。勝負せい！」
丹五郎は、殺気凄じい身構えになって、呶鳴りつけた。
先手物頭の任務のひとつである、卯の日の参詣をしに来た磯原右門は、思いがけず、真柄丹五郎に待ちかまえられて、色を失っていた。
「ム、無法な！」
血の気をひかせた顔面の筋肉を、恐怖で痙攣させつつ、磯原右門は、じりじりと、あとへさ

がった。

「なにが、無法だ！　貴様ら尾張大根の切干野郎どもの佞奸邪知に、十年間も堪えしのんだおれが、家中最下等の佞人である貴様を、まず、血祭りにあげてやろうというのだ。堂々と、勝負の場所をえらんでやったのを、おれの慈悲だと思え。この贋金張りの鯱鉾野郎め！　さあ、抜けっ！」

二

——この若い男は、武芸を何ひとつ、身につけて居らんな。

はなれた場所から見まもっている顔十郎は、そう看てとった。

過重視された公式日常の儀礼のみを完全に習得して、藩士の分度生活に満足しきっているに相違ないのだ。

「右門！　貴様も、戦陣においては先鋒をつとめる先手物頭の一人だぞ！　勝負がおそろしいとは、なんたる腰抜け！　……抜かんか！」

丹五郎は、一歩迫った。

右門は、反射的に、両手をさしのべて、

「私闘は、藩士として、ゆ、ゆるされぬことゆえ……」

「なにが、私闘だ！　武士の意地だぞ！　おれは、貴様を、尾張藩六千の馬糞武士の代表者として、勝負を挑んでやっているのだ。それが、受けられぬとは！」

「こ、ここは、聖域なれば、忍傷沙汰など……」

「たわけ！　この宮こそは、武勇をすすめる神の在すところ、天下に、これほど決闘するにふさわしい場所があるか」

「ま、待て！　そ、それがしとて、任務があり、妻子がある身——。果し合いを、こ、こばむものではないが、今日は……今日いま、ここで、というは、あ、あまりに無法と申しているのだ。明日——明日まで、待ってもらいたい」

必死の弁解は、しかし、丹五郎を、ますます、たけり立たせた。

「後日だと！　逃口上もたいがいにせい！　この真柄丹五郎は、もはや、この決意を、明日まで持越すほど、悠長にかまえては居れん！　問答無用！　抜けっ！」

叫びざま、差料を、抜きはらうや、大上段にふりかぶった。

右門は、自己擁護の本能で、一足引きつつ、抜刀した。

しかし、その構えの隙だらけなこと、血走って双眸にあふれる怯懦の色、呼吸の喘ぎ、腰つきのだらしなさ。

——これでは、勝負にならぬ。

顔十郎は、かぶりをふった。

「待った」

顔十郎は、のそのそと、対峙のまん中へ、入った。

「顔十郎、貴様には、検分をたのんだだけだぞ」

丹五郎が、叫んだ。

「いや、まあ、待て！　この御仁は、どうやら、単身では、闘う勇気がないらしい。どうだろうな。勝負を、明朝にのばしては――」

「明朝にのばして、どうするのだ？」

「幾人であろうと、助太刀をたのんで、ぞろぞろと、やって来てもらうのだな」

「おれは、犬死はせんぞ！」

「安心せい。この顔十郎が、一臂を貸してやる。十人や二十人は、引受けてやるが、どうだな！」

「ふうん――」

丹五郎は、鼻を鳴らしたが、

「よかろう。……おい、右門、一日だけ、生命をのばしてくれる。助太刀を百人も、たのんで来い。場所は、鳴海潟の砂地――宗良親王の歌碑の建っているところだ。時刻は、明け六つ。わかったか！」

右門は、その宣告に、頷いてみせた。

「よいな、右門、夜逃げなどするなよ！」

丹五郎に、せせら嗤われたとたん、右門は、別人のように昂然と、胸を張った。

「磯原右門、先手物頭として、三河以来の家門にかけて、違約はせぬ」

「ほう、急に、大きく、出て来居ったな」

「それがしが、一日の猶予を願うたのは、万が一の不測の場合にあたり、身のまわりを整理して

置いて、わが任務を継ぐ人に、当惑させないよう、また家人の狼狽を防ぐ準備に費すためであって、断じて、他意はない。……お主から、犬畜生よばわりされるおぼえはないが、廉恥を知る者として、挑戦されたからには、明朝は、堂々と、一人で参る。助太刀などは、たのみ申さぬ」

そう云いはなった。

たったいままでの、恐怖と怯懦で、顫えあがっていた者とは、到底思えない、毅然とした態度であった。

「たわけ！　貴様の、そのへっぴり腰の、大根抜きの構えでは、おれに、到底勝てんから、助太刀を五万とひきつれて来い、と云っている慈悲がわからんのか。虎口をのがれたら、たちまち、大きな口をたたきやがる。さっさと、帰って、女房と水盃でも交せ！」

丹五郎は、いまいましげに、吐きすてた。

遁れるように遠ざかって行く右門の後姿を見送っていた顔十郎は、徳兵衛を呼んで、

「尾けて行ってくれ。どういう行動をとるか、一晩、屋敷の外で見張りをたのむ」

と、命じた。

「かしこまりました」

徳兵衛は、はなれて行った。

顔十郎は、丹五郎と肩をならべて、歩き出し乍ら、

「どうも、あの男の様子は、面妖しいな」

と、首をひねった。

「なにが、面妖しい？」

「あの男は、まるで、刀の使い方を知らん。お主に、一太刀で斬られるところだった。それが、一日の猶予を与えられると、人が変ったように、傲慢な口をきいた。助太刀をたのまず、単身で来る、とうそぶいたぞ」

「ふん。百人もつれて来るにきまって居る」

「そうであろうかな？　もしかすれば、ほかに、こんたんがあるのかも知れぬぞ。丹五郎、要心した方がいいのではないかな」

「要心するも、くそもあるものか。一人で来ようと、百人で来ようと、斬り殺してくれることは、きまって居るんだ」

三

静かに、さわやかに明けた砂丘の、磯馴れの松のかたえに、自然石が一基。

鳴海がた汐の満干のたびごとに
　道踏みかふる浦の旅人

宗良親王の詠じた一首を、何人が刻んで建てたか。

いまは、鳴海潟という名称がのこっているばかりで、海は、遠くへ引いてしまい、砂丘が、白く、広い。

碑の前に、真柄丹五郎は、青く太い眉宇を挙げて、腕を組んでいた。白はちまきに白だすき、袴のもも立ちをとって、足袋はだし。いつでも、決闘できる姿であった。

顔十郎は、二間ばかりはなれた地点に、砂の上へ腰を下していた。昨日からの、妙な、もやもやとした予感は、なおつづいている。

丹五郎が、単純に、右門が助太刀多勢をひきつれて来るに相違ない、と信じて、闘志をわきたたせている様子が、どうも好人物すぎるような気がしてならないのだ。右門には、何か狡猾な罠をしかけるために、一日の猶予が欲しかったのではないか？　どんな罠か、見当もつかぬが、そういう予感は、はらっても消えそうもない。

徳兵衛の姿が、彼方に、急ぎ足に、現れたので、顔十郎は、立ち上った。

近づいて来た徳兵衛は、なにやら当惑げな面持で、

「一人で、やって参りました」

と、告げた。

「一人で――？　彼奴、度胸を据えたとは、見なおしたぞ」

丹五郎が、大きく頷いた。

顔十郎の疑惑は、ふかまった。

やがて――。

右門は、松林の中から、ゆっくりと、歩み出て来た。
丹五郎にむかって、二間の距離まで進み寄るや、一礼して、羽織をぬぎすてた。なめし革の襷を綾どっていた。
海を渡って来る朝陽を受けた横顔は、凛乎としたものだった。
——これは？
顔十郎は、烈しくとまどった。
その横顔には、剣の修業にうち込んだ者のみが示し得る鋭い気魄を湛えていたのである。
昨日、怯懦の色をあふらせた磯原右門と、これが、果して同一人なのか？
たしかに、外貌は磯原右門にまぎれもないのだが、その内にたくわえた心気は、どうしても、同一人のものではないのだ。
「いざ！」
その声も、右門の方から、さきに発しられた。
「応っ！」
丹五郎は、陽光に刃閃を生んで、ぴたっと中段上位にとった。
これに対して、右門は、つまさき前三尺に、切っ先を落した地摺りの構えを示した。
その構えで、双方ともに、画裏の人と化したように、微動もしなくなった。
凝視しつつ、顔十郎は、二度も三度も、肚裡で、呻いた。丹五郎よりも、右門の方に、はるかに、冴えたものが、感じられるのだ。

——わからん！
顔十郎は、右門が、昨日、わざと、おのが腕前をかくして、怯懦の芝居をみせた、としか考えられなかった。なぜ、そんな芝居を演じたのか？
もはや、しかし、いまとなっては、間に割っている時は、うしなわれている。
勝敗の決するのを待つよりほかに、すべはなかった。
両者は、ともに、その眼光を、対手の眉間の中点に射はなっていた。
秒を刻んで移る時刻は——両者の足もとから、影法師をすこしずつのばした。
「むっ！」
丹五郎の口から、ひくい唸り声が、もらされた。
——弓矢八幡っ！
丹五郎の顔面に、朱が散った。
すすっ……と出た。
——危い！
顔十郎が、声なく、叫んだ。
刹那——丹五郎の剣が、鶺鴒の尾のように、びっびっと、はねあがるや、
「ややあっ！」
満身からの気合を、火焔のように噴かせて、丹五郎は、砂を蹴って、躍った。
刃風を唸らせて、二条の白光が、宙に、きらめいて、交叉し——そして、元へ戻った。

両者の姿勢は、ほんのすこしだけ、構えを変えていた。

ものの五つもかぞえるあいだ、二刀は、その構えを持続していたが、やがて、丹五郎の姿勢が、徐々に崩れた。

にぶい音たてて、丹五郎のからだが、砂上に俯伏した時、右門は、刀を引き、正しく、頭を下げて、祈っておいて、踵をまわした。

出現してから、去って行くまで——その態度は、見事であった。

顔十郎は、大きく目を瞠いて、その後姿が、松林の中へ消えるまで見送ってから、丹五郎を、抱き起してみた。

ただ一太刀で、丹五郎は、事切れていた。

四

磯原右門は、屋敷の門の潜りを入った。

「お——お戻りなされた！」

老いた用人が、あわてて、玄関へ走った。

右門が、玄関に入ると、その式台に、同じ貌の男が、狂喜の表情で、待ちかまえていた。

待っていた方が、ほんものの磯原右門であった。

丹五郎を討って来たのは、双生児の弟左門であった。幼い頃、加賀藩の重臣の家へもらわれて行き、たまたま、二十年ぶりに、実家へ帰って来ていたのである。兄右門とちがい、左門は、加賀藩中でも、一刀流の名手として、きこえていた。

「左門！　殺ってくれたか。……あ、ありがたい！　礼を云うぞ！」

右門は、弟の手を把らんばかりにした。

左門は、むっつりとした表情で、奥へ入った。

座敷で、兄と対座して、左門の口から発しられたのは、

「兄上、切腹のご用意は、されて居らぬか？」

その言葉であった。

「な、なに？」

右門は、愕然として、形相を一変させた。

「弟を替玉にして、果し合いさせ、勝利を得たからとゆうて、ただ、悦んでいるのは、武士として、最もあさましいことに存ずる。兄上ご自身も、いさぎよく切腹されるが、武士道の作法でござろう」

「な、なにを申すか！　左門、わ、わしが、切腹するくらいならば、お前に、た、たのみはせなんだぞ！」

「それがしにおたのみにならなければ、兄上は、討たれていただけのこと。それとも、助太刀を八方にたのみまわって、大恥をかかれたか」

「左門、わ、わしを、脅すのか」

「脅しては居りませぬ。兄上がとるべき道はひとつしかのこされて居らぬ、と申し上げているだけです」

「なるほど、そうだったのか」

磯原邸内の出来事を、ひそかに目撃して来た徳兵衛から、報告を受けた顔十郎は、はじめて、合点した。

「丹五郎のやつ、とんでもない誤算をしたものだ。……やはり、犬死であったな」

消えた夢

一

備前国伊里。

ここには、寛文六年に、国主池田左少将光政が設けた閑谷聖堂がある。

池田藩の子弟たちの殆どは、この閑谷聖堂に学んで、士たる面目をととのえた。その伝統は、遠国にまでひびいて、各藩もこれにならって、学校を設けた。

幽邃という言葉は、この地のためにつくられたか、と思われるほど、三千巻の図書を備えて、若い学徒を聚めるに、まことにふさわしい、深い樹林と奇趣に富んだ巌壁と潺々たる流れを配した山渓であった。

秋風の渡るなかを、顔十郎は、のそのそと歩いて、その聖堂の門をくぐって行った。

目に痛いほど白い校庭は広く、北よりに建つ聖廟の甍が、高くそびえ、鴟尾をはねあげて、荘厳である。

聖堂の東には、光政を祀る芳烈祠があり、その東に、ひとつの塚が、椿樹をめぐらして、わだかまっている。光政の鬚髪歯爪が納めてある。

庭をすすめば、講堂。それにならんで、生徒の宿舎、図書倉、官吏講官の宿舎などが、つらなっている。

「ふむ――」

庭に立ちどまって、ひっそりとしずまった世界を見渡した顔十郎は、

「朝翠暮嵐のほか、復た親しむところなしか。同じさむらいでも、いろいろと育ちかたがある」

と、独語してから、講官が住んでいるとみえるひと棟へ、足を向けた。

それから、約一刻ののち、庭へ出て来た顔十郎は、頭をまわして、再びおとずれることはあるまいたたずまいを、眸子の裡におさめた。

会うた講官は、何処の何者とも知れぬ素浪人を、旧知のように、鄭重な態度で迎えて、所望するところを即座に合点して、図書倉に、案内してくれたのであった。

整然とならんだ三千巻のうち、顔十郎のもとめる一冊は、在った。

おそらく、江戸城内の文庫におさめられてあるその一冊は、最秘の朱印を捺されて、目付以下の手には把られない掟になっているに相違ない。げんに、元隠密佐野十太夫が、忍び入り乍ら、その一冊に目を通していないのである。

この閑谷聖堂では、生徒はもとより、外来の者にも、平気で、手に把らせるのであった。

その一冊というのは、徳川家のありのままの系譜を記録したものであった。家康がいかに執拗で陰険な奸策をもちいて、豊臣家を滅したか、また歴代の将軍が、どのような行状をなしたか、善も悪も、のこらず、記述してあった。

顔十郎は、千姫の生涯に就いての実録を読んだのである。

まさしく、千姫の最後の良人は、瀬戸内海の海賊の一方の首領、松木嘉門であった。

松木嘉門は、千姫を、江戸の館から拉致したのである。家康が最も寵愛した孫娘を略奪することは、豊臣家の臣たることを誓った嘉門の復讐の一手段であった。

嘉門をして、千姫を拉致させるに、力を貸したのが、「新十二段草子」を書いた小野お通であった。

嘉門は、しかし、千姫を、備前沖の小島へかくれ住まわせているうちに、心から愛した模様である。千姫もまた、はじめて、心も身も捧げる男を得たと察しられるくらしをした。

嘉門が、幕府の水軍に追われて、二百の部下とともに、琉球の方面へのがれてのち、千姫は、食を絶って、その安全を祈りつつ、逝っている。

末松家の記録によれば、千姫は、その一子が十五歳になって、元服し、末松邑久守に任じたのをみて、自分は離れて、黒姫島に移り住んだ、とある。これは、いつわりであった。

千姫は、まだ二歳にしかならぬわが子を、二人の郎党にあずけて、駿府へつれて行かせ、祖父家康に、たのんでおいて、黒姫島で、死に就いたのである。

自分が餓死することによって、家康から、その子に、ふびんをかけてもらおう、としたのである。

一方、嘉門は、ついに、日本には還らなかった。

この記録は、顔十郎を、満足させた。——やはり、調べというものは、尽さねばならぬものだ。

一人、微笑し乍ら、門をくぐって出て行こうとしたおり、

「もーし」

と、呼んで、追うて来る者があった。

さきほど世話になった講官であった。

総髪で、めくら縞の筒袖にたっつけをはいたこの学者は、五十年配であり乍ら、いかにも美しい童顔を持っていて、澄んだ双眸には、春風を宿していた。

「申しあげることを、ひとつ忘れて居りました」

近づいて来ると、微笑し乍ら、そう云った。
「なんでござろうかな？」
「お手前は、千姫に就いて、お調べなされましたな？」
「左様――」
「黒姫島に、渡ってみようとのご存念でしょうな？」
「ことのついでに、と思うて居りますが……」
「お止しになる方がよいか、と存じます。あの島に渡るには、これより方上浦に出て、虫明と申す浜から、舟を漕ぎ出さねばなりませぬ。その虫明には、松木嘉門の苗裔と称する郷士が居り、漁舟ことごとくを、その支配下に置いて居ります。うろんな者が、黒姫島に渡ろうとすれば、必ずこれを海上に襲うて、水底の藻屑にいたしまする。迷妄の伝説を信じて、黒姫島を、何者の足にも踏ませまい、と殆ど狂信の徒と化して居りますれば、おあきらめなさいませぬか？」
「ご忠告、有難くお受けいたしました」
顔十郎は、行くとも行かぬともこたえず、一礼しておいて、踵をまわした。

二

方上浦から虫明へ行き着くには、深い入江に沿うて一上一下する山道を、数里も辿らねばならぬ。

入江は、湖面に似て、小波も立たず、ねむったような静けさである。いくつかの小島が、遠近の濃淡をそめわけ乍ら、ひっそりと浮かんでいる。入江があまりに深いので、山道からは、水平線も見えず、それらの散在する小島がさえぎる沖あいを大きな湖口ともみせている。湾が、瀬戸内の航道からあまりにも遠いので、磯伝いの潮待船も、絶えて入泊することはないのであった。
顔十郎は、その山道を、かなり早い足どりで、ひろい乍ら、
――人間という奴は、どうして、こんな無駄な日を重ねて、生涯を終るのか。
と、なかば自嘲的になっていた。
たしかに――。
顔十郎が、はるばる東海道五十三次をこえて、この備前の僻邑までやって来たのは、なんの意味もないことであった。
顔十郎は、なんの意味もなかったことを、たしかめに行こうとしているだけであった。
ひとつの峠を越える毎に、ひとにぎりほどの平地があり、浜に面して、十数戸の貧しい人家が屯していた。
田畑らしいものも見当らず、その聚落の人々が、どうやって、口を糊しているのか、と思われた。砂地にひきあげてある二、三艘の小舟が、かれらの生命をつないでいるのであろうか。
顔十郎は、三つの村落を行き過ぎるあいだ、庭に延べた蓆に、ぺったりと坐った老婆が、黙々として、干豆の殻をむいているのを、見かけたばかりであった。

虫明は、この海に沿うた山のうちで、ひとつだけ、漆黒の怪奇な形をおびている山を越えなければならぬ、と閑谷聖堂の講官から教えられていた顔十郎は、やがて、三つめの村落を通って、とある峠上に立った時、

——あれだな。

と、前方の空を割っている一山へ、目を当てた。

黒衣山という。

なるほど、それだけが、墨汁をあびたように、異様な黒さであった。かたちも、けものが蹲ったような不気味さがあり、平地から突如として盛りあがった険しさは、他の山と起伏の様を異にした、孤独の趣きを示していた。

顔十郎は、黒衣山に入った。

鼻を衝くような急勾配の坂道であった。黒い松は、その上を掩うていた。

われにかえった時、いつの間にか、峰の一角に立ち、遠く、瀬戸内の水平線を視た。

——千姫は、この山を越えて、黒姫島へ行ったか？

二百年前の、一人の女の数奇な生涯の最後の道が、これであったか、と柄にもない感慨が、胸で湿った。

その時——。

顔十郎は、とある松の枝に、一本の簪が、突き立っているのを、みとめた。

——これは、於与里のものだ。

直感であった。

於与里が、何者かに拉致されて行った、と解釈できた。それを、あとから来るであろう味方に教えて、救いを乞うために、敵の目をぬすんで、この簪を突き立てておいた。

——気丈夫な娘だが、いささか、先走りしすぎるな。

顔十郎は、にやりとした。

深更——。

二つの黒影が、虫明の里の、海辺ちかくに構えられた宏壮な館の中へ忍び入っていた。

顔十郎と徳兵衛であった。

顔十郎が、昏れがた、山麓へ降りた時、物蔭から、ひょっこり、徳兵衛が、姿をあらわしたのであった。

顔十郎は、徳兵衛とは、兵庫の湊で、別れていた。

いつの間にか、先廻りして、そこで待ちうけていた徳兵衛に、顔十郎は、あきれたが、すぐ、合点した。

「徳兵衛、お主は、於与里の手先だったのか」

「ご慧眼、恐れ入りましてございます」

徳兵衛は、けろりとして、頭を下げた。

「実は、てまえは、於与里様のお屋敷に奉公して居りました中間でございましてね」

まだ二十歳であった徳兵衛が、貧しい御家人であったその家で、殆ど給金ももらわずに、仕えていたのも、於兎和と於与里の美しい姉妹がいたからであった。といって、姉妹は、まだ、五つと三つの幼さで、徳兵衛は、子守がわりに、母のない二人の面倒をみたのである。

姉妹の父が、二、三日の急病で逝き、一家は離散することになり、徳兵衛は、自分一人の腕で、なんとかして姉妹を、育てあげようとほぞをきめたものの、まだ二十歳の折助の非力では、どうするすべもなかった。

姉妹が、母方の遠縁にあたる家へひきとられて行って、またたく間に、十年が過ぎた。徳兵衛は、いつの間にか、神出鬼没の盗賊になっていた。しかし、美しく育った姉妹の前に現われた徳兵衛は、いかにも律義な商人であった。

爾来、徳兵衛は、姉妹に、蔭から、つくすことに、骨身を惜しまなかった。

姉妹が、末松邑久守邸へ、腰元として上ったのは、徳兵衛のすすめによるものであった。

徳兵衛は、美しい姉妹のどちらかが、邑久守の目にとまって、寵愛を受けるに相違ない、と計算したのである。その計算は、はずれなかった。姉の於兎和が、邑久守のなさけを受けた。

しかし、徳兵衛の計算は、それから先がはずれてしまったのである。

於兎和が懐妊するや、邑久守の嗣子をこの世に出すまいとして、江戸家老瀬良頼母は、これを毒殺してしまった。

徳兵衛が、その死をあやしんで、真相をさぐり、於与里は、仇討を決意した。その結果、偶然にも、於与里は、邑久守を討つかわりに、末松領のひとつ黒姫島に、十万両の軍用金がねむっている事実を知り、絵図面を手に入れて、旅することになったのである。

盗賊の徳兵衛が、その忠実な協力者になったのは、当然である。

絵図面は、徳兵衛の懐中に、在った。

顔十郎が、徳兵衛に救われたのは、偶然ではなかった。

さきに三島宿に来て、待っていた徳兵衛に、於与里が、かけつけて来て、顔十郎を救うように、命じたのである。

徳兵衛は、奔馬を駆って行く顔十郎のあとを追い、薩埵峠の阿弥陀堂で、死んだように倒れているのを、発見した、というわけであった。

顔十郎と徳兵衛が、道草を食い乍ら道中しているあいだに、於与里は、さきに備前国に入ってしまったのであった。

そして、運わるく、虫明の里に、黒姫島へ渡る者をはばむ郷士がいることを知らずに、そこへ降りようとして、捕えられたのである。

三

虫明の里の郷士柿森剛三郎は、つい数日前に手に入れた十七歳の百姓娘の、まだ骨のか細い肢体が、堅く閉ざしている青い実の殻を割るのに、ひどい苦労をしていた。

その小さな裸身のどこから、こんな力が出るのか、とあきれるくらいの必死さで、百姓娘は、

痛みに堪えかねて、二十貫もある剛三郎の巨軀を、押しあげるようにし乍ら、ずるずると牀をずり出ようとしていた。

「辛抱せい、辛抱せい。ほんの、ちょっとの間の痛みじゃ。……これを、辛抱せにゃ、女になれんわい」

十六歳から五十四歳の今日まで、四十八人の季女の殻を割ってやった、と豪語している剛三郎は、こうして、なだめすかし乍ら、徐々に、目的をとげるのを、唯一無二の快楽としていた。

ずり上った百姓娘を、また、もとの位置へひきもどすと、

「股から力を抜くのじゃぞ。ええか。……無心になって、念仏をとなえて居れい」

そう申しきかせておいて、人一倍大きなしろものをそこへ、あてがった。

あてがわれただけで、百姓娘は、恐怖の痙攣を起して、ずるっとずり上る。

「念仏を、となえんかい」

剛三郎は、少々苛立って来た。

その時、不意に、剛三郎は、おのれの腹と娘の腹が密着しているあいだに、なにか冷たいものが、すっと、さし込まれて来たのに悸っとなった。

「動くな！」

一喝が、起き上ろうとする剛三郎を、不動縛りにした。

さし込まれて来たのが白刃と知った剛三郎は、対手が天狗のような化生ものに思われて、視線を向けることができなかった。

音もなく忍び入って来て、密着している腹と腹のあいだに、白刃をさし込むとは、人間業とも思われぬ。

「昨日、お主が捕えた女を、とりもどしに参った者。殺意はない故、神妙にして頂こうかな」

その声音の穏かさに、剛三郎は、そっと、視線をまわした。

端座している対手の、異様に巨きな鼻が、目に映って、やはり天狗か、とぞっとなった。

「起き上って、娘を去なせるがよいな」

顔十郎は、白刃を抜きとった。

剛三郎は、しぶしぶ、身を起した。百姓娘は、網からはなされた小鳥のように、とびあがって、逃げて行った。

くそ度胸を据えた剛三郎は、大胡坐をかいて、

「貴公も、軍用金亡者か！」

と、睨みつけた。

「ま、そんなところだな」

顔十郎は、にやにやした。

そこへ、徳兵衛が、ひょっこり、顔をのぞけた。

「旦那、これから、於与里様のおともをして、黒姫島へ行って参ります」

「それは、許さんぞ！」

剛三郎が吼えるように呶鳴った。

「松木嘉門の後裔たるこの柿森剛三郎の、目玉の黒い限り、何者と雖も、断じて、島には渡らせん」

とたんに、顔十郎の剣が、剛三郎の股間へ突きつけられた。

「十万両と、その長芋と、どちらが大切であろうかな」

剛三郎は、やむなく、口をつぐまざるを得なかった。

「徳兵衛――」

「へい」

「わしは、顔は長いが、そう気が長い方ではない。ここで、この好色な郷士殿の守をし乍ら、お前たちの帰って来るのを、のんびりと待っては居れん。いい加減さがしたら、まっすぐに、方上浦のほうへ舟を漕いで行ってくれ」

「かしこまりました」

徳兵衛が、消えると、顔十郎は、剛三郎にむかって、

「さ、ひとつ、お手前が、数十年にわたって犯した生娘たちの味を、一人一人、披露して頂こうか。それとも、もう一度、あの娘を呼んで、実技を拝見いたそうか。いずれにしても、こちらは、あまりいい役ではない」

と笑ってみせた。

於与里と徳兵衛が、手ぶらでひきかえして行く姿を、顔十郎が、見かけたのは、姫路の城下の御番所の前であった。

顔十郎は、立場茶屋に、腰かけて、二人を見送った。

顔十郎には、黒姫島に、十万両の軍用金など、匿されていないことが、わかっていた。

閑谷聖堂に在った記録を読んだ時、それが、明白となった。千姫は、松木嘉門が、再び日本へ還らないことを、さとっていたのである。

山吹妻

一

京の町は、禁裏御所に向って行くのを、上る、と云い、御所から南に向って行くのを、下る、と云う。

これが、竪の通り筋である。その筋を右に、左に横切るのを、東に入る、とか、西に入る、とか云う。竪は南北、横は東西である。

稲荷山の松茸を盛った竹籠を頭にのせて、のんびりと、呼び売りして行く季節であった。
陽ざしは澄んで、風もないが、京独特の底冷えする空気であった。
顔十郎は、備前国から京に入り、仏光寺通にある知り人の宅へ立寄ってから、すぐに辞して、これから、まっすぐに、東海道にむかおうとしていた。
京洛には、顔十郎に対して、憎悪と怨恨を抱く者が、相当数いる筈であった。
この異相を、白日にさらして歩けば、たちまちに、かれらの耳に、とどくに相違なかった。
顔十郎は、平然として、歩いて行く。
襲撃して来たら、逃げるだけである。顔十郎は、この静かな美しい街に、敵が存在することなど、忘れていたかった。
行き交う婦女子たちが、みな、しとやかで、優しく見えるのだ。
——どうやら、わしは、色香に飢えているらしい。
いささか痴呆気分で、すれちがう婦女子たちの白い肌やら、裳裾からこぼれる赤いものを、愉しむのは、顔十郎としては、ひさしぶりのことであった。

京見れば　目になつかしきものばかり

ふと——。
顔十郎は、二間ばかり前を行く年寄の武士をみとめて、それにも、見おぼえのあるなつかしさをおぼえた。
杖にたよって、とぼとぼと歩むのが、やっとのようであった。

「ご老人——」
顔十郎は、追いついて、呼びとめた。
振りかえった顔は、まぎれもなく、五島列島の藩主五島左衛門尉の家臣松井週左衛門であった。
十五年前に、行方知れずになった主君の世嗣盛也を探しもとめて、諸国流浪をつづけている老人であった。
「おお、これは……」
老人は、たった一度、水口の旅籠で、相宿になった顔十郎を、忘れてはいなかった。
「お久しゅうござる」
下げた頭の、白髪をむすんだ髷が、いよいよ小さく、しなびていた。
「若君の行方は、まだ、見当もつきませんか？」
顔十郎は、訊ねた。
「それが……」
老人は、急に、悲しげな面持になり、
「いちど、大阪の、天神橋筋の河岸地で、わが主家の紋の入った印籠を携げた若い浪人者に、出会い申して……」
「若君の面影を、見られたか？」

「いえ、あまりに陰惨な風体をいたして居りましたゆえ、よもや、と疑いつつ、声をかけてみましたが……」

「……」

「和子が、あのような——斬取り強盗を働く無頼の浪人におなり遊ばしているとは、想像しとうもないのでござるが……」

それをきいた時、顔十郎は、ふと、気づいたことがあった。

「ご老人、五島家の紋は、丸の中に髑髏を描いてある、珍しいのでしたな？」

「左様でござる」

——かげろう左近が、その印籠を腰にさげていたな。

顔十郎は、思い出していた。

もし、かげろう左近が、この老人のさがしもとめる五島盛也であるならば、顔十郎には、納得しがたいことがある。

それは——。

清朝の皇太子黄親王が、日本へ連れて来られた事件に、かかわりを持った、顔十郎は、偶然、出会うたかげろう左近に、

「五島左衛門尉の屋敷に忍び入って、さぐってもらいたい」

と、たのんでいる。

その時、左近の顔に、微かな困惑の色が刷かれたものであった。

左近は、こたえて、

「おれが、お主のたのみをきくのは……実は、おれも小伜の頃、かどわかされた身の上だからだ」

云いすてて、歩き出していた。

瞬間、顔十郎は、この老人のことを脳裡に甦らせて、

——もしや？

と、疑ったことである。

しかし、その疑惑は、その場だけのことで、忘れてしまった。それというのも、その次に、会った際、左近は、五島左衛門尉に対面した報告を、眉宇もうごかさずに、たんたんとして告げただけであった。

もし、親子であったならば、左近は、その感慨を、かくしきれない筈だ、と顔十郎は、きわめて常識的な解釈をしていたのだ。

あかの他人であったから、左近は、平然として、五島家へ忍び入って、当主と面談できたのではないか。

しかし——。

いま、印籠のことをきいて、顔十郎は、

——やはり、あの男が、この老人のさがす若君であった。

と知った。

左近は、五島左衛門尉がおのれの父親と知りつつ、その屋敷へ忍び込んで行き、対座し、用件

をすませ、しかも、一言もおのれが何者か告げもせずに、もどって来たのだ。

「ご老人――」

顔十郎は、笑顔をつくると、

「関東へ参られるなら、それがし同行いたそう」

と、云った。

二

粟田口から山科へ抜ける坂路――日岡峠にある休み茶屋は、今日も、ひっそりと、陽だまりの中に、侘しいたたずまいをみせていた。

その檐下に、一個の印籠が、つりさげられてあったのは、偶然というよりも、一種の因縁というものであったろう。

永い旅に疲れた老人をともなって、ゆっくりと登って来た顔十郎は、ふと、その印籠に、目をとめた。

それには、丸の中に、髑髏を描いた紋があった。

「ご老人、あれを――」

顔十郎は、指さした。

一瞥して、松井週左衛門は、

「おおっ！」

と、驚愕の叫び声をほとばしらせた。

「こ、これは……あの若い浪人が、携げていた印籠でござる」

わななく手をさしのべて、印籠をつかんだ。

「おやじ――」

顔十郎は、呼んだ。

「おやじは居らぬか」

裏手から返辞があって、元岡っ引の道七老人が、姿をみせた。

「これア、旦那様、ようこそ、お見えでございます。お待ち申して居りました」

なつかしげに挨拶して、奥へ招じた。

「どうして、あの印籠を、ぶらさげているのだ、おやじ？」

「たのまれましてね」

「誰に？」

「てまえが、偶然のことから、お世話をした若いご浪人衆でございましてね。おお、そうでございます。去年、旦那様が、播磨の赤穂へ行くと仰言って、お立寄りになった際、恰度、奥で寝ておいでございました。……胸を患うて、高い熱を出してこの茶屋へ倒れ込みなすったおひとでございます。また、いつの間にか、姿を消しておしまいになりましてね。礼儀知らずのおひとだと、少々腹をたてて居りましたところが、ちょうど十日あまり前に、ふらりと入っておいでに

なって、また、そのまま、寝ついておしまいになったのでございます。どうも、からだの加減がいけなくなると、この茶屋に倒れ込みなさるのも、なにかの因縁でございましたろう」

「いま、奥に寝ているのか？」

「いえ、もう、おいでになりませぬ」

道七は、いたましげに、顔を伏せると、

「お亡くなりになりました」

「亡くなった?!　あの左近が……」

思わず、顔十郎は、その名を口にした。

「旦那様、ご存じ寄りでございましたか」

「うむ」

頷いてから、顔十郎は、ふりかえった。

松井週左衛門は、印籠をしっかと、両手でにぎりしめて、落間の床几に腰かけて、茫然と、街道へ、視線を放っていた。

週左衛門は、印籠がつりさげられてあるのを見た瞬間に、もはや、これを腰にさげていた人は、この世にない、と直感したのであった。

「遺言が、印籠を檐下にぶらさげておいてくれ――とのことでございました」

「誰が目をとめる、と云った？」

「いえ、なにも仰言いませんでした。てまえがうかがっても、返辞をなさらずに、ただ、ぶらさ

げておいてくれればよい、とだけ仰言いました」

この時、週左衛門が、われにかえったように、頭をまわして、

「おやじ殿。そのおひとは、おのが素姓について、何か申されなんだか？」

「いえ、なにも……。あ、思い出しました。てまえが、お国はどちらか、とお訊ねすると、海のむこうの、遠い島だ、とだけ仰言いました」

不意に、週左衛門が、印籠をつかんだ両手で、顔を掩うた。嗚咽が、その手のあいだから、洩らされた。

顔十郎は、暗然として、

――左近は、たぶん、この老人に、印籠を見つけられるのを、のぞんだのであろう。のぞみは叶えられたのだ。

と、胸の裡で、呟いた。

いくばくかの後。

顔十郎と週左衛門は、道七の案内で、裏手の林の中につくられた土まんじゅうの前に立っていた。

一本の卒塔婆と化したかげろう左近へ、じっと、視線をそそぎ乍ら、顔十郎の胸中は、微かに疼いた。

生涯二人とはめぐり会えぬ強い宿敵であった。痩身に刷いている陰惨な虚無の翳は、ただこち

らの気分を滅入らせるばかりか、人間の業苦というものに対して恐怖さえおぼえさせたものであった。

にも拘らず、顔十郎にとって、左近は、いつかまた、めぐり会いたい唯一の知己であった。

あの暗い姿は、もはや、この世に存在しないと思うと、こんなにも寂寥を呼ぶものなのか。

顔十郎は、週左衛門が、土まんじゅうにぬかずいて、もう四半刻も、微動もせずに、合掌しているのを、背後に彳ずんで、眺めていた。

やがて、立ち上った週左衛門は、鄭重に、道七へ礼をのべてから、顔十郎にむかい、

「遺髪と、印籠を持って、五島へ帰参つかまつる」

と、告げた。

「当人も、あるいは、それをのぞんで、印籠をつりさげてもらったのでござろうな」

「物心つかぬうちに、お母君を失われて、このじいめに、背負われて、いつも、浜辺で遊ぶのをよろこばれた和子でござる。遺髪と印籠を、海の見える丘の上に、埋め申そう」

そう云い乍ら、皺の深い頬を、いくすじか、泪が、つたい落ちるのをぬぐいもせず、不運な忠義の家臣は、遠く、故郷の海を思い浮べて、空を仰いだ。

三

顔十郎は、週左衛門と左右にわかれて、東海道を、帰路に就いた。

――ひとつ、のんびりと、矢橋舟で、琵琶湖を渡るか。

大津に入って、そう考え乍ら、黒門をくぐって、本陣、脇本陣、旅籠屋、立場茶屋の並んだ京街道に入った。

そのおり、後方で、あわただしい騎馬の音が、起った。

――来たぞ！

顔十郎は、直感した。

京の敵どもが、追跡して来たに相違ない。

顔十郎は、尻端折りになるや、例のぶざまな恰好で、走り出した。

浜通りを、あっという間に駆け抜けて、山伏湖岸にとび出した顔十郎は、恰度、旅客を乗せて着いたばかりの矢橋舟を、発見した。

ひとっ跳びに、舳に移った顔十郎は、棹を把るや、高灯籠の立つ石垣を、とんと、突いた。

「な、なんだ？　こらあ、舟どろぼう！」

旅客の荷をかついで、陸へ上っていた船頭が、血相かえて、喚きたてた。

顔十郎は、笑って、一両小判を、ぽんと抛ってやった。

「舟をかついで、東海道を道中はできぬ。安心せい。あとから、瀬田の長橋を渡って来れば、舟を返してつかわす」

顔十郎の姿が、草津宿の札の辻に、現れたのは、翌朝であった。

気が変って、

——こんどは、中仙道を行くか。

と、きめたとたん、

「旦那、やっぱり、東海道を行きやしょう」

横あいから、こちらの肚の裡をちゃんと読みとって、そう声をかけて来た者があった。

お祭り秀太であった。

「なんだ、お前か」

「なんだお前か、はないでしょう、旦那。こっちは、血眼になって、旦那のあとを追いかけて、東海道やら中仙道やらを行ったり来たり——おかげで、富士山てえしろものを、前後左右から、とっくりと拝ませてもらいましたぜ」

「べつに、追いかけてくれ、とたのんだおぼえはないぞ」

「そっちは、たのんだおぼえはなくとも、こっちは、義に勇み、俠に感ずりましていやすからね」

「なんだな、それは？」

「とぼけなすっちゃ、いけねえやな。あっしに、預けっぱなしの滅法綺麗な品があることを、忘れちゃいけませんぜ」

「ああ——あれか」

顔十郎は、長い頤を、なでた。

お祭り秀太は、顔を寄せると、

「女の執念は、怕うござんすぜ、旦那」

「わしを脅すつもりか、秀太」

「脅しまさあ。こっちは、空きっ腹で、大福をかかえさせられて、食うことはまかりならぬ、と命じられて、とうとう今日まで、我慢し通したんだ。脅したくもなりやすぜ」

「秀太、わしは、自分が、美しい娘から惚れられる、などということは、考えてみたこともないので、どうも、他人事のような気がするのだ」

「惚れられているか、いねえか、まあ、こんどばかりは、あっしに、おとなしく、従いて来なさることだ」

江戸も、内藤新宿辺にいたると、狐狸が出没する当時であった。そうしたもの淋しい武蔵野の林の中に、大聖院という古刹があった。

近年にいたって、その寺が名高くなったのは、紅皿の墓が発見されたからであった。

紅皿とは、太田道灌が俄雨に遭うて、立寄った家に住んでいた美しい乙女で、蓑を貸せと云う道灌に、山吹の花を一枝折って、はずかしそうにさし出した。

山吹のみのひとつだに、なきぞかなしき、という歌にことよせて、ことわったのである。歌心のない道灌は、その意が、わからなかった。

紅皿は、京女で、応仁の乱が起り、追われて、父につれられて、武蔵国高田の里に住んだ。父が後妻をもらい、妹が生れてから、紅皿の不幸がはじまった。継母が、紅皿を憎んで、ことごと

に、虐待したのである。

心やさしい紅皿は、それに堪えつつ、都雅たる美貌を増して、娘になるとともに、歌道にいそしむのを唯一の愉しみにしていたのである。

太田道灌は、山吹の花をさし出された意がくみとれぬままに、帰城した。老臣のうちに、中村治部少輔重頼という和歌に堪能な士があって、これをきいて、それは兼明親王が小倉の山荘で詠んだ歌の意を仮りて、蓑の用意のないことをしめしたのだ、と教えた。

道灌は、いたく慙じて、翌日、使者をつかわして、紅皿を招き、これを物言う花として、わがそばに置いた。

紅皿は、道灌が逝ったのち、剃髪して、浄照清月比丘尼と称して、道灌の菩提を弔った。

紅皿の墓が、草ぶかい朱引地外の大聖院の境内にあることは、誰も知らずに、数百年がすぎていた。

お祭り秀太が、顔十郎をともなって来たのは、その大聖院であった。

どこからきいて来たか、山吹乙女の話を、ベラベラ喋ってきかせて、

「ひとつ、紅皿の墓へ詣でていただきましょう」

と、墓地へ、案内した。

顔十郎は、いったい、なんのこんたんか、と不審のまま、秋風に鳴る高い欅の林をくぐって、雑草の枯れ立った墓地に出た。

——すると、

高さ三尺あまりの古びた板碑の前に、ういういしい丸髷姿が、うずくまっているのを、みとめた。

秋の花を供えて、祈っているのであった。

祈り了って、立ち上り、こちらへ向きなおったとたん、顔十郎は、目を瞠いた。

遊姫であった。

眉をおとし、鉄漿をつけ——匂うような若女房の美しさを湛えている。

にっこりして、近づいて来ると、

「お帰りなされませ。お待ち申上げて居りました」

と、挨拶した。

——これは、いかん！

顔十郎は、狼狽した。

——こんな美しい女房につかまっては、三日と経たぬうちに、この鼻の顔十郎、骨抜きにされてしまうぞ。

顔十郎は、咄嗟に、目蓋をとじた。

次の瞬間、くるっと、身をひるがえすや、脱兎のごとく走り出した。

走り乍ら、

——顔十郎よ、貴様は、なんと、色男以上の振舞いをして居るのだぞ。

と、自分に云いきかせていた。

（おわり）

解説

磯貝勝太郎

小説に登場し、小説の精神や理想をそのまま具体化して読者に伝える基本的な人物が主人公である。小説のストーリーは主人公を中心として展開し、作品が読者にうけるか否かを決定づける重要な人物なので、その性格や行動には明確な特徴を見出すことができる。時代小説の主人公は、大衆が理想とする美徳と能力をかねそなえた魅力的な性格をもち、社会に対してある種の抵抗をしめすスーパーマン的な行動能力の持ち主であることが望ましいので、社会秩序からはみ出したアウトロー的な存在で、剣のスーパーマンとして活躍し、異性から慕われる人物が理想とされる。ひとびとがこのような主人公を好む気持の裏には、根強い大衆の無力感、疎外感が潜在すると同時に、社会に対する不満や批判が鬱積しているため、スーパーマンの剣の一閃によって生まれる一種のカタルシスが、読者の現実のストレスからの解放をもたらすのである。

柴田錬三郎の代表作であるとともに、戦後の伝奇時代小説を代表する傑作「眠狂四郎」シリー

ズの主人公像には、類例のない個性と斬新さがある。転び切支丹のオランダ宣教師が、彼を弾圧した大目付を憎み、その娘を犯した結果として、この世に生まれた混血の眠狂四郎には〝出生の秘密〟という宿命的な暗さがあり、陰惨な生いたちゆえに、虚無的な人間として多難の人生を歩む。社会に対する反逆児でアウトローの虚無浪人、眠狂四郎が、無想正宗という名刀をふるい、円月殺法なる剣の妙技に長じた剣のスーパーマン仕立の人物となっていることも、読者をひきつける大きな要素である。眠狂四郎は円月殺法を使って、人を斬るが、狂暴性にかられてそれを為すのではない。催眠術応用の剣法なので、敵をして空白の眠りに陥らせ、斬られる恐怖をのぞいて、一撃をくわえる術である。したがって、敵には眠りを与え、おのれは人を斬るという無慚な罪の業念で、魂を疼かせる、いわば自虐の精神から生まれた剣法だ。彼はその自虐と悲惨な宿命に耐える、孤独で虚無的な翳のある人物なので、女性から慕われる。

本編「顔十郎罷り通る」の主人公、鼻の顔十郎も個性的な人物だ。宮仕えを好まず、孤単放浪の生活を送る素浪人の顔十郎は、出生にまつわる秘密をもっているが、それを気にせず、アウトロー的な剣のスーパーマンとして、女性に慕われながら生きてゆく。天狗のように鼻が高く、顎が長いので、顔の長さが常人の二倍もある異相の持ち主だ。このため、本名はほかにあるのだが、鼻の顔十郎と自称している。この異相の人、鼻の顔十郎は、柴田錬三郎の代表作、「眠狂四郎」シリーズの主人公、「剣は知っていた」の眉殿喬之介、「美男城」の御堂主馬之介など、美男剣士のスーパーマンが多いなかでは、きわめて異色な人物だ。美男剣士の場合と相違して、肉体的、身体的に欠点、ハンディキャップのある、変ったタイプの主人公が登場する作品では、平板

なストーリーが展開されていると、その人物の個性が生かされないので、そこには作者としての工夫を要する難しさがあるのだが、奇形的に高すぎる鼻、長すぎる顎をもつ顔十郎の人物造型のヒントは、フランスの劇作家、ロスタンの「シラノ・ド・ベルジュラック」、久尾十蘭の「顎十郎捕物帳」から得たものであろうことは、容易に想像がつく。

ロスタンの名作「シラノ・ド・ベルジュラック」の主人公は、鼻の大きな無類の醜男だが、権力に屈することなく、強者の奸悪をこらし、弱者の苦悩を救って百人の敵を敗走させる一匹狼の剣のスーパーマン。機智に富み、詩才豊かなので、おのれの醜い顔を詩の材料にすらして軽薄の士の度ぎもを抜く。決闘の太刀さばきにあわせて即興の詩を口ずさみ、「一足かわして、ちと競り合って、切り込み、誘って、えいこれでもか」、と相手を倒す。心にくいまでの武者ぶりである。やさしい心の持ち主であった彼は、絶世の美人に恋し、臨終にいたるまで、その思いのたけを告白することを、敢えてしなかった。この伝奇的なスーパーマンを中心として、十七世紀王朝時代の華やかな絵巻物が展開されている。擬古典的な華麗な文体、才気縦横な台詞のやりとり、ロマンティックな英雄主義などを特色とする、この名作戯曲は上演され、自然主義演劇に食傷していた当時のパリの観客を楽しませ、ロスタンの名声を一時に高めた。日本でも昭和二年、「白野弁十郎」として翻案上演され、大成功を得たのは、清純な恋と俠気というテーマが、わが国の観客になじみ深いためであろう。

久生十蘭の「顎十郎捕物帳」は、戦前戦後の数多くの捕物小説のなかで、傑作として定評がある。主人公の捕物名人、顎十郎は、目、鼻、耳、すべて額際にはね上り、アントニオ猪木よりは

るかに長い顎の持ち主なので、仙波阿古十郎という実名がありながら、顎十郎とよばれている。黒羽二重の素袷にはげちょろけた鞘の両刀をたばさみ、冷飯草履をはいて、のそのそと歩く様子は、よごれた黒羽二重を尻端折りにして、不恰好な歩き方で、のそのそと歩く顔十郎の姿そのものだ。自分の容貌の醜さにコンプレックスをもつ顎十郎は、目の前で何気なく顎を掻いた男を、抜き打ちに斬りつけたり、顎に膏薬を貼っている男をドブに叩きこんだりする。劣等感のかたまりのような顎十郎に対して、顔十郎は、鼻や顎のことをけなされても、怒らない対照的な人物として描かれている。

柴田錬三郎は慶応大学で中国文学を専攻したが、江戸文学、仏、英文学などにも造詣深かったので、西欧文学をふまえた近代感覚で時代小説を書く作家だった。例えば、「剣は知っていた」の主人公、眉殿喬之介という懐疑型の虚構人物の想は、シェイクスピアの「ハムレット」、喬之介と家康の娘、鮎姫の剣と恋の物語のヒントは、「ロミオとジュリエット」から得ている。柴錬の文学を貫く虚無思想は、メリメやリラダンの虚無思想の影響を受け、人間に対する孤独感は、ワイルドやボードレールの文学作品に根ざしている。柴田錬三郎のダンディズムは有名だったが、それは十九世紀以来の西欧文学から得て、身につけたものである。シバレンのダンディぶりは、ベストドレッサーに選ばれるほど徹底したものであったが、彼のダンディズムとは、おしゃれ、伊達ごのみといった外観的なことだけをいうのではない。注文原稿が殺到し、超多忙のときでも、決して「忙しい」という言葉を口にせず、顔に出さずに客と応接した。ひとたび自己に課した仕事は最後まで守り通している。過労で倒れて入院したとき、午前中は点滴、その効果

の表れる午後から原稿用紙に向かい、書き終えると、ぐったり寝込む生活を続けたので、その時の原稿は、〝点滴原稿〟とよばれて評判になった。そういった柴田錬三郎の生きざまを、真正のダンディズムというのである。その後、一時的に快方に向ったため、中断していた「復讐四十七士」の完結に新たな意気込みを燃やし始めた矢先、病状が悪化し、昭和五十三年六月三十日未明、急逝した。

柴田錬三郎は「死について」というエッセイのなかで、

「シラノ・ド・ベルジュラックではないが、不意に迎えに来た死神に対して、抵抗したところで、無駄である。せめて、シラノのごとく、死神も奪えない〝心意気〟だけはしっかり胸に抱いて、あの世に行きたい――」

と書いている。このエッセイで連想するのは、柴錬の好んだ「やがて死ぬ気色は見えず蟬の声」という芭蕉の句である。最期までダンディズムを貫き通し、自らの死を怖れなかった。それが柴田錬三郎一流の美学でもあったといえよう。

「顔十郎罷り通る」は、主人公の鼻の顔十郎をはじめとして、多彩な人物が登場し、重層的な構想による物語展開を特色とした長編伝奇小説で、「週刊現代」の昭和三十七年一月一日号から同年十一月十一日号にかけて連載された。

主人公の顔十郎は、埃まみれの薄ぎたない黒羽二重の着流しスタイルで、蟷螂のように痩せこけたひょろ長い足を、ぶざまに交叉させて、のそのそと歩く。その様はいかにもぶざまな恰好である。ところが、一旦緩急あれば、のっそりした動作は、相手の意表をつく敏速な行動となってあらわれる。遊姫の大名行列に出会った際に、顔十郎が演じた離れ業や、馬と疾駆できる顔十郎の駿足などは、飄々乎として、のっそりと歩く、彼の緩慢な動作から想像できないものである。剣の使い手としての技も神技に近い。例えば、発剣入鞘の術は、刀を抜いて鞘におさめるのが、そばで見ている者にもわからぬほどの迅速さであった。小さな親分、鉄太の射た飛矢を、さっと、片手摑みにしたり、刀の鍔で弾丸を受け、はじいたりする妙技を示す顔十郎は、平賀源内から習ったエレキテル操作の技術から占いの特技まで身につけている。このような万能タイプのスーパーマンの宿敵として登場する人物が、かげろう左近である。

顔十郎と同様に、さすらいの素浪人で、剣を手にすれば、顔十郎と相対抗して戦えるライバルの左近は、絶妙の剣技をふるい、時には大阪屋嘉兵衛の美人妻、お佐和の乳首を双つながらに切断したりする。剣の妙手の顔十郎も処女の美姫、遊姫の着物を、帯を解く手間をかけるのは面倒とばかり、佩刀を抜くや、縦に両断し、彼女を緋縮緬の襦袢いちまいの、悩艶スタイルにしてしまうほどのアクロバチックな剣技を見せる。二人は好敵手なのである。ちなみに、眠狂四郎も剣のアクロバットを演じる剣の使い手であった。美人の身にまとう衣服を裳裾から逆に斬り裂いたり、橋の下から姫君の股間にまで剣を突き入れたりする。作者の柴錬は、作中にアクロバチックな剣技やエロティシズムを投入し、読者へのサービスを忘れない作家であった。

顔十郎とかげろう左近は、放浪の素浪人で剣の使い手、宿命的なライバル同士なのだが、二人の性格は、陽と陰の違いがある。柴田錬三郎の作品には、〝出生の秘密〟にまつわる陰影を背負い、苦難にみちた宿命を生きる主人公が、眠狂四郎をはじめとして、多数、登場する。それが柴田錬三郎の文学のひとつの魅力であり、インテリの読者にも読まれるゆえんだ。顔十郎も出生にまつわる秘密をもつ宿命的な人物なのだが、性格的に陰影をおびず、どちらかといえば陽性タイプの人間である。かげろう左近は、出生の秘密をもたない人物だが、その名前のごとく、妖気めいたものを、かげろうのように身辺に漂わせて、あたかも生ける幽鬼に似た姿であらわれる。彼のこの陰惨な虚無の翳は、九歳のとき、作州浪人、宮本左馬之介に拉致され、行方不明となったのち、肺を病み、放浪の殺人鬼に身を落すという、不幸な人間の業苦から発するものであった。

五島列島の藩主、五島左衛門尉盛成の嫡子として生まれた利発な盛也（のちのかげろう左近）は、拉致された事件をきっかけとして、宿命的な苦難の人生を、放浪のうちに送り、彼を深し求める五島藩の祐筆・松井週左衛門老人に再三、出会いながら別離してゆく。放浪中に宿痾の肺を病み、浮世を捨て、殺人鬼と化した盛也の後半生は、陰惨で宿命的人生であったといえよう。これは典型的な貴種流離譚にほかならない。生まれの卑しくない人物が、身分を秘めて、幾多の艱難を克服しながら、流離、漂泊の生活を送るという、一種の英雄伝説（例えば源義経）にもとづく物語である。作者は自己の宿命観に、伝奇小説のひとつのパターンである貴種流離譚を結びつけ、かげろう左近という陰影のある人物を造型したのである。

この長編伝奇小説には、顔十郎と左近、二人の異色な人物が、意趣意恨があるわけではないの

だが、出会えば、なんとなく斬りあうことになるという、いわば因縁的な対峙の関係で描かれ、顔十郎が放浪の旅の道中を重ねる過程で、さまざまの事件に巻き込まれてゆく物語に伝奇物としての面白さが凝らされている。伝奇物とは、現実には起こりえないような怪事件の連続を、興味の中心とした種類の物語である。顔十郎は金でやとわれるが、仕官はせぬ、という自己の信条を貫いて、生きたいように生きている人間であったが、人に信頼される人柄から大目付の浅野図書に百両でやとわれ、公儀隠密が調べあげた抜荷の書類（大坂商人の密貿易の秘密を調べあげた書類）のあずかり役を引きうけたため、奸商の大阪屋嘉兵衛らの放った刺客群に追われる身となる。京で刺客を斬ったのち、京を遁げ出した顔十郎は、瀬田の長橋の袂で、背後に刺客の騎馬、前方に将軍家の第七女にあたる遊姫の大名行列が迫まり来るという窮地に追い込まれるが、一計を思いつき、橋上から転落したとみせかけ、遊姫の乗物に闖入する離れ業をやってのける。それを機縁に遊姫との因縁を生じた顔十郎は、彼女の行列にまぎれ込み、赤穂に赴き、好色大名、森和泉守を悶絶させたのち、島津斉彬派に加担する羽目に陥り、お家騒動の争いに関係する。その後、東海道の往復の道中で、美人妻をめぐる因果仇討、玉璽にからむ悪公卿らの共謀事件、黄親王（清朝の皇太子）をめぐる宗家の陰謀、末松家騒動など、種々の事件に巻き込まれてゆく。

天下無宿の野良犬とおのれを卑下する顔十郎だが、他人に慕われ、頼りにされる人柄なので、持ち前の俠気を発揮し、さまざまの事件に巻き込まれる結果となる。俠気肌だが、シラノ・ド・ベルジュラックほどの清純の士ではない。色情も旺盛、物欲も人一倍ありあまる異能のスーパーマン、顔十郎は、醜男だが、女性に慕われ、事件にかかわりながら放浪の旅を続けてゆくのであ

る。

この長編作品には、時代小説の重要なパターンである〝道中物〟の手法が活用され、貴種流離譚、仇討物語、埋蔵金さがし、お家騒動、剣戟描写など、伝奇小説に不可欠の要素が盛り込まれ、波瀾に富んだロマネスクが展開されているので、伝奇ロマンの楽しさを満喫させてくれる。

（昭和六十年十二月）

（文芸評論家）

顔十郎罷り通る 下
柴田錬三郎
© Eiko Saito 1986

講談社文庫
定価400円

昭和61年1月15日第1刷発行
昭和61年2月20日第2刷発行

発行者——野間惟道
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 （庫一）

ISBN4-06-183660-9 (O)

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の頂末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

講談社文庫 最新刊

瀬戸内晴美	愛の時代(上)(下)	京都嵯峨野を背景に展開するさまざまな愛のかたち。恋する者の心理を鮮やかに描く長編。	各380円
松本清張	湖底の光芒	美貌の未亡人が経営するレンズ会社の親会社が倒産したとき……小企業の現実を抉る長編。	480円
西村京太郎	太陽と砂	能に一生を賭ける混血青年とアフリカ砂漠改造を夢見る技師の野望と恋を描く青春小説。	360円
柴田錬三郎	顔十郎罷り通る(上)(下)	酒に博奕に女こそ、男子三つの快楽とうそぶく素浪人。柴錬の面目躍如、痛快伝奇ロマン。	各400円
早乙女貢	おれは藤吉郎(中)	天下布武をねらう信長の密命をおび、われらの藤吉郎は京へ上る！「新太閤記」第四巻。	380円
生島治郎	透明な牙	謎の日銀ダイヤの行方にからむ人妻との情事そして殺人事件。長編サスペンス・ロマン。	520円
中薗英助	モスクワ特急	モスクワへ疾走する特急の中の怪事件など、世界の各都市を舞台にしたスパイ小説八編。	440円
李恢成	禁じられた土地 見果てぬ夢1	祖国の〝冬の時代〟を生きる青春群像を、著者が全存在を賭けて描く大河小説。全五巻。	480円

表示価格はすべて定価です

講談社文庫 最新刊

宇野信夫	味のある言葉	言葉の達人が、感動した言葉、人生の味を深める言葉の数々を綴る。「しゃれた言葉」続編。	360円
山本七平 小此木啓吾	日本人の社会病理	現代日本の諸問題はどこから生まれたか。最高の顔合わせが日本と日本人を論じた名著。	480円
森　毅	ものぐさ数学のすすめ	数学の極意は創造的なサボリの精神だ。数学アレルギーを吹き飛ばす痛快な数学文化論。	440円
樋口清之	食物と日本人 日本人の歴史 2	日本人は世界に類を見ない雑食民族で、味に対する感覚も繊細だ。テーマ別日本史第二巻。	340円
鈴木健二	続・気くばりのすすめ	ちょっとした気くばりが、あなたと周囲を変える。熱い感動を呼んだ心と人生の教科書。	340円
尾崎左永子	おてんば歳時記	子供の遊び、女学生風俗、ハイカラ・ファッション。明治大正・東京山ノ手の女の暮らし。	380円
松谷みよ子編	昔話十二か月〈一月の巻〉	全国の質の高い話を月の移り変りに合わせて編集する日本昔話歳時記シリーズ、第一巻。	480円
わたりむつこ	はなはなみんみ物語	平和を求めて旅に出た、はなはなみんみの小人家族がくり広げる愛と冒険のファンタジー。	480円

表示価格はすべて定価です